# アフィニア日誌

皇　圭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アフィニア日誌

【Ｎコード】
Ｎ３６４８Ｚ

【作者名】
皇　圭介

【あらすじ】
あこがれの先輩に３度目の告白にしてＯＫをもらえたその日、彼は異世界に召喚されてしまう。「我々を救ってください」と詰め寄る黒ローブたち。え、なにこれ。俺ってば勇者？　え？　違うの？　そんなことより元の世界に返して。「先輩との仲はこれからなんだよ！？」　帰る当ての無い彼（？）の日常が始まる。

## ００話　「暗転」

学校帰り、一人土手を歩く。

その日は記念日になった。

夏休み前のその日、俺の顔はだらしなく笑み崩れていたと思う。

「～♪」

なにしろ1年間近く好意を抱き続けていた部活の先輩に、告白してやっとＯＫをもらったからだ。

恋敵（ライバル）は多く、その戦いは長く苦しいものだった。

告白は3回。

一度目は「あなたのこと知らないから」

自分の事を知ってもらうよう努力した。

2度目は「頼りない弟みたいにおもってるから」

頼りがいのある男になるよう、勉強も部活もがんばった。ついでに弁当で餌付けもした。

そして3度目「君には負けたよ。こんな気持ちにさせられるとは思わなかった」

「ふふふふふふ」

いや、気持ち悪いとかいわないで。だってしかたないじゃない！
幸せなんだもの！
今なら夕日に向かってだって走れる。
そう、どこまでだって！
先輩とのこれからの夏休みを想い。
ウエディングベルの鐘の音を聞き。
子供は何人がいいかなぁと完全に頭が湧いたところで。
目の前が真っ暗になった。
（え、え、え、何！？）
グラリと倒れる感覚。
顔面で感じた痛みとひんやりとした地面の感触が、その時感じた最後だった。

◇　◇　◇　◇　◇

「・・・・成功か？」
「・・・おそらく成功だろう」
まわりで聞こえる声。少なくとも一人二人ではない複数人の気配。

ぼんやりする頭を一生懸命働かせる。

（病院かな・・・？）

随分硬いベッドのようだが、そこに仰向けに寝かされている。
力を込めてみるが、腕どころか指すら動かせない。

（俺、いったいどうなって・・・？）

まったく自分の自由にならない体と格闘すること数分、なんとかまぶたを開ける事に成功する。
だが、そこにあったのは病院の白い天井ではなかった。

（え・・・なにこれ）

見えるのは岩肌。薄ぼんやりと照らされた岩肌が視界いっぱいに広がる。

（洞窟・・・？）

まったくわけがわからない。
何故、自分がここにいるのか。
なんでこんな所に寝かされているのか。

（夢・・？）

とにかく、情報がほしいとばかりに唯一自由になる目であたりを窺う。

うわ、なんかいっぱいいる。

寝かされた自分を囲うように、黒っぽいローブを着た人がいっぱい。
うわ、目が合っちゃたよ。
「おお・・、お目覚めになられた・・・！」
騒がしくなる周り。
何がなんだかわからない。この状況で体一つ動かせないなんて怖すぎる。
（夢、夢、夢、これは悪い夢）
まぶたを閉じれば夢が覚めて、先輩とのハッピーライフが始まるのだ。
現実逃避ぎみの俺。
だがそんな事など関係なしに状況は進む。
「お目覚めの気分はいかがですか？エメランディス様」
黒ローブたちの集団を割るように、濃い化粧の女が現れる。
３０代前半といったところだろうか。
いや、それよりも・・・。
（エメランディスって誰・・・！）
俺？俺が呼ばれてるの？何故何どうして？
「目覚めたばかりで混乱されるのも無理はありません」
「ですが、我々の話をどうか聞いていただきたいのです」

混乱する俺のことなどほったらかしでどんどん話を続ける女。
わけがわからないなりに理解した事は、

今、彼ら（黒ローブたちね）は悪逆非道な者たちによって滅ぼされそうになっている事。
起死回生として、太古の禁呪を使い俺をこの世界に呼び出した事。

「どうか、我々を救ってください」

待って、待って、待って。
これってもしかして。
小説とかでありふれたアレ？
魔王で勇者なファンタジーもの？

もしかして魔王とか倒さないと、もとの世界に戻れない？
ってか、ここ異世界？異世界なの！？
日本でないの？地球でないの？

先輩との甘々な恋愛生活が！！！！

（いぃぃーーーやぁぁぁーーーーー！！）

声が出ないので心で絶叫。
やっとのことで告白ＯＫもらって、その日の内に異世界召喚だなんて。
天国と地獄だなんて。

（ひどすぎる！！！！！）

だが、状況はこれで終わりではなかった。

突然、ザワザワとさわがしくなる周囲。
そしてガチャガチャという音と、一際大きな声。
「全員つかまえろ！一人も逃がすな！さからえば殺してもかまわん！！！」
え、何？悪い奴等、もう来ちゃったの？
魔王とか、倒されるまで城で待ってるもんじゃないの？
俺、体動かないよ？どうするの？というか、どうしたらいいの！？
その後はもう、大混乱としか言いようがなかった。
物が倒れる音とか、ガチャガチャいう音（どうやら金属鎧の音らしい）、ドシュッとかいうなんかやばげな音、助けを求める声、そして悲鳴。
（先輩、先輩、先輩・・・！）
目をつぶって現実逃避を続けていた俺は、いつの間にかあたりが静まり返っていたのに気づく。
そして、ゆっくりとこちらに向かって来るガチャガチャという音。
（ち、近づいてくる・・・！！！）
その音が止まった時、恐怖に俺は思わず目を開いてしまった。
そして目に映る、返り血に染まった金属鎧と真っ赤な剣（つるぎ）。
（ひいいいいいいいいいいい！！！）

気絶しなかったのを褒めてもらいたいぐらいだ。
今まで１６年生きてきて、これほどの恐怖を味わったのは初めてだ。

「ム・・・！どうやら怯えさせてしまったようだな」

騎士風の男はそう言って剣（つるぎ）をどこかにやると、にっこり笑ってきた。
正直に言うと怖かった。
何か、無理して笑い顔を作っている感じが。

「まったく、こんな年端もいかぬ娘を生贄にしようなどと」

娘？生贄？
何いってんの？？？？？？？

騎士に抱き上げられた俺に見えたもの。それは、俺の体だった。

自由に動かないその体は・・・ちっちゃな女の子のものだった。

## 01話　「記憶喪失」

「本当に間に合ってよかった」

騎士はそういって俺を抱きしめる。

男に抱きしめられる趣味などないが、体が動かないのだから仕方がない。

というか、鎧についた返り血とか付くからやめて。

血が、血が、血が！

（・・・・）

いや、現実逃避はもうやめるべきだろう。

現実を見つめなければ前には進めない。

だとしても、だ。

（なんで女の子になってんの！！？？）

体が動かせないから見える範囲で確認するかぎり、4、5歳ぐらい。

幼稚園レベルの幼女だ。

ストレートの長く青っぽい髪も見える。

勇者で魔王がファンタジーのはずなのに。

幼女に生贄ってなに。

もういやだ。先輩の所に返して！！

「隊長」

若い騎士がやって来た。

「どうした」

「制圧はほぼ完了しました。ですが、われわれの把握していない隠し通路があったようで」

「逃がしたか」

「4、5人ほどです」

話しこむ騎士たち。

というか、こいつ隊長だったのか。

「首謀者は逃がしましたが、コイツは回収できました」

若い騎士は手の中にある本を振ってみせる。

黒い立派な装丁の分厚い本で、とっても高そう。

「邪神召喚の書か」

「ええ。なんとか使われるのは阻止できましたね」

「まったく邪教徒どもは度し難い。それで、この娘の両親は」

「残念ながら」

え、ちょっと待って。

この娘が生贄で。

ここに俺がいるってことは・・・俺が邪神？

いやいやいや。俺はただの高校生ですから！善良な一市民ですから！！

何かの間違いですから！！！

「まったくこんな物があるから、いらぬ騒ぎが起こる」
「ええまあ」
「燃やせ」
「いやでも魔術師ギルドに確認を取ってからでないと」
「かまわぬ燃やせ」

待って、もしかしてそれって大事な物じゃないの？

主に、俺があっちの世界に帰るために！！

「わかりましたよ」

若い騎士はため息一つついた。
近くにあった篝火の中に投げ込まれる真っ黒な本。
パチパチと音をたてて燃え尽きていく。

（あああああああああああ・・・）

俺の意識はそこで途切れた。

◇　◇　◇　◇　◇

（ここどこだよ）

次に目覚めた時に見えたものは、天蓋つきベッドだった。
わずかにだが、首を動かすことができた。

（おお・・・、少しだけだが体が動く）

あとは指先ぐらいか。しかしなんだ、このベッドは。
やわらかすぎて体が沈みこみそう。でも柔らかいのに適度な芯がマットに入っているようだ。
ただ高価（たか）そうだなー、という感想しかでてこない。
庶民ですので。

（夢じゃなかったか）

どうしたらいいのか。
そもそも、もとの世界に帰れるのか。
でも俺、今、女の子なんだけど。帰っても女の子？

というより元の俺の体、今どうなってんの？

何もかもわからない。
情報、情報がほしい。

せめて体だけでも動いてくれたら・・・！

（先輩、待っててください・・・）

もう一度、周りを見渡そうとしたとき、その音は聞こえた。

コン、コンと2回。

（ノック？）

「失礼するわね」

視界の片隅に映っていた扉が開き、２０代後半と思わしき女性が入ってくる。

髪は薄いブラウン。全体的にほっそりしていて、何が楽しいのかその顔には笑顔が浮かべられている。

彼女はニコニコしながらベッドに近づいてきて・・・俺の視線とぶつかった。

「起きたのね。体は大丈夫？」

それに答えようとして、俺は気づいた。まだ、声がでないことに。

「あ・・・・、・・・あ・・・・」

彼女はにっこり笑うと「いいのよ」と言った。

「まだ無理をすることはないの。ゆっくり、ゆっくりとね」

頭をゆっくりと撫でられて、眠気が襲ってくる。

どうやら体はまだ睡眠を欲しているらしい。

その手に安心を覚え、俺は再び意識を手放した。

・・・・結局、言葉を話せるようになったのは2日後だった。

◇　◇　◇　◇　◇

この2日間、世話になりながら聞いたところによると、この女性の名は『クリシュティナ・オクスタン』といい、この屋敷の奥方らしい。

そして、この屋敷の主人は救出隊の騎士の一人だそうだ。

（たぶん、あの人だろうな）

一人の騎士の顔が浮かぶ。

血まみれの姿しか見ていないせいか、このいつも笑顔の女性の旦那さんというのが、こうなんというかイメージが湧かない。

しかしながらこのクリシュティナさんは非常に面倒見がいい。この屋敷にはメイド（そうメイドだ）も何人かいるようなのだが、俺の世話は必ず彼女がしてくれる。

早くに母親を無くした俺にとってみれば非常にくすぐったかった。

「喉は乾いてない？お水飲む？」

「退屈じゃない？絵本でも読んであげる」

「こんな服はどうかしら。やっぱり女の子なんだから、かわいい服を着たほうがいいと思うの」

構いすぎな程だ。

その様子から思うことがあったが、あえて指摘はしなかった。

その日の夕方、その男が帰ってきた。

「いくつか報告と質問がある」

まだベッドから移動できない為、それは俺の寝ているところで行われた。
例の騎士（やっぱり予想通り隊長だった）とクリシュティナさんと俺。３人だけだ。
旦那さんの名は『ベルフェ・オクスタン』というそうだ。

「まずは君の両親のことだが」

母親は亡くなりましたが、父親は元気ですよー、と思ったが理解した。

この体の、この女の子の両親。

「残念だが、二人ともお亡くなりになられた」

あの黒ローブどもめ。怒りが湧く。

「その時の事、何か覚えているかね」

知らないし、答えられるわけがない。どうすればいいんだ。
とりあえず、首を横に振る。

「・・・確かにショックな事だからな。覚えていなくても仕方がない」

とりあえず誤魔化せたか・・・？

「では質問を変えよう。どこの国から来たのかわかるかね？」

何？地元民じゃないの？国って、この国の名前すら知らないよ！
また首を横に振る。

「ご両親共々、旅の途中で巻き込まれたようだな。運のない事だ」
「あなた、その言い方は・・・」
「ム・・・。すまない悪かった」

こちらは小娘なのにきちんと頭を下げて謝ってくる。
好感度アップだ。

「一時的に記憶を失っているのかもしれんな。確かにこの年齢の子供にはショックが大き過ぎる」
「・・・・」
「では、せめて名前ぐらいは覚えてないか？」
「あ・・・、の・・」

名前って、本名言うわけにもいかないし。
もう首を横に振っとけ。

「そうか・・・。だが、名前さえわからんとなるとどうするべきか・・・」

いやほんと、どうしたらいいんでしょうね・・・。

「だったらあなた」

クリシュティナさんはポンと手を打ち合わせる。

「記憶、そう記憶が戻るまで家であずかったらいかがでしょう」

さも今思いついたように言う。
でも俺にはなんとなく、そう言い出すんではないかと思っていた。

「いやしかし。・・・だが・・・」
「ね、お願いあなた」
「・・・」
「ね、お願いあなた」

ベルフェさんはこちらに向くと、言いにくそうに訊ねてくる。

「あ・・と。名前がないと不便だな。まあとにかく、君の方はどうだろう、記憶が戻るまででもいいから、この家で暮らさないか」
「あの・・・、えっと・・・」

どうするべきか。もとの世界に帰る事は決定でも、とりあえずの寝床はほしい。
帰り方を探すにしても拠点は必要だ。

「・・・ご迷惑でなければ・・・」

がばっ、という効果音が出そうなぐらいの勢いで抱きついてくるクリシュティナさん。

「だったら、ね、ね」
「どうした」
「とりあえずでもなんでも名前は必要だと思うの」
「それはそうだが」
「わたしが付けてもいい？」

ベルフェさんは重いため息をつくと、こちらをちらりと窺う。

俺もコクリと軽く頷く。

「いいだろう」

「とっってもいい名前があるの」

それはね。

「アフィニア。アフィニア・オクスタンというの。素敵でしょう」

## 02話　「家族」

この家にお世話になるにあたって、ひとつ注意しなければならない事がある。
それは俺が、俺であることを気づかせてはいけないという事だ。
なぜならば、彼ら騎士たちは儀式が失敗したと思っている。
よく聞いてみれば、やはりあの黒ローブどもは邪神を信仰する狂信者たちで、邪神を召喚することによってこの国を、延いては世界を破滅させようとしていたという。
呼び出されるはずだった邪神の名は『終末の破壊神エメランディス』。
世界の終わりに現れ、太陽を飲み込み、月を飲み込み、最後に大地を飲み込むのだとか。

どれだけでかい口だよ、とあきれるが神話に文句をいっても仕方がない。
どちらにしても俺は破壊神ではない。
親戚にそんなおかしい人はいなかったし、地面とか食べる人もいなかったはずだ。

とにかく自分は破壊神とかではない。
では何か。
おそらく・・・、単なる想像に過ぎないが、あの黒ローブたちの儀式自体は成功していたのではないだろうか。
そして最後の最後に、まちがい電話をかけてしまったのではないか。
破壊神さんの自宅ではなく、この俺に。

そして俺はこの世界に呼ばれてしまった。
魂だけで。

この体の持ち主の魂は、あまり考えたくはないが、俺がこの体に入った衝撃で弾き飛ばすか押しつぶすかしたのだろう。別に俺のせいではないはずだが・・・罪悪感を感じる。

とにかく、もし俺が俺であることがばれてしまったら命は無いだろう。
事情を話した所で、納得などしてもらえそうにない。
だいたい何と言えばいいのだ。

「私は破壊神ではありません、別の世界の善良な一市民です。単なる間違いで呼ばれただけで、ちっとも邪悪ではないですよー」

とでも言えばいいのか？
自分で言ってて無理だとわかる。

なので俺は、無害な一少女を装う。
背中がむずがゆくなるが、こればかりは仕方ないだろう。

「クリシュティナさん、おはようございます」
「おはよう。昨日は良く眠れた？」
「はい、ありがとうございます。おかげ様でぐっすり眠れました」

まだベッドから立ち上がれない俺に、甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

「いいのよいいのよ、気にしないで。アフィニアちゃんはしばらく

この家で暮らすのだし遠慮なんかしちゃ駄目でしょ？」
「いえ・・・でも・・・」
「うん、まだ遠慮があるわね。あの・・・ね、お母さんって呼んでみない？クリシュティナさんって呼び方、なんとなーく余所余所しいでしょ？」

いや、余所余所しいもなにも他人だと思う。

「いくら覚えてないといってもご両親が亡くなられたばかりだし、不謹慎だと思うけれど」

でも出来れば呼んで欲しいな。
言葉には出さないが、何か圧力を感じる。

「お・・・お・・・、おか・・・、おか・・・」

小さいころに母親を亡くした身としては、母親経験値が不足ぎみなのだ。
レベルが高すぎる。

「おか・・、おか・・・か、母（かあ）さま」

何が違うのかはわからないが、この言い方なら俺の中の羞恥ゲージの上昇が低い。
『お母さん』は無理だ。

「んー、それでいいと思うの」

ＯＫが出た。

「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」
「・・・」
「そのかわり、父さまの事も、父さまと呼ぶのよ？」

今、二回言ったよね。
なんというか、・・・か、母さまは押しが強い。
いつもニコニコして争い事とか避けて通りそうなのに。
騎士の嫁っていうのは、押しが強くなければなれないものなのだろうか。
それとも、なったから押しが強くなったのか。
卵が先か、にわとりが先か。

「・・・と、父さま」

はい、よくできました。

柔らかい手で頭をなでなで。
なんという幸せ空間・・・！駄目だ、抵抗しないと。

（俺には、元の世界に帰って先輩とイチャイチャするという野望が・・・！）

帰るために情報を集めるどころか、まだ満足に体も動かせないのですが。

（今はとにかく、動けるようになるのが先決か）

◇　◇　◇　◇　◇

「まさか、こんなにかかるとは」

あの後、結局時間をかけて押し切られてしまい、正式な養女になってしまった。

幼女の養女だ。

ごめん。物を投げないで。

彼女を・・・。クリシュティナさんを、母(かあ)さまと呼んでから1年。

自由に動けるようになるにはそれだけかかってしまった。

（もう先輩、俺の事なんて忘れてるだろうな）

告白ＯＫした日に相手が失踪だなんて、どう思われているだろうか。

いや、わずか、本当にわずかの可能性だが、元の世界とこちらの世界では時間の流れが違うという可能性がある。希望を捨ててはいけない。

それが例え、ほんの小さな可能性であろうとも。

まあいい。

しかし、ここまで回復に時間がかかるとは予想外だった。

病気とか、体力がないという話ではない。

医者の説明によると、体内の魔力が色々ぐちゃぐちゃになっていたそうだ

魔力・・・魔法。

火球(ファイアーボール)とか隕石召喚(メテオストライク)とかもあるんだろうか。

あんなのもあるのか。
あるんだろうな。魔力があるんだから。
話が逸れた。

とにかくそのせいで、体の意思伝達システムが麻痺していたらしい。
その上あまりにも複雑になっていたため、自然治癒しかないといわれたのだ。

これはあれか。
俺の魂のせいか。

何しろ、自分は破壊神なんぞではないとわかっているものの、少なくとも間違われるぐらいの存在。
１０分の１、いや１００分の１だとしても、この娘の体にとっては途轍もない負担だったのだろう。
だから、本来の魂を弾き飛ばした上、こんな体になってしまったのだろう。

あくまで予想だが。

動けないのならば、と言う事で、母（かあ）さまや父（とう）さまに色々教わることにした。
知っておいて損はないだろう。
俺には目的があるのだし。
ベッドの上で寝たきりでもやれる事はあるはずだ。

たとえばこの国の事。今いる場所の事も知っておかなければ。

この国の名は『ジンバル王国』。
海に面した、それなりに大きく豊かな国という事だ。
国境を接する国は３つ。
テューレ、アーリス、ノアの３国。
ここ１０年ほどは戦争も無い。
平和な事だ。

平和万歳。

話が逸れるが。
ここ一年、ベッドに寝たきりで分からなかったのだが。

こちらの世界にはお湯につかる、という習慣は無いらしい。
普通は湯で体を拭くか、水風呂のようだ。
川が近ければ、それで済ます人も多いのだとか。
たしかに、お湯を沸かすというのは大変な仕事かもしれない。

気候的に、この世界は総じて凍死するほど寒くならないので、それで問題ないという事だ。
元の世界ではシャワーが中心だった俺でも、入れないとなるとお湯を張った湯船がほしくなる。
これはなんとかしないといけない。

寝たきりの間はどうしていたかって？
母さまに、湯に浸した布で拭いてもらっていたさ。
羞恥プレイだが、動けないので抵抗はあきらめた。
家族のスキンシップだ。

トイレ？聞いてくれるな。

そういえば学ぶなかで知ったのだが。
なんとエルフやドワーフといった種族もいるらしい。
俺が勝手に言ってるだけで、エルフやドワーフといった名前ではないが。
耳長族とか、小人族とか言うらしい。
魔獣とか魔法生物とかいるらしいし、ファンタジーだ。

さあ行こう、夢と魔法と冒険の世界へ。

もう来てるけどね。
ただ、俺にかなりの魔力がある事を知った母さまが、魔法の訓練をしてくれることになった。
その方が治りが早いらしい。

今使えるのは初級も初級、明かり（ライト）の呪文だ。
はじめて成功したときには感動したね。
魔法だよ、魔法。
母さまによると、俺は筋がとってもいいそうだ。

なんでも話によると、母さまは魔術の研究施設に勤めていたらしい。
実践よりは研究メインで、大魔術士とかではないそうだが。
そこで当時、警備主任の騎士だった父さまと知り合ったとか。

のろけられた。

まあでも、その話を聞く内に予想が当たっていた事が判明した。
やはり、父（とう）さまと母（かあ）さまには子供がいないらしい。
それも、生まれてから亡くなったのではなくて、もとからいない

のだ。

どちらかだろうとは思っていたのだが。

するとこのアフィニアという名前は、いつか子供が出来たときのためにずっと温めていた物なのだろうか。・・・母さまに秘密を持っているのはとても心苦しいが、打ち明けられるたぐいの物ではない。

元の世界に帰るのは決定事項だが、はたして俺はこの新しい両親と笑って別れられるのだろうか。

「母(かあ)さま、今日は新しい呪文を教えていただきたいのですが」

「明(ライト)かりはもう完璧だし、そうね、加速(クイック)レベルCなんかはどうかしら？」

「どんな呪文なのですか？」

「対象は自分だけだし、短時間だけど1．2倍のスピードで動けるようになるのよ。腕とか」

「それはすごいです」

その時にならないと分からない事だし。

・・・考える必要は無いのかもしれない。

今は、まだ。

## ０３話　「初めてのお出かけ」

「父(とう)さま母(かあ)さま。準備は出来ましたか」

１年以上ベッドに寝たきりの生活だったのだ。
このお出かけを多少楽しみに思っても仕方が無いだろう。

いや、すごく楽しみだ。
先ほどの問いかけを１０数回してしまうほどには。

そういえば、こちらの一年は元の世界より短い。
なんと３６０日なのだ。

誤差の範囲だろうとは思うが、やはり別の世界なのだと実感。

「・・・待たせたな」
「お待ちどおさま。そうしていると、やはりあなたも年相応ね」

年相応・・・！

今なにかヒビが入った気がした。
主に俺のプライドとか、とか。

「あなたは妙に大人びた所があるから。そういう所が見れて、わたしはうれしいわ」

誕生日などわかるはずもなかったので、母(かあ)さまを母(かあ)さまと呼んだあの日を誕生日とした。
年齢は５歳。

本当の所はわからないが、そう決まったのだ。

そして先日の誕生日で6歳となった。
屋敷をあげてのパーティーで、身分の上下も気にしないお祭り騒ぎだった。
日頃見かけるメイドさん（そうメイドだ）や御者さん、父さまの部下の人とか。
ずっと前に見た、あの若い騎士さんもいた。
どうやら、まだ下っ端のようだ。

まだ出世してなかったんだね。

ただ、この身分をあまり気にしないのがこの家だけなのか、世間一般かどうかはわからない。
要検証、である。

準備が出来たのならば、と馬車にて出発する。
目的は王都である。
そうはいっても長旅にはならない。
朝に出発すれば、馬車でゆっくりいっても昼前には着くのだ。

だが、俺の興奮が冷めることは無い。
話には聞いていても実物を見るのは初めてなのだ。

異世界の町並み！
人とは異なる亜人種たち！
まだ見ぬ食材！（これは微妙に違うか）

そんな俺を母さまも父さまも微笑みながら見ている。
ちょっと幼かったかもしれない。

いや、年齢的にはいいのか。

6歳といえば小学校一年ぐらいだしな。

王都に着くまでまだ距離はあったが、馬車の窓から異世界の風景を堪能した。

◇　◇　◇　◇　◇

「そこは人種の坩堝(るつぼ)でした」

数時間の馬車の旅も終わり。

待ちに待った王都だったが、やはり凄かった。

確かに人の多さという意味では現代日本のほうが上だろう。

だが、なんというか混沌さがこちらは勝っているように思う。

整理されてないからこその活気とでも言おうか。

（すげえ、エルフだ）

皮鎧に身を包み、数人の仲間と談笑する姿はもろにゲームの世界だ。

たぶんあれが母(かあ)さまに聞いた、冒険者なんだろう。

キラキラした目で見ていると、こちらに気づいたのか手を振ってきた。

こちらも手を振り返す。

おうおう、何ガンつけてんだこらぁ

というのはなかったか。
6歳の女の子相手に凄む奴はさすがにいないか。
あまり、キョロキョロし過ぎて迷子にでもなったら恥ずかしい。
ここは親孝行のためにも手を繋ぐべきであろう。

ベルフェ父さま。そのお顔は少々、だらしないですよ？

◇　◇　◇　◇　◇

その日、俺達親子は目一杯楽しんだように思う。
母さまには洋服屋を何件も連れ回された。
自分のは選ばずに全部俺のだったのだが。

「ふふ、アフィニアはなんでも似合うわね。選びがいがあるわ」

まさか、着せ替え人形の気分をリアルで味わうハメになるとは。
母さまの楽しそうな顔をみていると、嫌とも言い出せない。
体が女になっただけでは買い物は楽しめないらしい。
父さまも苦笑してたしな。

初めて食べる果物の味に驚き。
他国の民芸品を手に取り。
大道芸人たちのパフォーマンスを楽しみ。

大通りを人ごみの中、家族の会話を楽しんで。

そしてそれは起こったのだった。

それは衝撃。
横合いから突然飛び出してきた人影に体当たりされ、俺はゴロゴロと転がった。
当然ぶつかってきた方も俺に巻き込まれてだ。
いや、俺が巻き込まれたのか？

少しぶつけて頭が痛いし、手や足に多少の擦り傷はできたかもしれないが。
とりあえずは無事だった。
だが。
そこでぶつかってきたヤツに対して怒りが湧いてくる。
こんな人が一杯いるところで走っていい速度ではなかった！

思わず素で文句を言おうとして固まった。

（ダークエルフ・・・！）

いや、エルフなんて名前ではなかったか。
確か耳長族。
するとこれは黒耳長族とでもいうのか。
でもそれだと耳だけ黒そうだ。
だったら耳長黒族か？

どうでもいい。
もうダークエルフでいいや。
そのダークエルフは銀髪に褐色の肌の・・・。
自分と同じぐらいの少女だった。

「えと、大丈夫？」

少し頭でも打ったのか、どうやら意識が朦朧としているようだ。
しかし、周りの人も冷たい。
あきらかに見ているのに無視している。
こちらの世界にも他人に対する無関心とかあるのか。

しかし、と思う。
随分薄汚れた格好の子供だ。

親はどこにいるのだろう。

「ほら、立てる？」

手を差し伸べる俺。
だが、少女が俺の手を取る事はなかった。

「・・・」

脅えた表情の、その少女の視線を目で追って。
ヒゲづらの汚らしい大男とご対面することになった。

「いいか、小娘」
「・・・あ」

「このガキの首輪が見えないのか？他人の奴隷に手を出したら何されても文句はいえねえぜ」

首輪？首輪ってなんだ？

母さまは奴隷なんて・・・。

この世界に奴隷制度なんてあったの？

「アフィニア、こっちに来なさい」

父さまの声。そっちを見ると青ざめた母さまの姿もある。

こちらにこようとしているのを、父さまが押しとどめている。

「おおっと、貴族の嬢ちゃんでしたか」

父さま母さまを見ると途端に卑屈になる男。

「家の奴隷が迷惑をおかけしまして」

「・・・」

「ほら、おまえも謝るんだ」

無理やり少女を這い蹲らせると、頭に足をのせ踏みにじる。

そして、ところかまわず蹴りはじめる。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい」

頭が真っ白になった。

その時、自分がなにを考えたのか後になっても分からない。

ただ、とっさにダークエルフの少女に覆いかぶさっていた。

そして感じる脇腹への強い痛み。
鍛えてもおらず、一年間もベッドの上で暮らしていた俺には庇う事さえ出来なかったようだ。
先程のように・・・今度は一人で転がっていく。
まったく無様だ。

聞こえる母さまの悲鳴。

「アフィニア、アフィニア・・大丈夫!?」
「ちっ」男の舌打ち。

「貴族さん、今のはオレが悪いわけじゃねえぜ?」
「わかっている」
「じゃあ。オレはこれで」

少女を連れて行こうとする男。

「・・・ま」待ってと言おうとした俺の声に被るように、父さまの声が聞こえた。

「待て」
「貴族さんといえども、規則には従ってもらわねぇと。奴隷をどうしようと、持ち主の勝手、それが法さぁ」
「それもわかっている」
「文句は聞かねえぜ。規則を守らせるのがあんたらの仕事だ」
「いくらだ」

父さま・・・!

「金貨6枚、いや諸経費あわせて7枚になるなぁ」
父さまを値踏みする男。
あきらかにこちらの足元をみている。
「いいだろう。持っていけ」
父さまの手から金貨を受け取る男。
「へへへ・・・、毎度ありー」
下卑た表情を浮かべて去っていく男。

結局、自分は何も出来ないまま終わってしまった。
何がしたかったのかもわからないまま。

場を収めたのは、父さまと金貨の力だった。

◇　◇　◇　◇　◇

帰りは行きより人数が増えた。
でも空気はとっても悪かった。

ダークエルフの少女も脅えていたが。
まあ無理も無い。

母さまの機嫌がとっても悪かったのだ。

年甲斐もなく、ほっぺを膨らませているのはどうかと思うが、今回は悪いのは自分の方だから仕方ないだろう。やった事の善し悪しはともかく、心配かけたという一点において全面的にこちらの敗訴が決定してしまう。

「母さま、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げる。

そして必殺の上目づかい＋涙目。

これは滅多に使われない、ゲージを2つも使う超必殺技だ。

ゲージの名前は羞恥ゲージだ。

だが・・・。

クッ、これに耐えるというのか。

いつのまに抵抗値が上がったのだ。

だがほっぺがピクピクしている所を見ると、もう少しで壁は突破できると見た！

「もういいだろう。そのぐらいにしておいてやれ」

父さまのフォロー。

「おまえもちゃんと反省したな？」

「うん。もう無茶な事はしない」

「アフィニアもこう言っている。許してやれ」

「もう。わかりました。でももうこんな心配させないで」

母さまがにっこり笑ってくれた。

やっぱりこの笑顔だよなー、と思いつつ眺める。

あれ？俺、いつのまにかマザコンになってないか？

思い当たる事はたくさんあるが、今は女の子だからいいよねと納得する。

でも。これからやろうとしている事を言ったら怒られるんだろうな。

たぶん。

## ０４話　「お勉強の毎日」

「君の名前を教えてほしいな」

両手で彼女の手を握り締め聞いてみる。

同姓相手には効かないかもしれないが、首をかしげながらのにっこり攻撃だ。

おや？褐色の肌がピンクになってる。

なかなかおれもつみつくりなおとこだ。

中身以外は女の子だがな。

しかし、この自分の体はかなり容姿レベルが高いようだ。顔も整っているし、髪も暗青色（ミッドナイトブルー）というのかとても神秘的だ。

色については詳しくないので、それっぽく言っているだけなのだが。

「・・・シャーリーオール」

「うん、いい名前だね。僕の名前はアフィニア」

よろしくね。

ダークエルフの少女は僕に釣られるように笑ってくれた。

ああそういえば。ダークエルフのこちらでの種族名は『闇族』。

黒耳長族でも、耳長黒族でもなかった。

耳長族の仲間には入れてもらえないらしい。

肌の色以外、いっしょなのにな。

◇　◇　◇　◇　◇

この世界で生きていく為には我慢しなければならない事がある。
そもそも、戻る方法さえ分からないのでは諦めるしかないが。
たとえば。
それは、読みかけの小説の続きであったり、ＴＶ番組だったりと色々だ。

娯楽が少ないのは仕方がない。
何しろ中世ヨーロッパのような世界だ。
携帯もなければゲームもない。
あるのは本ぐらいだ。
だが紙は高価なものではないが、活版印刷などないこの世界の書物とはすべて手書きだ。
手書きである以上、手間がかかる。
なんでも、本の内容を書き写し、複製するという職業もあるそうだ。
それはそれとして、初めて書物を見たときに気づいた。

文字を読めないことに。

会話が成立しているのだからここの言葉は日本語だと思っていたのだが、そうではなかったらしい。
どうやら、頭の中で翻訳がなされているようだ。
どうして、とか何故というのはこの際置いておこう。

少なくとも考えたところで、今、答えが出るものではないからだ。
母(かあ)さまと実験したところ、耳から入った言葉は、たとえそれが普段使われない古代魔術語であろうと理解できた。能力としては、知性体の発した言語が耳に入ったときに、それが理解できるというもの。
そして、母(かあ)さまによると俺はこの世界の言葉を喋っているらしい。
少なくともそう聞こえるという事だ。
よく分からないが、元の世界におけるテレパシーのような物ではないかと思う。
鳥とか、馬と話せるかも、と思って試したが無理だった。
あくまで人、それに近い知性のあるもの限定らしい。

そういったわけで日常生活には害がないものの、本が読めないというのは困る。
元の世界に帰るためには、調べなければならない物がたくさんあるのだ。
たとえばあの『邪神召喚の書』。
あれは失われてしまったが、もしかしたら複製(レプリカ)がどこかにあるかもしれない。
そもそも、あれがオリジナルだったとは限らないのだ。

みつけても　よめないものでは　しかたない。
字余り。

そんなわけでお勉強だ。
ベッドで寝込んでいるときから続けているが、あまり苦にならない。
特別、勉強が好きというわけではなかったはずだが、教えてくれるのが母さまだというのもあって、どんどん知識を吸収していった。

まずは文字。
文字一つ一つの意味を覚えた。
これは単純作業なのでこれからも努力しかない。

つぎに貨幣制度について。

ここは日本のように円（えん）ではなく、通貨単位は『シラ』。
一番価値の低い、骨でできた骨貨（コッカ）、続いて銅貨、銀貨、金貨、魔晶貨の計５つ。
話を聞いたところ、だいたい骨貨一枚＝１００円といったところで、これが最小単位の１シラ。
この骨貨が５０枚で銅貨となり、銅貨が２０枚で銀貨になる。
そして、銀貨１０枚で金貨。つまり、金貨１枚１万シラで、約１００万円の価値をもつ事になる。

つまり、シャーリーオールは金貨７枚だから７００万円ということになる。
奴隷制度の善悪とかそういうのを抜きにして。
あれぐらいの年齢の少女奴隷は相場としては本来は金貨４，５枚ぐらいらしい。

やっぱり足元を見られたようだ。

奴隷制度についてはひとまずは考えない。
こちらの世界に俺の常識を押し付けても仕方がない。

で、金貨の上に魔晶貨というのがあるが、これは通常では出回らないものらしい。
価値的には金貨３０枚で、魔晶貨１枚になる。

魔晶貨1枚で３０００万円か。すげえ。

（しかし、母さまも疑問に思わないのかな？）

あきらかに、こちらの世界の一般常識が抜けている俺を怪しんでもしょうがないと思うのだが。

色々おかしなところもあるし。

言葉とか。

ショックで記憶の混乱とかいうレベルじゃない。

だがまあ愛されている、という事なのだろう。

ありがとう母さま。

次に社会制度。

まあ、学生の俺はそこまで詳しくないし間違っているかもしれんが、この世界は中世封建制っぽい物で成り立っているらしい。

つまり王がいて、諸侯（つまり貴族ね）に領地とその保護を与え、かわりに忠誠を誓わせている。

貴族の下に騎士がいて、貴族も彼らの生活を保障し忠誠を誓わせているそうだ。

爵位の階級は７つ。

王・公・侯・伯・子・男・士で、王は王族のみ。

父さまは騎士爵ともよばれる士爵で、戦功著しい者に与えられる一代限りの物らしい。領地と呼べるものはなく屋敷を主君に貰い、給料によって生活する。領地と爵位を継げるのは長男のみなので、次男・三男は外に出て騎士となるしか道がないそうだ。後は他家への婿か養子か。

ベルフェ・オクスタン士爵、つまり父さまは貴族の配下ではなく、王族直属の騎士との事。

まあ、継ぐべき領地がないというのは良い情報だとおもう。
もしそうなっていたら、婿養子とか取らされていたかもしれん。
他にも色々ならったがそれは追々語りたいと思う。
いっぺんに沢山書いても仕方ないしな。

ところで途中からはシャーリーオールも一緒に勉強する事になった。
母さまの提案だが、どうやら父さまも母さまも彼女を奴隷としては扱う気はないらしい。
もともと屋敷にも奴隷はいなかったし、奴隷制度についてあまり好意的ではなかったようだ。。
どうしても、元の世界の常識が抜けない俺としては好ましい限りだ。
最初は戸惑っていた彼女も、今ではすっかりとこの屋敷に打ち解けている。

俺にはどうかって？
まあ、言う必要も無い事だな。
何しろ彼女は、俺専用のメイドさんだし。
しかも自分から志願してのメイドさんなのだ。

そう、ダークエルフのメイドなのだ。

屋敷の仕事を手伝いたい、と言う彼女をとりあえず俺のお世話係に任命したわけだ。
母さまが。
まだ7歳だしな。

そういえば、彼女は名前が長いのでシャーリーと呼ぶ事にした。

「アフィニア様、ここが分からないのですが」
「どこ？」
「ここなのですが」
「ああ、これはね・・・」

様付けはどうかと思うが、最初はご主人様だったのだ。
名前を呼んでほしいという、俺のお願いを受け入れてくれたのだ。
実際、彼女を救ったのは父さまで俺ではないのだから感謝されても面映い。

だが彼女と仲良くなるというのは歓迎だ。
なにしろかわいいしな。

ロリコンではないよ？
だって彼女は1歳年上なのだ。
今は。

・・・というより今は同性だった。

◇　◇　◇　◇　◇

そういえば、俺が学んでいる魔法についてもここに書いておく。

魔法。
それは、呪文と呪紋を用いて世界に自らの意志を反映させる技。

魔法を使うためには、正確な呪紋を描く事が必要なのだ。
まず、杖の先でもって空中に魔力で紋(しるし)を描く。
これは呪文ごとに決まっており、対応した呪紋でなければならない。
なぜなら、これは魔法の設計図であるからだ。

そして、この呪紋をカギとして『世界に言うことを聞かせる』。
そして呪文は呪紋を補強する。
呪文といっても、魔法そのままを口にするだけだが。
だが、言葉にする事によって、・・・たとえば、そう「炎の矢(フレイムアロー)」という言葉に込められた、それを使用するのだという意志。
それに呪紋の炎の矢(フレイムアロー)の設計図が合わさりやっと世界を変えることができるのだ。
『炎の矢が飛んでいるという現象』が現れた世界に。

そのため魔法は得てして効果が短い。
一部とはいえ、『世界に言うことを聞かせる』ことはそれほど難しい。
そして呪紋は融通が効かない。
この呪紋は、描く魔力さえあれば誰が使おうと、どれだけ魔力が多い大魔術士だろうと。
呪紋が同じならば、効果も威力も同じなのだ。
なぜなら、呪紋という設計図の中に効果も威力も描かれているのだ。
強力な呪紋ほど、描くのに膨大な魔力が要るのは確かだが。
シャーリーもこの魔法という物に興味を引かれ、ともに学んでいる。

授業態度もかなり真面目だ。
「アフィニア様は、私が守ります」
などと言ってくれる。
一度、ダークエルフなんだから精霊魔法とか使えないの？　と、聞いてみたが、母（かあ）さま共々不思議そうな顔をされた。
どうやら精霊はこの世界にはいないらしい。
ダークエルフというのも俺が言ってるだけだしな。

◇　◇　◇　◇　◇

「計画の第３段階～」
第１と第２がどれだったか忘れたが、とりあえず次の計画だ。
それは体を鍛える、である。
シャーリー事件の時に、まったく良い所が無く母さまに心配をかけるだけだった俺。
反省はした。だが。
このままでいいのか？
いや、いいはずがない！
外はともかく中身は男の子。
やってやろうではありませんか。
と、いうわけで。

「父さま、僕に剣術を教えてください」
「駄目だ」
「・・・」
「そ、そんな目で見ても、だ、駄目だ」

必殺技を使ったのに駄目とは。
最近、使用頻度が多かったか。
父さまも母さまも抵抗を覚えたようだ。
何らかの新技の開発が急務かもしれない。
現存の技の更なるパワーアップでもいい。

まあいい。
今は、手持ちの戦力で戦い抜こう。

「どうして駄目なんですか？」
「おまえは女だろう」
「はい。でも女騎士というのも前例が無いわけではないそうですよ？」
父さまは苦り切った顔をする。
「妻がいったのか？」
「はい。母さまも分かってくれました」
もう一押しか。
「父さま、僕は花嫁修業でもして、さっさと嫁に行けとおっしゃるのですか？」

「おまえは嫁にやらん！！」

ふふふ。

そう言うと思った。

こちらの世界の父親もやはり同じのようだ。

父さまはまだ悩んでいたようだが、やがてため息をついて頷いた。

「だが、怪我をするかもしれんぞ。何しろおまえはまだ６歳なのだから」

「はい、父さま。ですから父さまにお願いしているのです」

再びにっこり。

「父さまのことなら信用できますから」

「ぐ・・・」

ふふふふふ、これで断れるハズがない。

「わかった。だがわしは厳しいぞ」

「覚悟してます」

「おまえは本当に６歳なのか・・・？」

「もちろんそうです」

父さまと視線が絡む。

「まあいい。おまえは良い娘だ。ならばそれだけでいい」

ありがとう、父(とう)さま。

## ０５話　「魔獣」

「・・・ィニア様」

声が聞こえる。

「・・・アフィニア様、起きてください」

暗闇をかきわけ、光に向かって泳ぐ。
ぼんやりと開けた目にはダークエルフのメイドさんの姿が映る。

「もう、朝ですよ？早く起きないと怒られますよ？」
「ん～、あと５分・・・」
「５分ってなんですか・・・？」

おお、そういえば、一時（いっとき）という言葉はあるが、分とか秒とか無かったな。
こちらの世界には・・・。
日時計という物はあるが、あまり時間に縛られてはいない。
朝が来れば起きて、暗くなれば寝る。

「まったく寝ぼすけさんなんですから」
「・・・シャーリー、朝のこのわずかな時間は金貨１０枚を払ってでも得たい貴重な物なんだよ」
「何言ってるのか、わかりません」

むう・・、せっとくがむりならじつりょくこうしだ。

あふぃにあはだーくえるふのしょうじょにだきついた！

あふぃにあはすばやいうごきでふとんにひきずりこんだ。

「え、あ・・・ま、待ってください。そ、そこは・・・さわっちゃダメです！　まだ心の準備が・・・」

「・・・おやすみー。ぐぅ」

「・・・・・・・」

「・・・ア、アフィニア様？」

「・・・ええっと、どうしよう？」

◇　◇　◇　◇　◇

我が家には2頭立ての馬車がある。

当然、馬車があるのだから馬を飼っているだろう。

ウマ目・ウマ科の動物である。

ウマの様な生き物なのかもしれないが、そんな事は気にしないことにした。

ヒツジなどもいるようだし。

家には黒鹿毛（くろかげ）が1頭と栗毛が3頭いる。

何が言いたいのかというと、馬って大きい、である。

普通の人にとっては当たり前の風景も、異世界人である俺にとっては驚きの連続だ。

馬なんて元の世界でもテレビでしか見た事がない。

馬車に乗ってお出かけするときに見た事はあったが、こうして間

近で見るのはまた別の趣がある。

「馬の世話を見るのは、そんなに面白いですか？お嬢様」

馬小屋にて馬たちの世話をするのは、御者さんであるところのライズさん。

さきほど馬の散歩から戻ってきたばかりである。

今現在は馬の汗を流し、ブラシをかけているのとの事。

ライズさんは現在２８歳という事だが、彼は屋敷に勤めるメイドさんの１人、フィオレさんの旦那さんだ。

なんでも２人は若いころに駆け落ちしてきたところを、父さまに拾ってもらったのだとか。

紳士然としたライズさんにも情熱的な時代があったのだな、と感心したものだ。

馬の世話を何とはなしに眺めていると、屋敷の方から誰かが歩いてくるのがみえた。

「すまぬ、ライズ。馬を用意してもらえぬか」

やって来た父さまは、複合鎧（プレートメイル）に身を包んだ完全武装だった。

俺の姿を見つけると、物凄く嫌そうな顔をする。

「父（とう）さま、お出かけですか？」

「連れてはいかんぞ」

「・・・父（とう）さま」

うろたえる父さま。

父さまは、こんなに顔に出やすくていいのかと思う。

それとも娘限定なのか。

「と、とにかく今回は危険なのだ。連れて行くことは出来ん」
「えー」
「とにかく駄目なものは駄目だ」

むむ・・・手強い。

「隊長、準備は終わりましたか？」
「まだだ。もう少し待ってくれ」

新たな登場人物。
あれは・・・父さまの部下の新米騎士さんではないですか。

「いや、もう新米ではないからね」

若い騎士さんが苦笑する。
うお、口に出してた。
とりあえず、にっこり笑って誤魔化す。

「おはようございます、カレルさま」
「いや、俺の名前カインだから。君、ワザとやってるだろそれ？」
「いえ、そんな事はないですよカインさま。ところで、どちらに行かれるのですか？」
「アルミナ湖だよ。魔物が出たとの報告があったのでね」
「おい、カイン！」

もう遅いですよ、父さま。

「父さま。見てみたいです」
「駄目だ。遊びではないのだ」

「将来のためにも、本当の戦いという物を見ておきたいのです」
「まだ早すぎるだろう。もっと経験を積んでからでも遅くはない」
む、単独での突破は無理なようだ。
ならば。

「カインさまは良いと言って下さいますね？」
「え・・・？いや、オレは・・・」
「魔物が出るとの報告を受けただけ。なら、絶対に会うかどうかも分かりません」
「そ、そうかな？」
「もう他の所に行った可能性もあります。でなければ、こんなに父さまがのんびり準備などしているはずがありません」

父さまの苦々しい顔。

「でしたら後学の為に、騎士の普段の活動を見学させていただいてもよろしいではないでしょうか」
「そ、そうかもしれないね」
「はい」

にっこり笑顔。伊達に毎朝、鏡の前で研究をやっているわけではない。

「い、いいんではないですかね、連れて行くぐらい」
「というわけなので、連れて行ってください父さま」
「いや、しかし」
搦め手も駄目か。
使いたくは無かったが、ここはもうこれしかないか。

「・・・ええと、後で湖に散歩に行きたくなったりしたら困りますから」
「・・・・！　今回だけだぞ」
「父さま、ごめんなさい。でもありがとう」
「・・・湖では、わたしの指示には絶対に従うこと。それが条件だ」
「わかりました」

湖に向かうにあたって、俺は父さまの後ろに乗る事になった。
乗馬経験などない俺にしてみると、とにかく高くて怖いの感想しかない。
顔に出すと置いていかれるので平静を装う。
同行する騎士は2人。
カインさんと、初めて見るそれなりに経験を積んでいそうなタロスという騎士だ。

「報告があったのは昨日だ。すでに移動している可能性が高い」
3人とも胸には、赤の地に金色の『8本足の蜥蜴』の紋章が描かれている。
目が印象的に描かれた変な蜥蜴だが、いわゆる伝説の魔獣との事。
この紋章が父さまが隊長である騎士団のマークだ。
「だが、もしもという事はある。十分に注意するように」
アルミナ湖は馬の足で2時間というところにあった。
東西1km、南北0．5kmほどの楕円形の湖で、森に囲まれた中にある。

魔物を見たとの報告は、この湖を利用している漁師のからのもので。
見かけただけでまだ誰かが襲われた、という事では無いらしい。
「馬はここに残し、わたしとカインで湖の周りを見回る。アフィニアはここでタロスと待機だ」
２人はすぐさま準備にかかる。
馬は木立に括(くく)り付けておくようだ。
「タロス。もし魔物が襲ってくる様な事あれば、馬をエサにして逃げろ」
「は、わかりました」
「アフィニアの事、頼むぞ」
「命に代えても」
父(とう)さまとカインさんは歩いていってしまう。
「待機か」
「何か言われましたか？」
「いえ何も、おほほ」
父(とう)さまの指示に従うのが条件だしな。
今回は魔物見れないか。
仕方ない。
手の中にある、母(かあ)さまから貰った３０ｃｍ程の杖を眺め。
俺はこの暇になった時間を、魔法の練習に当てると決めた。

◇　◇　◇　◇　◇

「そういえばタロスさん。ここに出た魔物ってどんなのですか？」

父(とう)さま達が出発してから、もうすぐ2時間ほ経つだろうか。

俺は時計が無いのでまったく分からないが、タロスさんには日の在る位置でだいたい分かるそうだ。

お腹も減ってきたし、もう昼時なのだろう。

「ダークハウンドだそうです」

その知識なら、ある。

大型犬サイズの青黒い犬で、目は血の色をしている。1匹では大したことない魔物だが、複数となるとそれなりに厄介な魔物だ。

それでも、並の冒険者や騎士にとってみれば初級クラスの魔物(モンスター)である事は否めない。

わりとあっさりと、連れて来てくれたと思ってたけど。

初級の魔物なら、という判断もあったという事か。

杖によって、空中に次々と呪紋が描かれる。

「明かり(ライト)」
「感覚強化(フィーリング)」
「魔法の矢(マジックアロー)」

このタロスという騎士は、あまり話しをするタイプではないようだ。

話しかければ答えはあるが、それだけだ。
職務に忠実という事なのか。
そうして、もう一度話しかけようとしてそれに気付いた。

「タロスさん！　危ない！」

それに気付けたのは、感覚強化（フィーリング）の魔法のお陰だった。
だが、だからといってあまり状況に変化はなかった。
タロスさんは突然現れた巨大な影に一撃され、俺のほうに転がってくる。

「魔獣サラディオル・・・！」

タロスさんの驚愕に満ちた声。
その名前は・・・知識にはない。
だが、その威圧感だけで並の魔物（モンスター）とは一線を画す存在である事は明白だった。

前の世界でのゲーム知識で当て嵌めるなら、コカトリスのアレンジといったところか。
頭に鶏冠（とさか）こそ無いものの、鳥のような体、トカゲの足と尾。
鳥の部分はアヒルのように見えるが、こんな２ｍを超す大きな生き物をユーモラスだなんて思えない。
それが２頭だ。いや、２羽っていうのか？

「タロスさん、大丈夫ですか！」
「とっさに身を躱（かわ）したつもりだっだが、躱（かわ）しきれなかったようだ」
「・・・今、回復呪文を」
「君は逃げなさい。お父様もそう言っていただろう」

タロスさんの言葉を無視して回復(キュア)呪文をかける。

「残念ですが、僕ではこれぐらいしか治せません」

「ありがたいが、もう逃げなさい」

「父さまは、馬をエサにしろとは言いましたが、あなたをエサにして逃げろとは言ってませんでした」

「しかし」

「・・・来ます」

2羽の内、小さめの方が襲い掛かってくる。

タロスさんは、何とか体を起こし迎え撃つ。

「援護します！」

初級しか使えないとはいえ、俺だって魔法使いだ。

やってやるさ！

呪紋を描く。

「魔法の盾(マジックシールド)」

短い時間だが、半透明の魔法の盾が、敵の攻撃を受け止めてくれる呪文だ。

だが。

もう1羽が襲い掛かって来たら、それで終わりだ。

タロスさんはよく戦っているが、ダメージも完全には回復していない。

・・・？

・・・何で襲い掛かってこない？

・・・。

・・・・・・！

そうか！　こいつら親子で・・・これはアレか！

「タロスさん！　この2羽はおそらく親子です！」

「それが！　何、だ！」

サラディオルと言う名の魔獣は、幅の広い黄色い嘴で攻撃してくる。

タロスさんは何とか剣で防いでいるが、足や尾などもたまに使ってくるので油断できないようだ。

「おそらく、練習させてるんですよ！　子供に狩りを！」

「・・・そういう事か！　なら、あの大きい方は子供が不利にでもならない限り襲ってこないか！？」

「確証は無いですけど」

呪紋を描き、初級の回復呪文を唱える。

「回復（キュア）呪文」

「だとすれば！　わたし達がやるべき事は隊長が戻って来るまでの時間稼ぎか！」

「はい！　もうすぐ父（とう）さまは戻ってこられます！」

たぶん。

## 06話　「新発明？」

戦い終わって。
残ったのは、報告のあった魔物（モンスター）とは別の、レベルの違う大物の死体だった。

タロスさんとの共同戦線、激しい戦（バトル）いの相手、あの魔獣サラディオルは。

結局、数十分後に帰ってきた父（とう）さまとカインさんによって、あっさり倒されたのである。
もう少し遅ければタロスさんは危なかっただろう。
それほどの怪我を負っていた。

だけど・・・、父（とう）さまは強かった。
そうでなければ、戦功著しい者に与えられる士爵などに叙されるはずがないのだが。
それよりも意外だったのはカインさんだった。
魔獣の親の方は父（とう）さま、子供の方はカインさんがほぼ1人で倒してしまった。

「カノンさま、お強かったのですね」

心底驚いた表情をつくる。

「いや、それ失礼だから。あと名前、君、やっぱりワザとやってるだろそれ？」
「お約束は大事です」
「いや、意味分からんから、それ」

俺、これでも若手Ｎｏ．１なのに、とかいう声が聞こえるが、とりあえず放っておいて父さまの所へ向かう。
父さまは今だ厳しい顔をしたままだ。

「アフィニアか」
「はい、父さま」
「何故、逃げなかった？」
「でもそしたらタロスさんは・・・」

ふう、とため息をつく父さま。

「そんな事は関係がない。我々は騎士で、わたしの家族とはいえお前は民間人だ」
「・・・はい」
「連れて来たわたしの判断ミスもあるが、おまえは襲われたあの時、逃げるべきだったのだ」

確かに父さまの言う事は、正しいのだろう。
だが。

「無理です」
「・・・アフィニア」
「僕は父さまの娘です。だったら、どれだけ間違っていようとあれが僕の唯一つの答えです」
「・・・そうか」
「はい」

「・・・命だけは粗末にしてくれるな。クリシュティナにも顔向けできん」

うん。心配させた事だけは間違いないんだよね。
「父さま、ごめんなさい」
「うむ。・・・だがタロスが助かったのはお前のお陰だ、ありがとう」

にっこり笑うことで返事をする。

これで、一つ目のお話が終わった。
これから二つ目だ。

「それで父さま、この魔獣の死体はどうするのですか？」
「どうもせん。ここで放置すると、また魔物が寄って来かねないから森の奥へでも捨てるつもりだ」
「では父さま。屋敷に持って帰ることは出来ませんか？」
「こいつの肉は、独特の臭みがある。不味いぞ？」

肉の臭い消しには、牛乳に漬けてから調理をすればいいと聞いたことがあるが。
それも試してみる、として。
だが、目的は肉ではない。

「少しばかり、やってみたい事があるのです」
「何か考えがあるようだな。ならば、近くの村で荷馬車でも借りるか」
「はい。お願いいたします、父さま」

魔獣の柔らかそうな羽毛を眺めつつ。
もう一度回復呪文をかけるために、タロスさんの所へ向かった。

◇　◇　◇　◇　◇

魔獣の死体から羽をむしる作業は、あまり楽しいものではなかった。
言い出しっぺなので文句を言う筋合いはないが。

肉は後で料理してみるとして、今の目的はこの魔獣からむしった『羽毛（ダウン）』と『羽根（フェザー）』だ。
俺はこれで、羽毛布団を作るつもりだ。
いや、羽毛だけでは難しいから、羽根布団か。
一つ作るのに、羽毛だと１００羽分ぐらいいるはずだ。
元の世界で調べた事があるため、多少は詳しい。
調べた理由は忘れたが。

こちらの世界では、まだ羽毛というものが利用されてないようなのだ。
普通は布を何枚か重ねて被るか、あっても羊毛布団だ。
羊はこの世界でも毛を刈られ続けているらしい。
母（かあ）さまの話だと、こちらにも数が少ないながら水鳥はいるようだが、飼育はされていない。
飼育してみてはどうか、と思う。
鴨肉はうまいし、羽毛布団の大量生産なんかも頭に浮かぶ。

元の世界の技術について考えてみる。
あの、こちらの世界とは比べ物にならない位の技術力。

だがこうしてこちらの世界に来てしまって思う事は。
道具を便利に使えても、仕組みは知らないと言う事。
ブラックボックスだ。

自動車は便利だ。携帯も。テレビや、パソコンにインターネット。
カメラもあればいいと思うし、他にもいろいろあるのだろう。
だが。
それを、こちらで作るとなったらどうやればいいのか、検討もつかない。

時計は、歯車がいっぱい入っているぐらいにしか分からず。
そもそも電化製品など、電気の作り方が分からなければ使用できない。
ダイナマイトとか、この世界の戦争を一変させそうだが、導火線に火をつける所しか思い浮かばない。
火薬の作り方とか、硫黄ぐらいしか材料知らないし。

なので、多少でも前の世界の情報が生かせて俺はうれしい。

結局、俺はこの日の数日後、屋敷の皆に手伝ってもらって羽根布団を数枚完成させた。
出来としては、まあまあといった所だったが俺は満足し、さっそく包(くる)まって寝た。

後日、この羽根布団の1枚を父(とう)さまが王様に献上したため話題となり、貴族や商人たちの雇った冒険者達が、水鳥や魔獣サラディオルを求めて国内を徘徊するという事態が発生した。
影響力というものは恐ろしい。

（・・・・・・）

魔獣サラディオルの肉の方だが、臭みは多少消えたものの調理法に悩み。
結局、片栗粉に付けて単純に唐揚げにしてみた。
自分ではイマイチだったが。
屋敷の皆には、それなりに好評だったようだ。
こちらの世界に来て初めての料理は、とりあえず成功だった。

それと、こちらの世界には揚げるという調理法がなかったらしい。
これも新発明だろうか。
今度は、天ぷらなども試してみたい。

そして。
ダークハウンドの事をすっかり忘れていたのを思い出したのは数日経ってからだった。

◇　◇　◇　◇　◇

俺は元の世界に帰るつもりだ。
なので、自分にいくつかの規制（ルール）を課した。

その一つが俺と僕の併用である。
この日誌においては『俺』を使う事。
もともと俺は自分のことを俺と言っていたのだ。何の問題もない。
だが問題なのは、美少女になってしまった外見の方である。
こんな美少女が、俺だ何だと言っていたら変に思う奴がいてもお

かしくは無い。
俺だって変だと思うしな。

だからといって、『私』などとはいえない。
それが当たり前になってしまったら。
元の世界で、男に戻った俺が、『私、○○なの。うふふ』などと言ってしまったら。

（・・・・・・）

だからこその『僕』の使用である。
僕ならば、元の世界にもいた。
ボクっ娘である。
まあ、あれはカタカナだったかもしれないが。
書いていて気付いた。

まあ、さほど違いはないであろう。

そして規制（ルール）は後、２つある。
気持ちよくこの世界に、お別れする為だ。

一つは、母（かあ）さまと父（とう）さまを大切にする事。
色々感づいてるだろうに、何も言わない両親に感謝するばかりだ。
あと、この屋敷にいる人達も大切にしたい。
家族だと思ってもいいぐらいだ。

もう一つは、この世界で親しくなった人を見捨てない事。
困っていたら助けてあげたい。
後悔を持ったままこの世界を去りたくは無からな。
あくまで自己満足だが、それでもいい。

◇　◇　◇　◇　◇

「シャーリー、こんな事までしなくても・・・」
「いえ、アフィニア様。やらせて下さい」

ここはお風呂。
なぜかシャーリーが背中を流してくれる事になったのだ。

この世界でお風呂というと水風呂が普通だ。
お湯につかる習慣はなかったようだが、俺が魔法でお湯に変えて入浴しているうちに、屋敷ではそれが当たり前になってしまった。
それでも、長時間浸かるのは俺ぐらいらしいが。

中世ヨーロッパの人々は、風呂嫌いだったという話を聞いたような気がする。
それで、匂う体臭を香水で誤魔化していたとか。
こちらの人達が、風呂嫌いでなくて良かった。

中世ヨーロッパの人も、風呂嫌いなのは宗教的な理由があったらしいが。

まあ、お風呂だ。
作りは日本的な風呂に近い感じがする。
西洋風呂など入った事などないが。

「でも、どうして今日に限って一緒にお風呂に？」

背中を布で擦ってくれるシャーリー。
後ろは決して見ない。
見たいが見ない。
今は同性なんだから、とは思うが。
こ、これが。

理性と本能のせめぎ合いというヤツか・・・・！

（・・・先輩・・・！）

代わりに先輩のハダカを思い浮かべて・・・・って見た事なんてないよ。
まだキスすらした事ないよ。

「アフィニア様がわたしに心配をかけたからです」
「心配？」

そう言われて分からないほど、鈍感ではないつもりだ。

「魔獣の事だね」
「はい。命の危険すらあったと聞きました」
「意図してではないけれど。確かに危なかったかもしれない」

少し状況が変わっていれば。
魔獣たちがもっと早めに襲ってきていたら。
逆に父さまたちが途中で休憩とかしていたら。
父さまたちは間に合わなかったかもしれないのだ。

「運が良かった・・・、本当に」

ぎゅっと背中から抱きしめられる。

うわ。

ハ、・・・ハダ、ハダカなんだよ？

動揺しすぎだ、俺。

「いいですか、アフィニア様。もう無茶な事はしないで下さい」

「いや別に、戦いたくて戦ったわけでは」

「・・・アフィニア様」

「はい」

降参。

「もう、こんな無茶はしない。母（かあ）さまにも怒られたしね」

「約束ですよ？」

彼女はそう言って俺を解放してくれた。

ちょっと残念だったとは思っていない。

「もし・・・、それでも無茶をしなければならない時が来たら」

「・・・」

背中に押し当てられる頭の感触。

「その時が来たなら・・・どうか、私も連れて行ってくださいませ」

## ０６話　「新発明？」（後書き）

いつもお読みいただきありがとうございます。

## 07話　「新たな出会い」

元の世界に戻るための作業を。
どうやったか、どこまで進んだかということを書くつもりで日誌と名前をつけた。

だが、今、見ているとこれは日記かもしれないと思う。
代わり映えの無い日々のハズだったのに。
毎日書く事が多くて困る。

さて。最近読み返してみて、先輩の事について記載が少なくなっている事を感じた。
この世界について学ぶために忙しかったのもあるし、この家での暮らしが楽しかったのもある。
だが、初心忘れるべからず。

意味は違うかもしれんが、ここで敢えて先輩の事について書いておこうと思う。

先輩の名前は　館林（たてばやし）　亜美乃（あみの）。
出会ったのは部活動で。
友達に誘われるまま入った、新入部員の歓迎会だ。

先輩は美人だった。かわいいよりも美人のほうがしっくりくる。
当然、美人なので周りを男どもに囲まれており、残念ながら俺の出番はなかった。
ただ、ずっと寂しそうにしていたのが印象的だった。

まあ、一緒にいた友達は「そうだったか？」と言っていたので本

当にそうだったのかわからないが。

友達とそれなりに遊び。
部活動をそれなりにやって。
先輩と、何回か話しも出来た。
そして。
夏休み前のある日、いきおいで告白したのだ。

結果は玉砕。
今年に入って１９人目だそうだ。

「あなたのこと知らないから」

先輩は少し寂しそうな顔をした後、こう言った。

「考えてみて。君は私を本当に好きだったのかどうかを」

振られる事が当たり前の告白だった。
最初から、高嶺の花だった。
ダメージだってそんなにないはず。

だけど、考えてみた。
先輩の事を。

とりあえず考えて考えて。
一晩考え続けて。
そうして先輩の事が頭から離れなくなった。
きっかけは告白。それで本当に好きになった。
とっても可笑しなお話。

「先輩の事好きになりました。ですから、あなたが俺の事知らないのなら、知ってもらいます」

その時の先輩は少し、ほんの少しうれしそうだったと思う。

勘違いかもしれないが。

◇　◇　◇　◇　◇

残念ながら、俺には剣術の才能は無かったらしい。

俺の読んでいた異世界召喚モノの定番だと、チート能力を駆使して戦ったりしてたと思うが。

そう都合よくはいかないものだ。

考えてみれば、この体は生贄の娘のものだしな。

文句を言っていいものではない。

ただ教師が良いため、才能が無いなりの動きは出来るようになった。

筋力が無いため、父さまの持つような片手半剣は持てないが。

その代わりといっては何だが。

母さまの教えてくれる魔法。

こちらのほうに俺の才能はあった。

母さまが教えてくれる魔法は、初級から中級ランクのものだが。

俺はこの魔法という物にすっかり魅せられてしまった。

元の世界には無いものではあるし。

それが使えるのだから、興奮するなというのは無理な話だ。

これを研究するうちに、いくつかの情報がわかった。

まず呪紋だが、これは正確な形さえ知っていれば、必要な魔力量を満たしているならば誰にでも描ける。

子供にだってだ。

だが、これだけでは魔法は発動しない。

呪文がいる。

最初はただ「呪文の名前」を唱えるだけだと思っていたが、実はこれが重要だった。

ある程度、想像できなければ使えないのだ。

火球呪文（ファイアーボール）ならば、でっかい火の玉を頭に描きながら呪文を唱え。

明かり（ライト）であれば、眩しい光を思い浮かべ。

回復（キュア）呪文であれば、怪我が治って元気になった姿を脳裏に描く。

それによって魔法は発動する。

明確に想像できなければ使う意志は伴わないのだ。

だからこの世界の魔法には、時間や重力などを扱う呪文は存在していないようだ。

だが、俺はイメージ出来る。

呪紋さえ作り出せば、未知なる魔法を使う事が可能になるのだ。

俺は夢中になって呪紋の研究に勤しんだ。

呪紋は魔法の設計図だ。

だが、簡単に相手に読まれてしまっては不味い。
だから、基本の設計図の部分に＋（プラス）して相手がすぐに真似できないよう、ゴテゴテした偽装がくっついている。
必要な部分と不必要な部分がごっちゃになっているのだ。
これが、呪紋の形を複雑化させ、描いたり覚えたりする事の障害になっている。

俺が新魔法を完成させたとして。
魔法の効果を見られてしまうと、相手もその魔法のイメージが出来るようになる。

なんとか、呪紋を相手に見られない手段を見つけなければならない。

・・・そして俺はもうすぐ9歳になる。
元の世界へ帰る方法はまだ欠片も見えない。

◇　◇　◇　◇　◇

「父（とう）さま、初めて参りましたがすごい所ですね。気後れしてしまいそうです」
「おまえがそれほど殊勝であれば、わしも苦労はないのだが」
「か弱い一人娘にあんまりなお言葉」

お約束、というやつだ。

何年も一緒にいる父さまだ。
どれだけ猫をかぶったところで、本性はバレている。
それでも愛してくれているのだから、望外の幸せだと思う。
さすがに男だとは、バレていないと思いたい。

今、俺がいるのは王城である。
ジンバル王国の王都クリスタの中央に位置するこの城は、白大理石がふんだんに使われた、周辺諸国でもっとも美しい城とのこと。
西洋風の城の中身なんて見るのは初めてだ。
何故こんな所にいるかというと、王様に呼び出されたからだ。
父さまだけでなく、何故かこの俺まで。
こんなドレスめったに着る事ないぞ。
自分の姿を一通り眺めて嘆息する。

黒っぽい青色のストレートの髪を腰まで垂らし、同色の瞳は儚げな印象を周りに与える。
外出は多いが、まったく日に焼けることのない真っ白い肌。
顔のパーツのバランスは見事というしかない。
そして今は、明るい青のドレスで完全武装。
元の世界でも、これほどの美少女はなかなかいないと思う。

今の王、ボールス？世ことボールス・グリフィズ・クリスタは現在４２歳だという。
まさかとは思うが、俺の美貌を聞きつけたか？
それは冗談にしても何の用だろう。
「父さま、今回の事何か知っておいでですか？」
「・・・いや」

心当たりぐらいはあるようだ。
だが、心配するような事ではないらしい。

しばらく廊下を歩いたのち、部屋に通される。
燭台とかあるし豪華に見える部屋だったが、謁見の間とかを想像していた俺にとってみれば。
しょぼい。

「よく来てくれた」

部屋のなかには４０後半とみられるりっぱな顎鬚の男性と。
そして同年代ぐらいの少女が純白のドレスを着て座っていた。
ウェーブのかかった金色の髪、逸らされてはいるが意志の強そうな翠色の瞳。
王様（たぶんそう）そっちのけで目を奪われてしまう。
容姿だけみれば、西洋人形のような、という言葉が合うのだろう。
だが、その強すぎる瞳の光が印象を裏切っていた。

「いえ」

父さまが礼儀正しく一礼する。
ふむ、次は俺の番だな。

「本日は、お招きに預かりましてありがとうございます」

スカートの両端をちょっとつまんで挨拶。
うむ、完璧。

「今日は非公式なのでな。そう固くならんでくれ」

手振りで真っ赤なソファーを勧められた。
父とともに対面に座る。
おおー、何かすげーやわらかいんですけど。

しかし、この娘(こ)は誰なんだろう？
今現在の王族に、自分と同年代ぐらいの女の子がいるとは聞いた事がないが。
王子が3人だったはずだ。

「・・・この娘(こ)の名は、セラフィナ・フォースフィールド・クリスタ。わしの娘じゃ。最近までは市井(しせい)におったがの」

つまりは隠し子ということか。

「・・・母親が先日亡くなっての。急遽引き取る事になったのじゃ」

今になってもまだ、女の子の視線は外されたままだ。
敵意すら感じる。

「・・・わしからの願いなんじゃが、この娘(こ)の友達になってやってほしいんじゃ」
「なるほど」
「卿の娘は、わしの娘と同い年と聞く。どうじゃな？友達になってやってはくれんか？」

父(とう)さまは、何となく言われる事がわかっていたらしい。
どうやら彼女の事も知っていたようだし。

「王子殿下の後ろには、この国最大貴族であるバエル公とクラウド侯がおります。あの方々の息のかかってない者というと限られるで

しょう」
「・・・貴族どころか、一介の冒険者が母親ではな。血筋を重んじる彼らには、受け入れてもらえんようじゃ」
父さまはこちらを窺ってくる。
「・・・友達になるのにやぶさかではありません」
「そうか・・・、ではすまぬが、娘に忠誠を誓ってやってくれぬか」
これって、断れなくない？
しかし友達になってくれ、のお願いなのに忠誠か。
王族と対等な友人関係があるとは思わないが。
いやまあ、かわいい娘と仲良くするというのは歓迎なんですけど。
未だに視線すら合わせてもらえませんが。
「アフィニア、王女殿下に忠誠を誓いなさい」
「はい」
ここで初めてセラフィナさんがこちらを向いた。
「少しお待ちください。お父様」
初めて声を聞いたが、悪くない声だ。
鈴を転がすような声とでも言えばいいのか。
「強制されて得た忠誠など、何の意味もありません」
「・・・う、うむ」
王様も娘には弱いようだ。

「どうか、２人で話をさせてほしいのです」
これが「あとは若いもの同士で」というやつか。
・・・違うのは分かってるけどな。
「わしはかまわんが」
「そうですね・・・、アフィニアは良いか？」
「はい」
「着いてきなさい」
そう言うと、さっさと部屋を出て行くセラフィナさん。
王様や父さまの表情を窺うと、あまり以外に思ってはいない様子。
・・・ふむ。
「では陛下、失礼いたします。父さま、行って参ります」
一礼して部屋の外に出るとセラフィナさんが待っていた。
彼女に付いて長々とした廊下を歩く。
「ええと・・・、どちらに向かわれているのですか？」
「・・・」
無言だよ。どうすればいいのー？
「ここよ」
大きめの観音開きの鉄扉だ。
正直、悪い予感しかしない。

扉を開けてなかに入る彼女。
その後に続く俺が見たものは、騎士たちの鍛錬場だった。

ちょっと王女さま。

話をするんじゃなかったの――――――!!??

## 08話　「セラフィナ」

騎士たちの鍛錬場。
だだっ広い部屋の中、彼女の声が聞こえる。

「あなたの噂は聞いているわ。オクスタン士爵家の深窓の令嬢・アフィニア」
「・・・」
「表に出てこない、病弱で気弱な娘」

まわりに人影は無い。セラフィナさんと2人っきり。
彼女は、セラフィナ・フォースフィールド・クリスタ。
この国の王女さまだ。

「噂が本当ならば、あなたは私には必要ない」
「・・・え、と」
「そして、あなたにとっても私の存在は重荷となるでしょう」

勝気な翠色の瞳に見つめられて、いや睨み付けられてつい視線が逸れてしまう。
目に入るのは、壁近くに整理されて置いてある、練習用の武具の数々。

「だけど、あなたには密かに流れるもう一つの噂がある」
「・・・はぁ」
「王国でも3本の指に入る、ベルフェ・オクスタン卿の秘蔵っ子という、ね」

彼女は壁際から木剣（ぼっけん）を二振り取ると、一本を投げて寄越した。

「・・・とと」
「だから、確かめさせてもらう」
木剣を俺に突き付け、そう宣言をする。
「・・・ドレスですよ？」
一応、抵抗してみる。
だが、彼女はこちらの言葉を聞くつもりは無い様だった。
「はっ！」
木剣を振り上げ、突然飛び掛ってくる。
うわ・・・！
だが、混乱する頭とは関係無しに、鍛えられた体が攻撃から身を躱した。
ひらり、と効果音を付けてもいいぐらいだ。
「・・・え、あ、きゃあぁ！」
突然の目標の消失。
唯でさえ、床を引きずりそうなスカート丈のドレスだ。靴だって歩きにくいものに違いない。
意外にかわいらしい叫び声をあげて、彼女はばったりと倒れた。
「・・・」
「・・・」
「・・・えーと」

気まずい。

セラフィナさんは、もそもそと起き上がると元の位置に戻った。
そして再び木剣を突き付けてくる。

「あなたの力、確かめさせてもらう」
「えーと、セラフィナさん？」
「うるさい黙りなさい」

ここは照れてくれる所ではないの？
顔を真っ赤にしながら、言い訳する所ではないの？

姫様にはがっかりだ。

「いくわよ」

さすがにもう一度倒れたくはないのだろう。最初よりは若干慎重に動き、打ち掛かってくる。
太刀筋は鋭いが・・・、それだけだ。
父さまの剣には遠く及ばない。

そうであるならば、どうやって終わらせるか、だ。
女の子を木刀で殴る趣味はない。
次々打ち掛かってくるセラフィナさんを、適当に受け流しながら思案する。

どうしよう？

だが、当の本人から文句が上がった。

「馬鹿にして！　本気でかかって来なさい！」
「・・・後で文句言わない？」
「あたりまえでしょう！」

ならば、遠慮はいらない。

彼女の上段からの一撃を見切って躱(かわ)し、胴へ軽く当てるような攻撃。
わずかだが、痛みに動きが止まるセラフィナさん。
そこへ。
「蜘蛛(スパイダーネット)の網」

何もない空間から、まるで漁業で使われる投網(とあみ)のようにひろがる網。

「えっ」

一瞬あっけにとられた彼女を絡めとる。
糸に絡めとられたまま、ばったりと倒れる彼女。

「何これ！　魔法！？」

クモの糸に絡まり、ジタバタするセラフィナさん。

「はい。そうですよー」
「あなた。魔法使いだったの・・・？」
「ええまあ。こちらの方が得意なので」
「・・・魔法使いに私は剣術で、軽くあしらわれていたっていうわ

けね。・・・凹(へこ)むわ」

いや、そんな状態で凹(へこ)まれても。

「父(とう)さまに鍛えられていますからね」

「・・・」

「ええと、・・・でもセラフィナさんの動きに・・・そう、キラリとした才能の片鱗が見えたりしたような気がしないでもなかったですよ？」

「本当？」

うっ。床に腹ばいで寝そべったままで、その上目使いは反則です王女殿下。

「で、これはいつ解けるの？」

蜘蛛(スパイダーネット)の網の呪文の効果は3、4分といったところだ。

「もうじき解けますよ」

「・・・・・・ほんとだ」

スゥ――、っとまるで最初から存在していなかったように消える糸。

セラフィナさんはため息をつくと。

ドレスを軽くはたいてホコリを落とすと立ち上がった。

「合格よ」

「では、忠誠を誓いましょうか？」

「・・・ん」

じっとこちらの目を覗き込んでくる彼女。
うん。やはり彼女は綺麗だ。

「忠誠とか、忠義とか言われても、実際私にはよく分からないしね」
「・・・」
「それに、今の私にはその忠誠とやらに返せるものもないし。だから、こうしましょう」
「・・・友達とかですか？」
「いいえ。あなたには私と、私が手に入れる物の半分をあげる。だから、私にあなたを頂戴（ちょうだい）」

頂戴（ちょうだい）って。
ええと、くれるっていうのはつまり・・・でも女の子同士だし。
いや、そもそも俺には先輩が・・・、そうだ！

「ええと、僕にはやらなければならない事があるので」
「駄目。絶対に逃がさない」
「駄目といわれても」
「私には、絶対にあなたが必要なの。だから・・・私のものになりなさい」
「・・・」

強引な娘（こ）だ。だが、あまり嫌いになれないのは何故だろう。
それならば・・・、いいか。

「いつか・・・は分かりませんが、その日までなら」
「その日？」
「ええ。僕がやらなければならない事が分かる日までです」
「・・・それでいいわ」

手を差し出してくるセラフィナさん。
俺はその手を取り。
しっかりと握手した。
「よろしくお願いするわ」
「僕もよろしくお願いいたします」
「ところで先程の呪文だけど。呪紋が見えなかったけれど、いつの間に？」
「秘密です」

◇　◇　◇　◇　◇

帰りの馬車の中。
ライズさんの操る馬車に揺られながら。
つい、思い出し笑いをしてしまう。
「どうやら、仲良くなれたようだな」
「はい」
「変わり者だという話だったが、それならおまえと気が合うだろうと思っていた」
「それは、僕も変わり者だということですか？」
「そうだ」
そうだ、って言われても。
悪口ではないようだから気にしない事にしよう。

あの後、俺は彼女のことを『姫』と呼び、彼女は俺の事をアフィニアと呼ぶ事に決めた。
楽しくなりそうだ、とは思うが。
「父さま。セラフィナ姫の状況を聞かせて下さい」
これを聞いておかなければならない。
今後のためにも。
「分かるのか」
「あんな意味深な会話をされれば嫌でも」
「うむ。・・・今、この国の王には、2人の妻と3人の息子がいる」
ガタゴト、と馬車が揺れる。
「第1王子レノックス殿下と第3王子レオノール殿下の母親は、バエル公爵の娘。そして第2王子ヴォルフ殿下の母親は、クラウド侯爵の娘だ」
「ええ、それは知っています。二大貴族ですからね」
「もともと両者は、王国内でも対立する事が多かったが・・・。現在、他の貴族達をも巻き込み、次の王位を巡って深刻な対立に発展しつつある」
「・・・そこへ、姫さまが突然現れた、と」
うむ、と頷く父さま。
「王女殿下は王位を巡っての争いに参加する事はない。後ろ盾が無いのだから」
「ええ、でしたら・・・」

安全なのでは？

「王子殿下たちの対立も行き詰まっていた。だが、相手を何の理由もなしに排除できるわけではない」

「ええ」

「互いに対する不満を、どこかで吐き出そうとしているのだろう」

「・・・つまり」

なるほど。くだらない理由だ。

ガス抜きというやつなのだろう。

「後ろに誰もいない姫は、丁度いい生贄ですか・・・」

「・・・そうだ。そして、バエル公は、生粋の貴族血統主義者だ」

「平民の、しかも冒険者の血が混じっているようなのは容認できないと」

最初に弱い娘はいらないと言った原因がこれか。確かに重荷だ。

姫が自分を欲しがる理由は。

・・・味方が欲しかった、という事でいいのかな？

「姫は危ない状況なのですか」

「嫌がらせは・・・、されているのだろうが、今はまだ大丈夫のようだ。だが、これからは分からん」

「・・・」

「おまえの好きにするといい。責任は取ってやる」

「ありがとう、父さま」

何が出来るか分からないが、なるべく力になってあげよう。

◇　◇　◇　◇　◇

とは言っても。
力(ちから)になってあげると言ったところで、俺は別に王都に住んでいるわけではないのだ。
まだ1人で馬にも乗れない俺では。
送り迎えが必要なのだ。

乗馬練習しよう！

だが、差し当たって現状その技能(スキル)は無いので仕方ない。
馬車で屋敷から王都までとなると4時間ほどはかかる。
だから、何がいいたいかと言うと。

「遅い」

理不尽だ・・・。

「アフィニア、もっと早く来れないの？」
「あの・・・。朝、用意が出来次第急いで来たのですが」
「私も朝からずっと待ってた」
「・・・」

女の子に早く来てくれないかなー、と期待されるというのは悪くはない。
悪くはないのだが。

それが数日続くと、少し困る。

「喧嘩はやめましょう。それで、今日はどうしますか？」

「剣術の練習」

「またですか」

「だって、負けたままでしょう！？」

姫の負けず嫌いも、筋金入りだ。

まあ、姫だし。

「僕は本職ではないですよ。何度も言いますけど」

「それでも今はまだ、あなたの方が強いわ」

彼女の剣は我流だ。

冒険者だったという、母親に見てもらった事がないのだろうか。

でも彼女の母親が、剣士だったかどうかも分からないか。

父（とう）さまに一度見てもらったほうがいいんだけどな。

やっぱり、彼女と俺とでは得物が違うし。

姫は、その細腕に似合わず１ｍ近い長剣（ロングソード）を振り回す事が出来るのだ。

馬鹿力め。

ちなみに俺の使用武器は、２本の短剣（ダガー）だ。

非力なもので。

「そうだ、姫。王城、いや王都から外に出られますか？」

「・・・お父様に聞かないと分からないけれど、たぶん大丈夫」

「大丈夫だったなら、泊りがけで我が家に遊びに来ませんか？」

自分ながら、良い考えだと思う。

「父（とう）さまに、剣術の型とか見てもらえますよ？」

「・・・いいの？」

「もちろん」

この世界で、友達を家に呼ぶ。

初めてかもしれない。

「その時は歓迎いたします、セラフィナ姫様」

## 09話　「姫さまが我が家にやって来た」

姫が屋敷に来る事に決まった。

最初は歓迎パーティーがどうのと、屋敷中で騒ぎになりそうだったが、姫のたってのお願いで普段通りという事になった。

皆は少し不服そうだったが。

王女殿下が来るのだから、まあ、それが普通の反応なのだろう。

だが姫は最近まで、市井（しせい）にいたのだ。

城の暮らしですら窮屈に違いない。

たった2泊3日だけだが、自由を満喫してもらおう。

屋敷の窓から外を眺め、すこしばかり冷たくなった風に身を震わせる。

「そろそろ寒くなってきたね」

「はい。アフィニア様の誕生日も、もうすぐです」

この世界にきて、もう4年経つ。

こちらの世界と、元の世界の時間経過が同じなら、先輩はもう大学4年生だ。

いやまあ、浪人とかしていれば別だが。

先輩は頭は良かったからな。

それはないだろう。

やめよう。

今考えて、どうにかなるものではない。

今は1年でもっとも寒い『銀の月』。
この全体的に暖かめの世界でも、数年に一度ぐらいは雪を見る事もある季節だ。

「そろそろ、お勉強を始めようか。明日には姫が来るしね」

シャーリーは、にっこり笑って頷いてくれた。

◇　◇　◇　◇　◇

「ふ・・・、ふふ・・・」
「楽しみなのはわかるけど、さっきから気持ち悪いよ、姫」
「気持ち悪いは酷くない？」

今、俺たちは馬車の中2人きりだ。
今日の姫の格好は、いつもの引きずりそうなドレスではなく、動きやすさを優先したカジュアルな姿。
スカートの丈も短いし。
まあ、俺もだが。スカートにはもう慣れた。
それで、なぜ姫と一緒の馬車に乗っているかというと。

姫のお泊りのため、王都クリスタまで出迎えにいっていたのだ。
父さまも馬車の外で、護衛として馬に乗っている。
寒いのにご苦労様、いや目上だからお疲れ様です、かな。

「でも、よく許してもらえたね」
「最近特に、城の中の空気が悪いのよ。だからお父様も、私に気晴らしさせるつもりだと思う」

ああ。例の王位を巡っての争いか。
しかし王様も、自分が死ぬのが前提の争いなんて見たくないだろうに。
王様が死ななければ、王位を継げないのだから。
いや。
この国の王様に隠居ってあるのか？

「何か、困った事があったら遠慮なく言ってほしい」
「ええ、頼りにしてます。アフィニア」

遠くにうっすらと、見覚えのあり過ぎる屋敷が見える。
２階建ての、りっぱな屋敷だ。

４時間ばかり馬車に揺られて、やっと我が家に帰ってきた。
時間はもう昼過ぎだ。
父さまや俺は、往復だったから８時間、馬車や馬に乗っていた事になる。
それに朝も暗い内から出発したので、非常に眠い。

「りっぱな屋敷ですね」
「姫の家の方が何倍も大きいと思うよ？」
「それはそうでしょうけど。私の家っていってもお城よ？」
「お姫様っぽく『こちらは家だったのですね、犬小屋かと思いました・・・』とか言わない？」
「いいません」

姫は、軽くため息をつくと馬車を降りた。
歓迎パーティーはしないが、屋敷の皆でお出迎えだ。
そうはいっても、この屋敷にいる全員を合わせても２０人に満たないが。

「セラフィナ王女殿下、我が家へようこそいらっしゃいました」
母さまが代表して挨拶する。
普通は父さまなんだろうけど、護衛として一緒に帰ってきたしな。
「短い間ですが、お世話になります」
姫も挨拶する。
そして、互いに軽く自己紹介をする。

「姫、荷物を運ぶよ」
「ありがとう。よろしくお願いするわね」
「でも姫って、姫様なのに荷物が少ないね。馬車が埋まるほど持ってくると思ってたのに」
荷物といっても、大きめのカバン２つだ。
本人も小さめのバッグを持っているが。

「とりあえず、部屋に案内するよ」
「客間？」
「せっかくだから、２階の空き部屋を掃除したんだ。ちなみに俺の部屋のとなり」
「ありがとう」
どういたしまして。

２階への階段を上りながら、微笑んでおく。

「これからも、泊まりに来る事があるだろうからね」
「そうだといいわね」
「さて、ここだよ。城にある姫の部屋ほど広くないと思うから、鍛錬とかやって壁に穴を開けないようにね」
「たまにだけど、あなたの首を絞めたくなってくるわね」
「姫の怪力だともげちゃうね。確実に」

部屋の中を見回す姫。
一つ頷くと、ベッドにダイブする。

「とりゃ」

腹ばいの姿勢のまま、ベッドでぽよんぽよんと跳ねる姫。
あわてて視線を逸らす。

「いやまあ、短いスカートなんだから、お淑(しと)やかにね」
「・・・？」

わかんないよね。
でもね。白いものがチラチラとね。視界の端にね。

外見はすっかり女なんだけど、まだまだ心は男なんです。
いやまて。
相手は８歳なんだから、これに反応するのは不味い気がする。
病気はいやだ。
ロリの病は一度発症したら、完治は難しい。

「・・・」

「・・・」
「何かよく分からないけど、あさってまでよろしくねアフィニア」
「・・・はい。よろしくされました」

◇　◇　◇　◇　◇

友達を家に呼ぶ。
元の世界でもあまりなかったような気がする。
ましてや泊りがけなんて。
母親がいなかった事も理由のひとつだと思うが。

それにしても姫は意外に行動的だ。
新しい事を見つけては、次々と突撃する。
こっちは付いていってるだけなのに、もうバテぎみ状態だ。
体力に差がありすぎる。

そうしてみると、あの城での落ち着き払った感じの方が、仮面を被った状態なのだろう。
姫が楽しいならば何よりだ。

「さっきまで、部屋で暖かかったのになー」
「汗をかくなら、お風呂の前でしょう？」
「そうなんだけどね」

姫と父（とう）さまとともに、食後の運動とばかりに剣の修練だ。
俺はとりあえず、剣の素振りをやっている。
呼吸が大事なのだそうだ。

父さまの修練は厳しい。
何度挫けそうになったか、分からないぐらいだ。
だが、姫はどんどん食らい付いていく。

基本、体育会系なんだよな。姫って。
精神論的というか、根性論というか。
最初は父さまにも遠慮があったが、今では十年来の師弟のようだ。

そのとばっちりで、いつもの1．5倍ほどのメニューをさせられてます。はい。

「うう・・・。死ぬ、死んでしまう」
「大袈裟ねー」
「うむ、姫を見習いなさい。まだ余力を残している」

いや。あんたらと一緒にするな。

◇　◇　◇　◇　◇

「あー、生き返るー」
「まったく大袈裟ね。・・・でもまあ、心地よい疲れだと思うわ」

俺は本心だから。

「でも、お湯に浸かるというのも悪くないわね。・・・ところで、何でよそばかり向いてるの」

「何故でしょう？」
「ええと、何故でしょうって、こちらが聞いているのよ？」
「・・・」
ロリの病に罹(かか)らないようにです。
「アフィニア様は、どのような方と入られても、とても恥ずかしがられるのです」
「そうなの？」
説明は不要だろうがお風呂だ。
何故こうなったかといえば。汗をかいた後の体が冷えて、風邪を引かないようにするためだ。
まあ姫なら風邪は引かないだろうが。
正直、別々に入らなければならない理由がない。
だから一緒に入った。
さすがに父(とう)さまは入らなかったが。
この世界の父親たちも、娘と風呂に入りたがるのだろうか。
そこにシャーリーが加わっている。
彼女はたまに「背中をお流しします」とかいう理由でお風呂に侵入してくる。
まったく、モラルの低下も甚(はなは)だしいな。
公序良俗(こうじょりょうぞく)はどうしたんだ。
自分で言ってて意味が分からんが。
まあいい。
視線の端に、チラチラと肌色が横切るが気にしないようにしよう。

「あれ？　アフィニア。左の二の腕の所、光ってるわよ？」
「・・・うん」
「これって、あまり私は詳しくないけれど・・・。呪紋、なのかな？」

見られた以上、隠していても仕方ない。
どうせ話すつもりだったしな。
シャーリーは知っているからいいが。

「刺青のように、直接肌に呪紋を描いているんだ」
「呪符みたいな物？」
「そう」

呪符とは、紙や布などに魔力が辿る回路を、特殊な無色のインクで描いた物。
術者はこの回路に魔力を流す事で魔法を使う。
回路＝呪紋の形で、これをつかえば杖でわざわざ呪紋を描く事なく呪文が使えるのだ。
呪紋を描くのが苦手でも、それが何の呪紋かさえイメージ出来れば手に持って呪文を唱えるだけ。
極論すれば魔力とイメージの問題さえクリアできるのなら、魔法使いでなくてもいいのだ。

しかも、呪紋を描き間違える事がない上に、相手に何の呪紋を使うのか分からなくさせる効果もある。
呪符を隠して持っていれば、呪文を唱えるその瞬間まで相手は何の呪文が来るか分からないだろう。
普通であれば、目の前で描かれる呪紋で、呪文を唱える前に判断出来るのだが。

これだけだといいことずくめだが、勿論そんな事はない。
前もって必要な呪符自体を用意しないといけない事。
魔力を一度流すと駄目になるので、コストが掛かる。
特殊な無色のインクというのが高価なのだ。

呪符を間違えられない事。
間違えて使った場合、呪紋と呪文が違うので魔法は発動しない。
だが呪符は駄目になってしまう。

「生きている皮膚なら、魔力を流しても駄目になったりしないからね」

そして何より、一番の問題が使用魔力の増加だ。
魔法の発動に通常の2倍～3倍の魔力が必要となるのだ。

「でも、つねに魔力が勝手に流れている状態にならない？　今みたいに」
「それが問題で廃(すた)れた技術だから」
「大丈夫なの？」
「もちろん」

姫は「ふーん、そう」と納得したのか、体を洗い始める。
姫にとっては大丈夫かどうかが問題だったのだろう。
シャーリーはいつもどうりだ。
と、いうより呪紋を彫ってくれたのはシャーリーだからな。

自分の体に、自分で刺青なんて出来ない。
必要だったとはいえ、針で刺されるのは気持ちいいものではない。
痛みは魔法で消せるといってもだ。

左の二の腕、光る呪紋を撫でる。
「この寒い中、ご苦労な事だと思うよ。誰が寄越した者かは分からないけどね」
俺は、小さく呟く。
「何か言った？　アフィニア」
「何もー」
夕方ぐらいから発動させている魔法、広域知覚にこちらを窺う存在が反応している。
自分を中心に、半径５００ｍほどの領域の生命体を感知する魔法だが・・・。
（気配が薄い。プロだな）
姫にくっついて来たのだろうが。
王様がつけた護衛か、それとも敵か？
まあ、敵であるのならば排除するだけだ。
せっかくの姫の息抜きを邪魔されたくはない。
「何、真面目な顔してるのよ？」
「いつも真面目ですよ？」
「・・・まあいいわ。いつまでも湯船に入ってないで、こっちに来なさい。背中流してあげる」
「お待ちください、それは私の仕事です」
「いいからいいから」

「えーと」

シリアスな空気が台無しだ。

## １０話　「使い魔」

リュドミラ大陸暦では、１年は３６０日。
それを１２分割したものが月である。
この世界では、この１２の月を色で呼んでいる。
色は神々を表しているのだとか。

銀の月がもっとも寒く、始まりの月と呼ばれ。
それに続いて青、金、無、土、黄、緑、赤、灰、紫、白、そして黒の月となる。

それぞれの月は、これに１～３０の番号を当て日となる。
つまり銀の５日とか、赤の２０日とか言う。

話を聞いていると、どうやら正確な暦ではないらしく、徐々にずれていっているらしい。
昔の文献によるともっとも寒かったのは白の月だったのだとか。
まあ、人々はあまり気にした風でもないのでかまわないのだろうが。

長々と語ったが、何が言いたいかというと銀の月はそれなりに寒いということだ。
布団が恋しい季節なのだ。
だが、今日もその恋は無残に打ち砕かれた。

「さっさと起きなさい。早朝鍛錬するわよ」
「うう・・・、もうちょっと」
「つべこべ言わずに起きなさい」
「あっ・・・、アフィニア様を起こすのは、私の仕事なんです！」

おいおい。なんで2人いるんだ。
「こんなのは、こうやったら起きるわ」
布団が引っ剥がされる。うう、寒いよう。
「あら、この布団軽いわね。何で出来てるのかしら？」
「それは、羽根布団というものです」
「ああ、噂の・・・今晩、貸してもらおうかしら」
もう寝てるとかの話じゃないな。
「・・・2人とも、おはよう」
「ああ、やっと起きた。早朝鍛錬行くわよ。オクスタン卿はもう、庭でお待ちよ」
「いや、僕は朝から激しい運動はちょっと・・・」
「何言ってるの。さっさと行くわよ」
「あああ・・・」
引きずって行かないで。せめて着替えぐらいさせて。
「・・・」
父さま監督のもと、早朝鍛錬に励んだ。
あいかわらず姫は元気だ。
「すぐに、あなたを超えてみせるわ」

剣術だけなら、近い内に抜かれるだろう。
父さまから鍛錬のやり方なんかも習っていたしな。
ボコボコにされた俺の前で、勝ち誇る姫の姿が目に浮かぶが仕方ない。

「さて、朝から疲れたけれど今日は何をしようか」
「まだ朝のメニュー、終わってないわよ」

ごもっとも。

◇　◇　◇　◇　◇

朝食が終わると、暇になった。
屋敷はだいたい昨日案内したので、今日はもういいだろう。
それに朝から疲れたので、ゆっくりするのもいいな。

と思っていたのだが、姫が近くの森を探検したいと言ってきた。
監視者の事もあるので、あまりいい提案だとは思わなかったが、姫の意見を採用して出掛けることにした。
もしもの時は、俺が守ればいいしな。

「日も照ってきたし、散歩もいいかも」

この森は、一応我が家の敷地内になる。
たいして大きい森でもなく、林と言ってもいいぐらいだ。
当然、危険な動物もいないのでとっても安全だ。

・・・まあ、この視線の主がいなければな。
気付いていることを、気付かせてはならないが。

姫とシャーリーの3人で森を散策する。

姫は、何かを見つけるたびに大はしゃぎだ。
それを俺たちは、暖かい眼差しで見守っている。
最近まで市井(しせい)にいたそうだが、こういう所には来た事がないのだろうか。

「・・・眠いな」
「さきほどは、凄い欠伸でしたね」
「緊張感が足りてないわね」

俺にとってみれば、何年も親しんだ森だ。
どんな緊張感を持てというのだ。
今更、特に興味を引かれる物なんて無いしな。

だが、今日はいつもと同じでは無かったらしい。
俺の広域知覚(ワイドセンス)に、弱々しい生命反応が引っかかったからだ。

「どうしたの？」
「どうされたのですか？」

俺の微妙な表情が気になったのだろう。次々に質問してくる。
それで俺も確かめてみる気になった。
さてさて、何が出るのやら。

「・・・こっち」
「何かあるの？」

「うん・・・、何がいるのかわからないけど」

少しばかり森の奥に歩いていくと、そこには一匹の猫がいた。
いや、猫のような物と言うべきか。
あきらかに腕とか太いし。しいていえば動物園で見たライオンとかトラとかの子供か。
それにしては牙が長いような気もする。
毛並みは茶色だ。

「怪我してるな」
「怪我してますね」

後ろ足から血を流している。
ぐったりとしているようだし、放って置くと死にそうだ。

「かわいそうです」

シャーリーが心配そうに見ている。

だったら、連れて帰って怪我を治してやるとしよう。
回復呪文(キュア)でもいいのだが。

「ええと、それ連れて帰るの？」
「あれ？　姫は反対？」
「反対というか・・・。それ魔獣の子供よ？」
「魔獣でも子供です！」

姫は反対のようだ。で、シャーリーは助ける方に賛成、と。

「助けられる命なのですから、助けるべきです！」

「ええと・・・。まあいいか」

シャーリーの強い言葉に、意見を引っ込める姫。
ふむ。シャーリーがこんなに自分の意見を言うのは珍しいな。
ま、帰ってから考えるとしよう。

「助けるからな。噛み付かないでくれよ？」

噛まれた上で「ほら、痛くない。怖がってただけなんだよね」とか言ってみたいが・・・。この牙、確実に大怪我しそうだ。
慎重に、怖がらせないように抱きあげる。
・・・抱き上げてもぐったりしたままで、抵抗する気力も無さそうだ。

「とりあえず、帰るとしますか」

姫は何か言いたげにして。
シャーリーは心底心配そうに。
俺とともに、屋敷への帰路につくのだった。

だが、屋敷に帰った俺たちを待っていたのは、父さまと母さまの難しい顔だった。
シャーリーはなんとか助けようとしているが、まったく父さまは取り合わない。

「残念だが」
「・・・」
「助ける事は出来ない。もし、この魔獣が大きくなって人を襲ったら、おまえに責任が取れるのか？」

「・・・いいえ」
「魔獣は決して人に慣れることがない。だから魔獣と呼ばれているのだ」
姫には分かっていたようだ。
俺も少しばかり、簡単に考えていたのかもしれない。
「お前達には無理だろうから、わたしが決着をつけよう」
父さまは猫（？）の襟首を持って立ち上がる。
「ついて来なくていいぞ」
「・・・あ」
シャーリーは泣きそうだ。
それを姫と母さまは肩を抱いて、頭をなでながら慰めている。
「父さま」
「・・・おまえも来るのか？」
「いえ。ですが、もし・・・、人を襲わないのであれば助けてもいいですか？」
「・・・無理だ。さっきもいったが、魔獣なんだ」
「その子を、使い魔にします」
父さまの顔が疑問でいっぱいになる。
母さまの顔を窺う父さま。でも母さまも知ってるわけがない。
元の世界なら、使い魔を持つ魔法使いがいてもおかしくなかった。
そういう映画もあったしな。
黒猫やカラスなど多岐にわたっていた。

でも、この世界にはそういうのがないのだ。

「魔法使い専用のペットですよ？」

「何をするのかいまいち分からんが・・・、責任をちゃんと取れるのだな？」

「はい」

この魔法はまだ未完成だ。下手をすれば、この子は死んでしまうだろう。

だが、どちらにしても死んでしまうのならば成功に賭けるのも悪くない。

父さまはとりあえず様子を見てくれるのか、俺の前に魔獣の子を置いて下がってくれる。

姫やシャーリー、母さま父さまの見ている前で、俺は呪紋を描き呪文を唱えた。

「使い魔（ファミリアー）契約」

俺の膨大な魔力が魔獣の子に流れ込み、体内に新たな回路を形成していく。

叫び声をあげる魔獣の子。

びくん、びくんと跳ねるさまは、まるで断末魔の苦しみのようだ。

「・・・成功、かな」

口から泡を吹き、まったく動かなくなった頃、魔法は完成した。

さわって確かめたのだが、魔獣の子は気絶しているようだ。

「シャーリー。目を覚ますまでよろしく」

抱き上げてシャーリーに手渡す。
ああ、それと足の治療もしておかないとね。
「回復(キュア)呪文」
これでよし。皆の顔色が悪そうに見えるが・・・。まあ、あの状況を見たんだから無理もないか。
動物が、しかも子供が苦しんでるのを見て平気な人はあまりいない。
「・・・それで大丈夫なのか？」
「ええ。後は目が覚めてから、ですね」
その時には名前を付けてやらなければな。
「アフィニア様。これで殺されなくてもいいんですか、この子は？」
「そうだよ、シャーリー。安心できた？」
「はい。感謝いたします、アフィニア様」

◇　◇　◇　◇　◇

「こんばんは、監視者さん」
その日は夜遅くまで大騒ぎだった。
目を覚ました魔獣の子の名前を何にするか、皆で考えたのだ。
名前は結局、俺のモルドレッドに決まった。元の世界のアーサー

王関係の名で頭に残っていたのだ。
あれ？　この人、謀反とか起こしたっけ？
まあいい。あの魔獣の子も今は動けないし、意識も朦朧としているだろうが徐々に使い魔らしくなるだろう。

その後、皆が寝静まった頃を見計らって庭に出てきたのだが。
はっきり言えば。監視者の排除をするためだ。

「ああ、今更隠れても駄目ですよ？」

俺の言葉に、木の影から表れる人影。
３０ぐらいの黒ずくめの男。顔を半分以上隠しているので誰かの特定はできない。
誰であっても関係無いが。

「いつ気付いた」
「昨日からです。あなた、暗殺者ですね？」
「いや、わたしは王から姫様の護衛を請け負った者だ」
「嘘ですね」

動揺は無い、か。さすがプロ。

「今日、姫には単独で何度か行動してもらいました。その度にあなたから害意を感知しています」
「わたしには何の事か分からんな」
「まあ、認めようが否定しようが、どちらでもいいんですけどね」

すでに排除は決定している。
向こうもそれを感じているのか、短剣を構えて警戒している。

「呪紋など描く暇は与えんよ。魔法使いなど、この距離では何の役にも立たたん」

余裕の男。まあ確かにこの距離であれば、呪紋を描(えが)ききるより短剣の方が早い。

呪紋を描くのならば、だが。

俺は手を前に突き出す。一瞬高まる緊張、だが。

「重力加圧(グラヴィティ)」

これは俺のオリジナル魔法だ。右の肩甲骨あたりにある呪紋に魔力を流す事で使うことが出来る。

突然、地面に押し付けられ混乱する黒ずくめの男。

「何故だっっ！？　呪紋どころか、呪符さえ使って無いのにっっ！？」

「秘密です。どうです？　今あなたの体重は１０倍ぐらいになってるはずですが」

「お、俺を、ど、どうするつもりだ？」

「どうしましょうか？」

「ひ、姫様にはもう近づかない、や、約束する」

「急に饒舌になりましたね。・・・会話をして魔法の効果時間が切れるのを待ってるのでしょう？」

「・・・」

排除といっても殺す気はない。というより、そこまでの覚悟がまだ無い。

動物や魔獣とは違うのだ。人、なのだ。

「今から使う魔法。僕はこの魔法を禁忌(タブー)と名づけました」

「・・・」
「これは相手の頭の中に、『禁忌』を直接書き込む事が出来る呪文なんです」

人にはそれぞれ、禁忌とするものがある。
それぞれの心の奥に、これだけはやってはいけない、そこだけは守ろうとする約束ごと。

「まあ、あくまで禁忌ですから、絶対の制約ではありません。禁忌を犯すという言葉があるぐらいですし」

相手に強制させる程の効力は無い。
そちらの方も鋭意製作中で、当然ながら「制約（ギアス）」という名前がすでに決定している。

「ですが、この魔法でかきこまれた禁忌は絶対に消えません。どれだけそれを犯そうと、慣れる事はありません。いつまでも、何度でも後悔の念に、良心の呵責に苛（さいな）まれる事でしょう」

魔法を研究するうちに、疑問が浮かんできたのだ。
相手に直接作用する魔法が無いことに。
考えてみれば、生き物には等しく魔力という物があり、それが掛けられた魔法を無効化させているわけで。
だから、火や氷といった物を生み出し、相手にぶつけるという間接的な攻撃方法がとられている。
だが、相手をはるかに凌駕する魔力があったならば。

直接、相手に作用する魔法が使えるのではないか？
その研究成果がこの魔法なのだ。使用には、相手を動けなくさせないといけないが。時間もかかるし。

「や、やめろ・・・！」
「禁忌(タブー)。書き込むデータは『姫に関わる』、『僕の能力を誰かに伝える』、『人を殺す』の３つ」
「うわああああああぁああぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁああ！！！！」
ふう。白目剥いて気絶したようだ。・・・死んでないよね？
実験は成功、なのか？　まあ、この人には胃を強くもってもらおう。
「さあ、帰って寝るとしますか」

# 11話　「入学」

モルドレッドは。
オスの剣歯虎（サーベルタイガー）だった。
名前は一緒でも、たぶん元の世界の昔にいたのとは違う物なのだろう。魔獣だし。

彼は、俺の使い魔となったあの日から、ずっと屋敷で飼われている。
彼は屋敷でも賢いと評判なのだ。まるで人の言葉が分かっているようだと。

（実際、分かっているんだけどね）

使い魔契約（ファミリアー）の魔法によって、体の中まで変質したのだ。
言葉を喋る事は出来ないものの、こちらの言ったことは理解できているし。
秘密だが、呪符さえあれば簡単な魔法すら使用できる。
ただ、あまり大きくなられても困るので、体の成長には抑制が掛けられている。
そのため、２年経ったというのに未だに７０ｃｍほどだ。

そう、あれから2年たった。
当時から状況はあまり変わってはいない。姫の周りも、俺についても。
だが、もうじき１１歳になればクリスタ王立学院に入学する資格が得られるのだ。
そうなれば、王立学院図書館で調べ物をする事が出来る。

そこで何らかの手がかりを見つけられれば・・・、俺の目的に少しでも近づける・・・、はずだ。

◇　◇　◇　◇　◇

「姫」
「あら、アフィニア。お久しぶりね」
「姫・・・、何か怒ってる？」

今、俺と姫は王城にある庭の一つにいる。
白？（はくおう）の庭園とかいう大層な名前がついているが、そんなに大したものでもない。

「姫。前に言ったとおり、僕はもうすぐ学院に入るんだから、準備とかね。色々とね。」
「そんな事は分かっています」
「姫もあと二ヶ月もしたら入るんでしょう？」
「二ヶ月も後ですわ」

仕方ないじゃないか。１１歳の誕生日を迎えないと、入学できないんだから。

こちらの世界の・・・。少なくともクリスタ王立学院に関しては個別入学になっている。
元の世界のように、４月に一斉に入学式とかやらないのだ。

１１歳を過ぎている、それなりに地位のある者の子弟、才能が有

ると認められた平民だけが入学対象となる。
入学は義務ではなく、また、休学も自由だ。
自分の好きなときに学生となり、飽きたら休学する。
ただし、学院の生徒でいられるのは２０歳までの最大１０年間と決まってはいるのだが。

「先に入って、姫に案内出来るようになっておくよ」
「期待してますわ」
「っと」

庭園に入ってくる複数の人影。
姫は露骨に嫌な顔をする。

入ってきたのは、全部で5人。
3人の王子殿下と、その知り合いらしい貴族2人だ。

第1王子レノックス殿下は、大柄で、その見た目通り腕力や権力にものを言わせるタイプ。
第2王子ヴォルフ殿下は、少し線の細そうな、眼鏡をかけたナルシストな学者タイプ。
第3王子レオノール殿下は、小柄で、第1王子の後ろでコソコソ謀略をはりめぐらすタイプ。

もともと嫌いな事もあって、良い感想は浮かんでこない。
あくまで姫の話なので、王子たちの性格が本当かどうか分からないが。
2人の貴族は・・・、よく見る腰巾着だ。

「・・・姫、移動する？」
「・・・そうですわね。私の部屋にでも行きましょう」

確かに、それはいつもの事だった。
王子たちを見つけた姫が逃げ出すのは。
だが、それは今日に限っては揉め事を引き起こす事になってしまった。
「おい、俺たちを無視すんじゃねーよ」
移動しようとした俺たちを邪魔するように、第1王子レノックス殿下が立ち塞がる。
それは、何か・・・たまたま虫の居所が悪かっただけなのかもしれない。
それとも、仲間内で揉めたのかも。
どんな理由があったのかは分からない。だが、レノックス殿下の敵意の矛先は、今、姫に向いていた。
「・・・おい、おまえ！　おいっ！」
「・・・・・・」
姫は無視する事に決めたようだ。
彼の巨体に見下ろされると、それだけで緊張する。
・・・いつもだったら、こんなに絡(から)んで来る事はないのだが。
他の王子たちも、貴族の腰巾着も止めようとしない。
むしろ、面白がってさえいるようだ。
「無視するなと、言ってるだろう、がっ！」
「姫っ！！」
「！・・・邪魔すんじゃねえ！！」

第1王子の伸ばされた腕から、姫を庇うのに間に入り。
次の瞬間、横殴りの衝撃がきた。
一瞬、頭が真っ白で・・・、痛みは後からやって来た。

「・・・・っっ！」

凄まじく痛いんですけど！　この馬鹿力め・・・！
俺は心の中でだけ、レノックスに罵詈雑言(ばりぞうごん)をを浴びせた。
・・・どうやら、力任せの平手打ちを貰ったらしい。

「アフィニア！！」

姫の悲鳴が聞こえる。
駄目だ、冷静にならないと。
くそ。・・・でもここは撤退の一手しかない。

「大丈夫、何でもありません！」
「ア、アフィニア！？」
「姫、大丈夫ですから！　早く行きましょう！」
「でも・・・！」

腕を掴んで引っ張ろうとするのだが、姫が抵抗する。
相手は王子殿下。揉める事にでもなれば、父さまや母さまにも迷惑が掛かる。
ここは、ぐ・・・っと我慢なのだ。

「ち、クズ風情が庇い合いか？　まったく麗しい友情だな？」
「何ですって！」

だから、姫。挑発に乗ったら駄目だって。冷静になろうよ。
・・・はぁ、無理か。
ならば、仕方が無い。

「レノックス王子殿下――――――」

視線に魔力を込める。呪文でもなく、魔法でもないが・・・、視線の圧力を増す事が出来る。
呆然とするレノックス殿下。

「もう、行ってもよろしいでしょうか――――――？」
「あ・・・、ああ。・・・行ってもいいぞ・・・」
「行こう、姫」
「え、ええ」

姫の腕を掴んでこの場からさっさと逃げる。
王子殿下が正気に戻る前に。

後ろで「面白いな」と、聞こえた気がしたが、とりあえず無視した。

◇　◇　◇　◇　◇

クリスタ王立学院入学を明日に控え、今日はゆっくりする事に決めた。
学院は全寮制だ。
国中から入学してくるので当然ともいえるが、入ってしまえばそ

うそう帰れないだろう。
だから、父さまや母さまと一緒に過ごすのも暫くお預けだ。
「お前の事だ。何も心配していないから思うようにやりなさい」
「私も心配なんてしてないわ。でも、たまには帰ってきてね」
父さまも母さまも、目が潤んでいるのはお約束というものだろう。
「シャーリーも、アフィニアの事頼んだわよ？」
「はい、奥様。お任せ下さい」
「でも、ほんとにいいの？　養女にならなくて」
「苗字がほしいわけではありませんから。私は、アフィニア様のお世話をするためにいるのですから」
それは違うと言っても、シャーリーは聞いてくれない。
今度のクリスタ王立学院入学の事でも、シャーリーは本当なら1年以上前に学院に入れていたのだ。
それを、俺の世話をしたいと言って今日まで屋敷にいたのだ。
自分の道を見つけてほしいのだが。
まあ、そう言うと「アフィニア様の世話をするのが私の道です」とか言うんだよな。
「モルドレッドも、父さまと母さまの事、ちゃんと守ってよ？」
「ガウッ！（まかしとけ）」
なんか目と目で通じ合った気がしたぞ。
そうして夜は更けていった。

「それで、何で姫がここにいるの？」
「ちょっとだけ、お父様にお願いしたの。権力って便利ね」

ちっとも悪びれない姫。
学院に、早期入学認めさせたのか・・・。

「こんな所にいつまでもいても仕方ありません。学院長に会いにいきましょう」

正門の前で立ち止まっていては、さすがに目立ち過ぎるか。
ここにいても始まらないからな。
姫の手を取り、シャーリーの後を追うように門をくぐる。

・・・結構広いな。

「立派な建物だな。たくさん建っているし」
「たくさんの専科があるからね。あの塔みたいなのが魔法科よ？」

姫が指差した建物を見る。
俺は魔法を主に習うつもりなので、あの塔のような建物に通う事になるのだろう。
まあ見るのは後でも出来るか。どうせ見飽きるほど見る事になるのだろうし。
とりあえずは入学するのが先だ。

「学院長室ってどこだろうな？」
「それなら、正面の建物の1階にあります」
「シャーリーは頼もしいな」

気のせいか、シャーリーは得意げだ。・・・前もって調べてきたとみえる。
だが逆に姫はつまらなさそうにしている。
何で？

「早く行きましょ」
「・・・そうだね」

広い校庭を歩き、　校舎の玄関をくぐって。
ようやく辿り着いた重厚な両開きの扉を開けると、風格のある初老の男性が待っていた。
勧められるまま、ふかふかのソファーに座る。

「事前に提出していただいた書類には、不備は見当たりませんでした」

学院長も、机を挟んだ対面のソファーに座る。
厳格（げんかく）そうな人だ。
あのりっぱなヒゲに教育者としての矜持（きょうじ）を表しているような気がする。

「では、セラフィナ・フォースフィールド・クリスタ、アフィニア・オクスタン、シャーリーオールの3名を当学院の生徒として認めます。ご入学おめでとう！」

俺たちはそろって頭を下げる。
その後はいくつか確認事項とか聞かれたのだが、酷く緊張する時間だった。

「肩が凝ったわ」
「同意だね。・・・さて、寮の部屋を確認しておく？　僕はもう、荷物は送ってもらってるから」

わたしもよ、と姫。

「私とアフィニア様は同室です」
「姫は１人部屋なの？　やっぱり」
「私は２人部屋でも良かったんだけど、一応王女だから・・・。いつでも遊びに来て」
「うん、お邪魔させてもらうよ・・・って、あそこにいるの第１王子じゃないの？」
「・・・そうね、レノックス殿下ね」

遠く、校庭をどこかに向かって歩く王子殿下。
周りには、腰巾着の貴族数人を引き連れている。

でも、確か第１王子はもう、２２歳になっているはずだ。
この学院では２１歳の誕生日を迎えたら、放校処分になるはずだが。

「なんで居るんでしょうね」
「あれでも王族の一員ですからね。あなたが教えてくれた、無理を通せば道理が引っ込むって事でしょうね」
「その使い方、合ってるかな？　まあ、１１歳の誕生日が来る前なのに、ここにいる姫が言えることではないね」
「酷い言われ様だわ」
「いえいえ」
「あなたが好きだから一緒にいたいだけなのに・・・ってなんで赤くなってるの？」

姫、そんな誤解させるような事、言わないで下さい。
分かってますけどね。そう、友情です、友情。
姫はたまに不意打ちをしてくるから困る。
本人はまったく、そんな気などないだろうがな！

◇　◇　◇　◇　◇

「意外に小さい寮だね」
「お屋敷に比べたら小さいでしょうが・・・、寮としては普通・・・なのでしょうか？」

姫も含めて、俺たちが入る寮は小さかった。
２階建ての小ぢんまりとした建物だ。
今の時期、ここしか丁度開いてなかったというだけなのだろうが。

「これ、ギュウギュウでも１０人が精一杯だと思う」
「寮の中は立派かもしれませんし、入ってみましょう？」

うん。大きなお屋敷に慣れすぎたかもしれない。
日本の家屋はこれで普通なんだよ！　これでも大きいほうなんだよ！

「お邪魔しまーす」
「お邪魔いたします」
「失礼するわ」

寮の扉を開ける俺たち。

「おお、遅かったね。あたしがこの寮の寮母のクレアだ。よろしく頼むよ」

出迎えてくれた少し小太りな中年の女性が、俺の背中をバシバシ叩いてくる。

あの・・・、力加減間違えてませんか？

いや、いい人そうなんだけどね。

「部屋に案内するよ。ついておいで」

2階への狭い階段を上る。姫も同じ2階らしい。

外からの見た目通りの建物のようだ・・・。

「2階に3部屋、1階に2部屋と食堂と風呂と管理人室があるよ。あたしはだいたい管理人室にいるからね」

なにかあったら、遠慮なく言うんだよ、と言ってガハハと笑う。

「廊下がギシギシいってます」

「そ、そうだね」

「ここが姫さんの部屋で、こっちが2人の部屋だ。確かめてみな、荷物は入ってる。もう一つの部屋は・・・今は出掛けてていないみたいだから、夕食の時にでもまとめて紹介しようかね」

何年お世話になるか分からないが・・・まあ、住めば都と言うしな。

「クレアさん、よろしくお願いしますね」

## 12話　「学院の平穏な日々」

クリスタ王立学院には、元の世界でいうところの学級・組というものが無い。
つまり眼鏡の似合う、三つ編みの学級委員などいないのだ！

ごめん違う。

学級という固まりで行動するのではなく、個人で習いたい教室に行って学ぶのだ。
専科（せんか）という名前のシステムらしい。

この専科というのは、専門に扱う教室が複数入った建物の事をいう。
専科には色々あり、代表的な所でも魔法科、剣術科、武術科、芸術科、歴史科、神学科など多岐にわたる。
生徒はこれを自由に、好きなだけ選ぶ事が出来る。
そして専科ではないが、基本的な計算・国の経済や、文学なども教える、必須となる教育科。

教育科も含め、専科には４つの等級（クラス）があり初級、中級、上級、至高となる。
等級（クラス）を上げるには、その等級（クラス）の教師に修業証書をもらえばいいのだ。
初級を全て修めたならば中級に、中級を全て修めたならば上級に行くのだ。

卒業はどうやったら出来るかって？
卒業するためには必須である教育科の、最低でも初級クラスの教

師と、専科の上級クラスの教師に修業証書をもらってくればいい。
それがあればクリスタ王立学院卒業済み、という資格が手に入るのだ。
資格を貰った後でも至高クラスという道もあるしな。
まあこの学院は、国に役に立つ人材を育てるところだからな。
全てを学ぶ必要は無いのだ。
そもそも学院に来るのは義務ではないし。

◇　◇　◇　◇　◇

「相も変わらず朝が弱いのね」
「どうも朝はね。目覚まし時計を3個掛けてもダメだったしね」
「え、ええと・・・め、めざ？　・・・か、かける？」
「・・・・・・さあ、朝食にしようか」
「ねえ、今の何？　教えなさいよ！」

しまった。つい、昔のクセが。
まあ『こぼれたミルクは戻らない』。言ってしまった事を嘆くより、再発を防ごう。
どうせ、言葉の意味など分からない。

寮母のクレアさんは、俺と姫が食堂に来たのを見て、朝食の準備をしてくれる。
今日も俺が最後らしい。
本日の朝食は硬めのパンと玉ねぎのオニオンスープ、そしてミル

クだ。
シャーリーはいつものように、クレアさんを手伝っている。
食堂には寮母のクレアさん、俺、シャーリー、姫以外に3人いる。
この寮には、寮母さんを入れても、たった7人しか住んでいないのだ。

「「おはようございます」」

まずは1階に住んでいる双子、ララサ・パルテノ、ササラ・パルテノの姉妹だ。
2人とも茶色の髪と目の、身長低めの13歳の女の子だ。
顔立ちは同じなのだが、ララサの方が姉でショートの髪型で剣術科、ササラの方は腰まであるロングのふわふわウェーブの髪型で神学科を専門にしている。
まったく雰囲気の違う2人なのに、挨拶など言葉や動作のタイミングがぴったり合うから不思議だ。

「ずいぶんと、ごゆっくり、ですね～」
「早寝早起きは、規則正しい生活への第一歩だよ？」

挨拶は一緒なのに、続く言葉が違うのはいつも通りだ。
そして、ララサが場の空気を読まないのも。

「・・・ごめんなさい。遅寝で・・・」

ララサは俺に言ったのだろうが、答えたのは別の人間だった。
キュレ・リ・ククル。2階の3番目の部屋に住む最後の1人だ。
2人部屋を1人で使う彼女は、やはり上級貴族の子女でククル伯爵家の次女らしい。

ストレートの黒髪をヒザ裏あたりまで伸ばしている、いつも眠そうな17歳の女性だ。
実際、夜遅くまで研究しているらしい彼女は、なんと魔法科の上級クラスだ。

これが、この第9女子寮のメンバーだ。

「い、いえ。キュレさんの事を言ったわけではなく・・・」
「・・・いいの、本当の事だしね・・・」

これもいつもの事ではある。
キュレさんは寮生の中で最年長なのだが、人をからかって遊ぶ悪癖がある。
困ったものだ。
犠牲になるのは主に、ララサと姫なのだが。

この事を姫に言うと、何故かいつも、じっとりとした視線を向けてくるのだが。

「この寮もやっと賑やかになってきたね・・・」

感慨深く語る、寮母のクレアさん。
空き部屋もあと一つあるしな。

「そういえば、あの1階の空き部屋はどんな人が入ってくるのですか？」
「予定は無いね」

あれ？

「だいたいの人は、第1～第8女子寮の方に行っちまうからね。あっちの方が大きくて立派だし」
「でも姫が入寮するぐらいだから、由緒ある建物とか」
「ないね」

どういうこと？　俺ら、わざわざこのボロい寮を選んで入ったって事？
実はうちの家って、貧乏だったってこと？

「私は、アフィニアと一緒のほうが楽しいと思ってここにしたわ」
「シャーリー？」
「あちらには1人部屋しか空いていませんでしたので」
「・・・」

・・・釈然としない感じだけどまぁいいや・・・。
さっさと食べて学院に行くとしよう。

◇　◇　◇　◇　◇

学院は王都の中にあるのではない。
王都郊外の丘陵地帯を整備して造ったもので、周りをぐるっと高い塀によって囲まれている。
寮も、この塀の内側に存在する。
当然、と言えよう。
この学院に通っているのは、貴族の子弟たちなのだから。
まかり間違っても、不審者などの侵入を許してはならないのだ。

「私、こっちだから」
「姫、昼食は一緒に食べよう」
「いいわ、また後でね？」

姫と別れる。
姫は剣術科なので、あの大きな円筒形の建物なのだ。
寮の皆で登校してきたが、後、ここで別れるのは双子のララサさんとササラさんだ。
ララサさんは姫と同じ剣術科、ササラさんは神学科に向かう。

「ちゃんと授業を受けるんだぞ」
「さよ～なら～」

ララサさんはともかく、ササラさんはふわふわし過ぎて心配になる。
今もふわふわ手を振ってるしな。

「早く行かないと、1時限目に遅れてしまいます」
「おっと危ない。行くとしますか」

授業は一回に約2時間あり、休憩を挟んで朝2回、昼から1回ある。
それらを、1時限目、2時限目、3時限目と呼ぶ。
キュレさんとも、塔のような建物に入った後に別れる。
彼女は上級、俺は初級だ。

「間に合ったか」

教室に入ると見知った者も何人かいるようで、軽く会釈してから中に入る。
男が何人か、顔を赤くして視線を逸らしたが・・・うん。
適当に空いている席に座る。シャーリーは俺の左隣。
この教室が自分の組というわけではないのだから、決まった席などあるはずがない。

さて、魔法というと、とってもファンタジーなのだが。
授業としてやることといえば、とっても地味だ。

魔法は、呪紋を描き、呪文を唱える事によって発動する。

魔力云々は、使っていれば増えるらしいし、呪文に意志を込めるといっても授業で習うものでもない。
では、何を習うのかというとだ。
呪紋の描き方と、その図形を覚えることだ。

延々と図形を描かされ、それを、そらで出来るようになれば合格なのだ。
正直、これはキツい。

英単語を覚える時以上のキツさだ。

「憂鬱な時間が始まる・・・」
「アフィニア様は、呪紋の記憶が苦手ですよね」
「単なる図形だからね。どこが尖っているとか丸いとか重なるとか、もうわけわからないし」

そしてこれが、最大の誤算だった。
オリジナル魔法をも制作して使いこなし、膨大な魔力を誇る俺は、

まあ至高クラスは無理にしても、上級クラスのレベルなんだとすっかり思っていたのだ。

俺は、肌に描かれた、見えない刺青『呪紋』を使って魔法をかけている。

本来ならば、この刺青には常に魔力が流れ消費され続けるため、自殺行為になってしまう。

しかも、必要魔力は2倍～3倍だ。

廃れてしまったのもむべなるかな。

でも俺は、肌に流れる魔力をＯＮ・ＯＦＦ出来るのだ。

初めてこの世界にやって来た時、魔力がぐちゃぐちゃになってベッドから動けなかった。

それを治すために、徐々に魔力の手を伸ばして身体の機能を把握していった。

そのおかげだろう。俺は魔力の大半を一箇所に集中させる事もできる。

俺って凄い、だ。

だが、この便利さに慣れ過ぎて、呪紋そのものを覚えるのを怠ってしまったのだ。

使わないと忘れてしまうし。

昔覚えたはずの魔法の盾（マジックシールド）や、魔法の矢（マジックアロー）の呪紋が描（えが）けなかったときは、本当にヤバいと思ったものだ。

絶賛落ちこぼれ中である。

シャーリーは中級クラスの実力はあるので非常に心苦しい。

「中級クラスに行ってもいいよ」、とは言ったのだけれど。

仕方ないよな。呪紋、覚えて損はないからな。
頑張るしかないな。

「・・・ん？」

教室がざわめいていた。
最初は教師が来たのかと思ったが、どうも違うようだ。
思考に沈んでいる間に、何かあったのだろうか？

「シャーリー、何かあった？」

彼女を見ると、目を丸くして何かに驚いている。

「隣、いいかい？」
「ええ、どう・・・ぞ・・・？」
「ありがとう」

俺の右隣の席にいたのは、第2王子ヴォルフ殿下だった。

（ヴォルフ殿下は魔法科専門だけど・・・上級のはずでは！？）

確かに、上級クラスが初級クラスに来ては行けないと言うことは無いが・・・。
魔法科の初級クラスなら、ここ以外にも2教室ある。

これは・・・、俺が目的だよな。

「授業を始めるぞー。さっさと席に着けー」

入ってきた教師の声で、静まる教室。
その教師は、王子殿下がいるのに驚いたものの、職業意識を動員したのか何も言わなかった。

（俺・・・王族とか貴族って苦手なんだよな）

昔読んだ小説で、王や貴族がいない、つまり身分制度の無い世界から来たという設定の、そういった身分にまったく拘(こだわ)らない主人公がいた。
彼は相手が誰でも差別なんてしないし、奴隷であっても優しく手を差し伸べていた。
たとえ権力者相手であろうとも、当たり前のように啖呵を切る彼はかっこよかったと思う。

だが、いざ自分がそうなってみると、王族とか上級貴族とかの側にいるだけで萎縮してしまう。
あいつら何かのオーラでも出してるのだろうか。

（仕方ないよね？　あいつら、お前コレねと言いながら首を掻っ切るポーズとるだけでいいんだから）

それで、俺の明日は無くなってしまうのだ。
やっぱり力がないと、権力者に逆らうのなんて無理。

授業はさっぱり頭に入ってこなかった。

「それで、一体何の御用でしょうか？」

授業の後、俺はヴォルフ殿下に尋ねる。

「そうだね・・・」

中指で、眼鏡の位置を直す殿下。

ちくしょう、様になっているのは認めてやる・・・！

「君に興味があった、では駄目かな」

教室に残って、成り行きを見守っていた女たちが黄色い声を上げた。

男どもは悔しげな顔。

だけど。

まるで値踏みするかのようなヴォルフ殿下の視線。

これ、絶対に恋とか愛とか関係ないよ！？

## 13話　「ミュウ・イアリー・エリヤ・クラウド」

「アフィニア、あなた、第2王子にプロポーズされたらしいわね？」
「・・・・・・」
「今、学院中がその噂で持ち切りよ？」

さあ、昼食を食べよう。
今日はなにかなー。

「まあ、誤解だとは思うけど、何があったのか話してくれない？」

誤解・・・、誤解なんだけど。

「男・・・、男にプロポーズされたなんて噂が立つとは・・・」
「男って？・・・、女にプロポーズされたりする方がおかしいでしょう？」
「・・・」

ここは学院にある食堂だ。
貴族の子弟が通ってる学校だけに、メニューも豊富だ。
俺と姫、シャーリーは4人掛けテーブルにて現在食事中だ。

「食べよう。食べて忘れるんだ」
「そうするといいわ」

これはスパゲッティ、それともパスタというのか？　トマトソースがかかっている。
それなりにおいしい。
姫とシャーリーは、肉をはさんだサンドイッチらしきものを食べ

ている。

らしきもの、とか面倒だな。あれはサンドイッチだ。

「・・・多分だけど、探りを入れてきたんだと思う」

「本妻にはなれないわよ？」

「・・・・・・姫」

「ごめんなさい。で、探りって？」

ふむ。あごに手を当てて考える。

「・・・目的はどちらかまだ分からないけど、探る理由なんて１つしかない」

「それは何？」

「僕の力に気付いた」

「僕の力って・・・、何か色々出来るってだけでしょう？　城とか吹っ飛ばしたり出来るならともかく」

いや、お城吹っ飛ばしたら不味いだろう。

「セラフィナ様、それは違います。力は使いよう、アフィニア様の力は使い方しだいでは一国さえ滅ぼせます」

「すごいわねー」

シャーリーは不満そうだ。

でも仕方ないと思う。姫は力＝目に見える物だからな。

裏でコソコソ洗脳したり、暗殺したりする力というのは、力のうちに入らないのだろう。

俺の使う補助魔法とかも「ふーん」で済ますしな。

火球（ファイアボール）とか、電撃（ライトニングボルト）とかなら認めてくれそうだが。

俺にはまだ使えないが。あれ、中級〜上級なんだよな。

「アフィニア、3時限目はどうするの？」

「図書館に行こうと思ってます」

「またなの？」

またと言われても、こればかりは譲れない。

時間は有限なのだ。

「こちら、よろしいですか？」

ん？　誰だ？

初めて聞く女の声。

「失礼いたしますわ！」

いや、確かに椅子は余ってたが、返事なんかしてないぞ？

彼女は、俺たちのいる席に強引に着いた。

えーと。

金髪縦ロールだ。いやまあ、金髪縦ロール以外にも、今からパーティーですかと聞きたくなる黒の豪華なドレスだったり、同色のドレス（ロンググローブ）用長手袋をしていたりとか特徴はあるのだが。

金髪碧眼は王族や貴族に多い。こんな格好をするのは、それら以外に無いと思うが・・・。

うん。どうやら姫は知り合いらしい。嫌そうな顔をしている。

「なに、この金髪縦ロール」

「・・・ええと」
「そこ、こそこそ喋らないでくださいます！？」
女は居住まいを正すと、コホン、と咳払いをした。
「わたくしは・・・」
「ヴォルフ殿下のいとこよ」
「ちょっと！？　セラフィナ・フォースフィールド！　貴族の名乗りを邪魔するとは何事ですか！」
今のやり取りで分かった。
この娘、すごく面倒くさそう。
「僕、食べ終わったから行くね？　後はごゆっくり」
「私もご一緒いたします」
姫が「逃げるのか！」と視線で責めてきているが・・・、気にしないようにしよう。
「お待ちなさい。わたくしが用があるのは、あなたですわ！」
「えー」
「こほん。わたくしの名はミュウ・イアリー・エリヤ・クラウドですわ！」
「アフィニア・オクスタンです」
一応の礼儀として、自分も名乗っておく。
しかし、クラウドの姓を名乗る以上、クラウド侯爵の正統な直系である事は間違いない。
クラウドとは、クラウド侯爵領を治める直系だけが名乗れる姓で

あり、家を出た者は名乗る事は許されない。
クラウドとは土地の名でもあるのだ。

「それで？　僕に用だとおっしゃいましたが？」
「お兄様を誑(たぶら)かしたとかいう女を、調べに来たのですわ！」

調べに来たとか言われても。
だいたい、本人に言ってどうするというのだ。
あと、ですわですわ五月蝿(うるさ)い。

なんで、語尾の『わ』だけ音が上がるんだ。

「ああ、それなら誤解でしょう。プロポーズなどされてませんよ？」
「そ、そうなんですの？」
「ええ、殿下に聞かれれば分かると思います。では僕はこれで」

なんか、納得いかなそうな顔をしていたが、ここは放っておく事にした。
面倒事は、逃げられなくなってからでいい。

◇　◇　◇　◇　◇

毎回思うが、王立学院図書館に眠る蔵書の数はとんでもない。
しかも、それがろくに整理もせずに置いてあるのだ。
検索できればいいのに。

「んー、やはり難しいね」
「アフィニア様が仰るような召喚魔法、というのは聞いた事がありません」
「神の召喚とかでもいいんだけど。そもそも神様っていうのが、実在してるのか疑わしいし」
「はい。神を信仰する神殿は数あれど、神の奇跡というのを見た人はいません」

創世(そうせい)の時代、１２体の神がいた、とされてはいる。

「神殿で行われている怪我や病気の治療も、呪紋の色と形を変えてるだけで魔法だし」

そしてあの、こちらの世界に来た時に聞いた『エメランディス』という名。
手がかりとなる物はあまりに少ない。

父(とう)さまは邪神『終末の破壊神』と言っていたけれど。
でも詳しくは知らなかった。そもそも神話なども聞かされただけらしい。
邪神を信仰する狂信者たちが『終末の破壊神エメランディス』を召喚して世界を破滅させようとしている、と。

エメランディスについてなら、いくつか記述は見つかっている。
世界の終わりに現れ、太陽を飲み込み、月を飲み込み、最後に大地を飲み込む。
ここなどは、父さまから聞いた情報通りだ。
だが、この邪神は創世(そうせい)の１２体の神に関係があるのかさえ分からない。

「アフィニア様。ノア王国にある、深き迷宮の一番底に異界への門がある、と言われているようです」
「詳しく分かる？」
「いえ。これは、伝聞を集めただけの本のようで」
「ノア王国に、深き迷宮ね。今度詳しく調べてみよう」

少ない手がかりだ。有効利用しなければならない。

「たまには気晴らしをされてはいかがですか？　最近は図書館に通いづめでしたし」
「だけど・・・」
「今日、明日でどうにかなる物ではありませんよ？」
「そう、だね。買い物にでも出かけてみるか」

最近は姫の事もほったらかし状態だったからな。
姫を誘って王都に繰り出すとしよう。

◇　◇　◇　◇　◇

王都クリスタは、高い城壁によって周囲をぐるっと囲まれた城塞都市であり、王城とその南にある『城門前広場』を中心にして、街を東西と南北に貫く2つの大通りが十文字状に交差している。
この2つの大通りは、そのまま東西南北の城門に繋がって、さらにそのまま街道に繋がっている。

王都クリスタは交通、交易などの要所だ。
東の街道は、遠く隣国アーリスの王都ルーカンまで伸び、西は海

に面した港湾都市ガヴァナに続いている。
南は王国第2の都市、エーヴィンを通って隣国ノアに抜け、北は大森林の側を通ってテューレへと向かう。

港湾都市ガヴァナは天然の地形に恵まれた、この大陸でも有数の港であり、他大陸との貿易の中心地だ。
このガヴァナがあるからこそ、この国ジンバルは栄えているといえる。
そのためか、ここクリスタには他国(よそ)では見たことのないような物も多く店先に並べられるのだ。

学院で馬車を出してもらい、俺たちは王都にやってきた。
姫を誘ったら即了承だったので、姫とシャーリーとミュウ・イアリー・エリヤ・クラウドが一緒だった。

「まあ、いまさらだけど。何でいるのコレ」
「仕方ないじゃない。付いて来たがったんだから」
「聞こえていますわ！　まったく失礼ですわ！」

やっぱり、ですわ五月蠅(うるさ)い。

「お兄様にお聞きしましたら『さあ、どうだろうね』と、意味深な事をおっしゃっていましたわ！　ですので、あなたが側室とはいえ、お兄様に相応(ふさわ)しいかテストさせてもらいますわ！」
「えー」

しかも側室決定なんだ。
姫とシャーリーの方を見るが、2人とも苦笑いするばかりだ。
「はっきり言いますが、結婚なんてしませんよ？」

「だまされませんわ！　お昼もそうやって逃げましたわ！　逃がしませんわ！」
「いやだから」
「うるさいですわ！　連れて行けばいいのですわ！」
「五月蠅(うるさ)い黙れ」
「あ」
「あ」

あ、つい頭叩(たた)いちゃった。
いや、そんなに強く叩いてないよ？

「まー！　まー！」
「ご、ごめん」
「アフィニア、その娘(こ)武術科の中級クラスなんだけど」

それを早く言っといてください。

「えーと、でもね・・・、叩かれたのに何でそんなに嬉しそうなの？」
「・・・・・・」

もしかして、M？

「その娘(こ)、友達いないから」
「えー？　上級貴族なんだから、取り巻き無駄に引き連れてるもんじゃないの？」
「しっ、失礼ですわっ！！」

何故だろう。貴族なんて苦手なはずなのに。
まさか、これが恋！？

いやまあ違うのは分かってるけど。

「あー。そうだねテストだね。連れて行ってあげるから泣かないようにね？」

「泣きませんわ！　本当に失礼ですわっ！！」

「ええと、楽しんでいるのは分かるけど・・・、そろそろ行かない？」

周りから、変な目で見られてるしね。

「ミュウのせいで笑われたじゃないか」

「呼び捨てですわ！？」

◇　◇　◇　◇　◇

「へー、冒険者ね」

城門前広場には、たくさんの露店が連なっている。

他大陸からの貿易品、他国からの品を扱っている露店。めずらしい食べ物を売っている屋台など。

職人たちが作ったアクセサリーを、きゃあきゃあいいながら手に取るのを横目に見ながら俺は暇だった。

やはり、女の買い物は長いようだ。

「そうですわ！　やはり、実戦に勝る修練はありませんわ！」

「そうなんだ」

なので、ミュウを話し相手に時間を潰している。
彼女はテストにこだわっているらしく、俺の側を離れようとしないからだ。

「何の話？」
「いや、ミュウは冒険者ギルドの登録カード、持っているって」

戻ってきた姫たちに説明する。
冒険者ギルド。小説ではお馴染みの施設だが、この世界のも仕組みは同じだろうか。

「登録カードね。持ってる人、剣術科の生徒の中にも何人かいたわね」
「魔法科には、多分いなかったと思います」

剣術科や武術科の中には、力試しと小銭稼ぎのために冒険者ギルドに登録する人はけっこういるらしい。
とくに、下級貴族や平民からの特別待遇生徒などに多いとの事。
魔法科は・・・、研究肌が多いからな。

「わたくしは、今までにも何度か依頼を受け、成功させておりますわ！」

自分の胸に手のひらを当て、すごく自慢げに話す彼女。
「すごいねー。ミュウはもうパーティーとか組んだ事あるんだ」
「・・・・・・」

どっちのトラウマだろう。微妙な顔になるミュウ。

組んでた仲間に見捨てられたか、そもそも組んだ事がないか。

「この学院の学費も安くないし、稼ぐのもありかもね」

「ええ、あなたもやってみるべきですわ！・・・て、手伝ってあげても・・・」

「え、何？　後半聞こえなかったけど」

考えてみれば、家はあまり裕福ではなかった。

学費や遊ぶ金ぐらい、自分で稼ぐべきだろう。

「ありがとう、ミュウ。いいことを教えてくれて」

「礼には及びませんわ！」

ふむ。みんなを順番に見ていく俺。

「姫はどう？」

「力試しも面白いかもね」

「シャーリー？」

「アフィニア様に付いていくだけです」

「ミュウ？」

「手伝ってあげますわ！」

なら、やってみるとしようか。

冒険者を。

「姫、シャーリー、３人で冒険者やってみない？」

「仲間外れは酷すぎますわ！！！！！」

冗談だってば。

## １４話　「冒険者デビュー」

「えっ。シャーリーより年上だったの？」
「ええ。もう１４歳ですわ！　敬(うやま)うがいいですわ！」
「胸がな・・・。いや、落ち着きがないから同い年ぐらいかと思ってた」
「し、し、失礼ですわっ！！！！」

冒険者ギルド。
教師に聞いてみたら、自由だと言われた。
もちろん、自己責任で。

学院としても、生徒の経験がそれで上がるのなら、その方がいいとの事。
ここ十数年ほど戦争が無いといっても、いつそれが始まるのか分からないのが現状のようだ。

この国は豊かすぎる。
他の国々は、港湾都市ガヴァナを欲しがっているのだ。

一応、寮の皆にも話してみたが、ララサとササラの２人はもう登録して、他の人と組んでるらしい。
「どこかで会えるといいね」と言っていた。
キュレさんは・・・興味がないそうだ。

「ここですわ！」
「ふーん、けっこう立派な建物だね。冒険者ギルドって儲かるのかな」

「アフィニア様、もう少し小さな声で」

俺は今、姫、シャーリー、ミュウとともに王都にやって来ている。もちろん冒険者ギルドで登録するためだが、あわよくば簡単な依頼でもやってみようと思っている。

そのため、服は実戦向きだ。

「お前意外だがな」

俺やシャーリーは、元々軽装だし魔法使いだ。最悪、杖さえあればいい。姫も今日は革製鎧（レザーアーマー）を身に着けている。だが、ミュウだけは普段着のままなのだ。

今日は全体に刺繍をあしらった、青の豪華なドレスだ。

いや、これを普段着と言ってもいいのか。お前、今から舞踏会（ダンスパーティー）かと言いたくなる。

今からパーティーを組むのだと思うと、皮肉が効いているとしか言いようが無い。

（こいつは一応、冒険者の経験ありだしな。こんなのでもいいのか？）

ギルドの建物は街を南北に貫く、通称『旅人通り』の南側にあった。（ちなみに東西に貫く街路は、ガヴァナに繋がるためか『大海の道』と呼ばれている）

ジンバル王国中にある冒険者ギルドの本部らしく、３階建ての大きな建物だ。

（ああ、そういえば、昔ここでエルフの冒険者を見たな）

感慨にふけっていると、先に歩いていたミュウに「さっさと来な

さいよ」と怒られた。
苦笑して、姫とシャーリーとともに、開け放たれていた両開きの扉をくぐる。

建物の中は、意外といっていいのか小奇麗だった。
カウンターがずらっと並んでいる様は、銀行とかを連想する。

「ええと、1階に依頼の受付、掲示板があって・・・登録は2階かー」
「とりあえず、2階に上がればいいのね？」
「何でわたくしに聞きませんの！？」

姫と案内板を見ていたら、ミュウが怒り出した。
カルシウム足りてないのか？
・・・しかし、先程から視線を多く感じるが・・・。美少女が4人もいれば仕方ないのか。

「よろしくお願いします」

2階に上がり、受付の女性の職員に挨拶する。

「4名様ですね」
「いえ、あちらの派手な娘はもう登録してあるそうですので3名で」

ミュウから睨まれたような気がした。ま、いいけど。

「それでは、こちらの方に必要事項を記入してください」

俺たちに3枚の紙が渡される。
あまり正確な記述は必要ないらしい。元の世界と比べるとアバウ

トというか・・・。
そこの所を聞いてみると、身元を明かしたくない人とかいるからだとか。なんか犯罪に繋がりそうだが、あまりに目に余る行為があるようだと、ギルドから討伐依頼とか出るらしい。

「名前と、年齢と・・・住所。これは、学院寮でいいのかな？」
「それでいいのではない？　私はそう書くわよ？」
「私も書けました。後は・・・指印ですか」

元の世界の拇印のようなものか。でも朱肉なんて無いが。

「これは、こうやるのですわ！」

ミュウは自慢げに言い、左手の親指を軽くナイフで切るとそれを紙に押し付けた。
・・・血判？

「ま、まあいいや。でもやり方教えてくれたのはいいけど、もう1枚、用紙を貰って来ないと」

◇　◇　◇　◇　◇

「それでは、アフィニア・オクスタン様、セラフィナ・フォースフィールド様、シャーリーオール様、ご登録が終わりましたのでカードをお渡しいたします」

3人とも黒っぽい金属製のカードを渡される。名前など、さきほ

ど書いた情報が載っているようだ。

「カードはあくまで、冒険者ギルドの一員である、という証明のためのものです。失くさないでください」

「失くした場合、どうなりますか」

「再発行にはお金がかかります。そしてもし犯罪に使われた場合、賠償金が発生することもあります」

それは怖い。失くさないよう気をつけよう。

「最初は初級ランクからのスタートとなっております」

ここらは学院と似ていた。初級から始まり、依頼をこなす事によって点数（ポイント）をため、それが一定になると上のランクになれるのだ。依頼にはそれぞれ点数（ポイント）が設定され、難しい物ほど点数（ポイント）が高い。

初級は初級ランクの依頼を、中級は初級と中級のランクの依頼を。上級は全ての依頼を受けられるらしい。これは、この大陸どこの冒険者ギルドでも同じなのだそうだ。

ただし、点数（ポイント）は中級クラスになると中級の依頼だけしか付かないらしい。これは、中級クラスがちまちま初級の依頼をこなして上級になるのを防ぐためだとか。

それ以外に、依頼の受け方や、依頼を達成出来なかった時のペナルティ。そしてその後の他の冒険者への依頼の引継ぎの仕方など、事細かに教わった。

「パーティー申請はされますか？」

「申請すると・・・、どうなるのですか？」

「特別な意味はありませんが・・・。たとえば、支援などがあればパーティー単位で受けられますし、後、他のメンバーが個人で依頼

を受けている時でも、どんな依頼なのか、ギルドに尋ねることも出来ます」
「なら、申請いたします」
「わ、わたくしも、わたくしもですわ！」

仲間外れにされると思ったのか、あわてるミュウ。やろうとは思ってたけどな、冗談で。

「では、ミュウ・イアリー・エリヤ・クラウド様も含めて４人でのパーティー申請、受け付けました」
「さっそく、掲示板でも見てみましょうか」

姫はとってもやる気だ。
俺たちは連れ立って１階に下りる。

「しかし、ミュウは本名で登録してるんだな」
「当然ですわ！　わたくしには、何一つとして隠すような事などございませんわ！」

いや、隠せよ。おまえ、上級貴族だろうが。

「姫はさすがに隠したね」
「もともと王女だと分かるまでは、セラフィナ・フォースフィールドだけだったから。違和感は無いわね」
「そうなんだ」

さて、掲示板はと。
でっかい掲示板があった。そこには所狭しと、数々の依頼の紙が貼られている。
見たところ、初級から中級までの依頼だけで、上級クラスの依頼

は別の所にあるようだ。

「初級の冒険者というと、ゴブリン退治とかかな」

「ゴブリン・・・ですか？」

「ゴブリンなんて初級の冒険者が倒せるわけないじゃない。騎士団とかが出向くレベルよ？」

ゴブリンいたんだ。それで、どんだけ強いんだ。

「馬鹿を言ってるのではないですわ！　初級クラスならこれぐらいですわ！」

「まあいいけど。・・・ええと、ダークハウンドの退治。１０匹未満か」

ダークハウンドか、見たことはないが懐かしい。

点数（ポイント）は２点、報酬は１２００シラだ。１２００シラというと、一人当たり３００シラで銅貨６枚。１シラがおそらく１００円前後だと思うから、約３万円か。

命を賭ける代償として、安いか高いか分からないが・・・。

「これで行ってみようか。場所も遠くないし、行った事あるし」

「面白そう」

俺たちは、掲示板から依頼書を剥ぎ取ってカウンターに向かった。

◇　◇　◇　◇　◇

目的地は王都の北門から出て、街道を馬車に揺られて1時間ほどの所にあった。

「アルミナ湖だ、懐かしい・・・」
「私はここは初めて」
「私もです」

「わたくしは何度も来た事がありますわ！」

俺以外は来た事がないようだ。
昔、ここで魔獣に襲われた時の話とかをしてみる。

「魔獣かー。戦ってみたいわね」
「あの時の話ですね。・・・あの時は、とっても心配したんですよ？」
「ごめん、ごめん。反省してる」

「・・・ちょっと、わたくしの話も聞いてくださいませ！」

うん。さすがに可哀想だから相手をする。

「ええと、ギルドの依頼で来たことがあるとか？」
「そ、そうですわ！」
「1人で？」
「・・・グランドは一緒に来ましたわ」
「・・・・・・」

ここまで乗って来た、馬車の御者であるグランドさん。この人はクラウド侯爵家に仕えている御者さんで、昔はそれなりに名の通った冒険者だったとか。

利用出来る物は利用してしまおうと、今日は朝からずっと連れ回しているわけだが、ちっとも嫌な顔をしない人格者なのだ。
・・・ミュウのお世話係でもあるようだが。

「さて、ではどうやって探す？」
「湖周辺に出る、との事だから・・・ぐるっと一周してみる？」

反論はないようなので、湖を一周する事に決まった。
馬車はグランドさんがいるから大丈夫との事。彼に手伝ってもらった方が早い気もするのだが。
・・・それは意味がないか。

「では、行って来ます。後は頼みますね」
「お気をつけて」

俺たちは、多少警戒しながらものんびりと歩いた。
ミュウはやっぱりドレスだった。

ダークハウンドに遭遇したのは、およそそれから３０分後だった。
１０匹未満との事だったが、それよりは多く１６匹。
だが。
所詮大きいだけの犬の魔物（モンスター）、俺たちの敵ではなかった。正確に言うと、姫とミュウの敵ではなかった。

「もう１匹！」

ぎゃうん、と悲鳴が聞こえる。姫の血に濡れた長剣（ロングソード）が、ダークハウンドの頭を叩き割る。
さすがというべきか。父さまの教えを2年間も受けたのだ。
剣をたたきつけた反動を利用し、目標を次々と変えながら連続で

斬り付ける。

「あなた、中々の腕前ですわ！」

対抗するように、ミュウは飛び掛ってきたダークハウンドの攻撃を躱しつつも蹴りで打ち上げ、落ちてきたところに掌底突きを決める。

そいつは、空を錐揉みしながら飛んで・・・べちゃり、と木に叩きつけられた。

「あー。武器とか持っていないと思ってたけど、やっぱり素手だったか・・・ドレスなのに」

「なんというか、セラフィナ様も凄いですけど・・・彼女は凄まじいですね」

素手なのだから間合いは狭いはずなのだが、ひらりひらりと躱しながら肘、蹴り、掌底突きを叩きこんでいく。

最初は俺やシャーリーも魔法を使って攻撃していたのだが、なんか途中から必要なくなってしまった。

「なんか、火薬庫の上で火遊びをしてた気分だ」

自重なんてしないが。

「あぶない、アフィニア様！」

電撃！　シャーリーの声が響く。

青白い稲光が呪紋から一直線に走り、俺に背後から襲いかかろうとしたダークハウンドを撃ち倒した。

「ありがとう、シャーリー」
「はい。・・・まだ油断しないで下さい」
「・・・でも、もう終わりそうだけどね・・・」

姫とミュウの一方的な殲滅戦は、どちらが多く倒すかを競い合い・・・早々と終わろうとしていた。

えーと。もしかして、俺、一番役に立ってない？

## １４話　「冒険者デビュー」（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。まだまだ続きますので、よろしくお願いいたします。

## 15話　「ヴォルフ殿下との会談」

「初依頼成功に、乾杯！！」
「「「乾杯！！！」」」

俺の乾杯の掛け声に、みんなもグラスを掲げ乾杯を唱和する。

初めての冒険を成功で終わらせた俺達は、街の料理屋に繰り出していた。
本来ならば酒場なのだろうが、飲酒は１６歳からなので残念ながら誰も飲めない。
飲んだ事がないので、少しばかり興味があったのだが。

「でも正直な話、ミュウにはびっくりしたね」
「なに、また馬鹿にするつもり？」

ジロリ、と睨んでくるミュウ。

「ドレスで来たのを見たときは、こいつ大丈夫か、なんて思ったのは本当だけれど」
「やっぱり悪口ですわ！」
「いいから、最後まで聞いて？　あの戦いを見たら、そんな感想は吹っ飛んだよ。実際の話、姫も相当強いと思っていたけれど、ミュウも同じくらい強いんじゃない？」
「・・・え、と・・・」

俯(うつむ)いて真っ赤になるミュウ。こいつやっぱり、褒められ慣れていないな。

「うん。ミュウは強いな。武術科の中級クラスというのは分かっていたけれど、あそこまで強いとはね」
「セラフィナ・フォースフィールド、あなたまで・・・」
ますます赤くなるミュウ。
「一度、手合わせしてみたい程だ」
「・・・・・・」
シャーリーは我関せずとばかりに、黙々と食事を続けている。
チームワークとか、なんかバラバラだよな。
「あ、そうだ」
「どうした？　アフィニア」
「僕、ミュウに未だに名前で呼んで貰ってないんだよね。姫は逆にフルネームだしさ」
「ふむ、それは確かに」
ミュウは話の流れ的に嫌そうな顔をしている。
「ね、ミュウ。僕の事名前で呼んでみて？　ほら『あ・ふぃ・に・あ』」
「・・・・・・」
「仲間なのだから呼んでやったらどうだ？　。私もセラフィナ、と名前だけでいいぞ？」
「ア・・・ア、アフィ・・・・・・」
まるで、生まれたばかりの小鹿が立つのを応援している気持ちだ。
「アフィ、アフィ・・・あ、あなたなんか、あなたで十分ですわ！

！」
「えー・・・。がっかり。がっかりだよミュウ」
「うむ、それは無いな」

◇　◇　◇　◇　◇

「お兄様が2人で会いたい、と仰(おっしゃ)られていますわ！」

ミュウ・イアリー・エリヤ・クラウドがそう言い出したのは、冒険に初めて行ってから2週間後の事だった。

あの後も3回ほど4人で依頼をこなしはしたが、やはり学生の本分は勉強である。
調べなければならない事もあるしな。
そう思って、今日は図書館にやって来たのだが・・・調べ物を始めた矢先、突然ミュウがやって来て冒頭の台詞(せりふ)を聞かされた、というわけだ。

図書館なんだから静かにしろ！　常識の無いヤツめ、と言いたい。

「言っていますわ！」

あれ？言ってた？

「まあまあ、今のは心の声だから気にしないで。で、ヴォルフ殿下が僕に会いたいと言っていた、でいいんだよね」
「そうですわ」

「会うのは構わないのだけれど・・・いつ？　場所とかは？」
「聞いてませんわ！」
つ、使えねー。
「はい。回れ右」
「な、何を」
肩を持って、くるんと１８０度回転させる。
「さ、もう一回ヴォルフ殿下のとこ行って、場所と時間を聞いてきて。寄り道しちゃ駄目だからね」
「子供のおつかいですわ！？」
文句を言いながら彼女は行ってしまった。
毎回見て思うが、まったく見事な金髪縦ロールだ。
しかし、何だかんだといっても、最後にはこちらの言う事を聞いてくれるのだから・・・ちょろい。
「ヴォルフ殿下か。いつか接触を図ってくるとは思っていたけど、早かったな」
「私も付いて行きましょうか」
「２人で、という事らしいからね。ま、危険は無いさ」
ミュウに聞いてもらってきたところ、時間も場所もこちらが決めてよかったらしく、再び彼女に伝言を頼むことになった。あの、切れ者っぽい王子殿下にしては間の抜けた話だが、単にミュウが王子の話を聞かなかっただけかもしれない。

ミュウにはよくある事だからな。困ったドリルだ。

場所は放課後、初級の魔法科の教室で、となった。
誰も来ないよう、シャーリーに教室の外で見張りを頼むつもりだ。
姫には昼食の席で話をしたが、「気をつけて。終わるまで待ってるから」との事。

何が出るか。

扉の開く音がして・・・、シャーリーが顔をのぞかせた。

「おいでになりました」
「ありがとう」
「少しばかり待たせたようだ」

入って来たのは、眼鏡をかけた細身な男。中指で眼鏡の位置を直す格好が、いかにもキザっぽい。
彼は椅子を移動させてきて、机を挟んだ対面に座った。

「では、シャーリー、見張りお願い」
「任せて下さい」

扉が閉まる。

「・・・・・・」
「・・・・・・」

ヴォルフ殿下はいつかのような、まるで値踏みするかのような視線を向けてくる。
先に沈黙に耐えられなくなったのは・・・俺だった。

「ええと、2人で会いたい、との事ですが・・・何の御用でしょうか？」
「そうだね。君に聞きたい事がある」
「僕に答えられる事でしたら」
「君は・・・どこから来たんだい？」

ええと、この娘（こ）の・・・この体の出身地って事だよな。

「昔の事は、よく覚えてません」
「ふむ。覚えていない、か。生贄の儀式のショックらしいね」
「・・・・・・」

そこまで知ってるか。父さまが、あの事件の関係者を口止めしているとはいえ、完璧ではない。

「邪神召喚の書」
「！？」
「60点だね。よく感情が表に出ないよう訓練してると思うけど。突発的な事には弱いようだ」
「そ、そんな事は」

自分でも何を言いたいのか分からない。だが、とりあえず動揺を抑えなければ。
一つ、深呼吸をする。

「何の事を仰（おっしゃ）っているのか分かりません」
「へえ、もう立て直したのか。・・・腹の探りあいをしていても仕方がない、単刀直入に言おう」
「・・・何でしょうか？」

「私の部下になってもらえないか？　君の能力が欲しい」

それは予想していた言葉だった。

その答えなら用意してある。

「僕には、大した能力はありませんよ。魔法科の落ちこぼれですよ？」

「ああ、誤魔化(ごまか)さなくてもいい。いつだったか、セラフィナ王女が君の家に泊まりに行った事があっただろう。その時何か、そう黒ずくめの男と会わなかったかい？」

こいつの差し金か！

やはり、息の根を止めておくべきだった！　・・・無理だったと思うけど。

「機会(チャンス)があれば、君達に接触するように命令していたのだけれど。・・・なんらかの反応があれば面白い程度に考えていたが、彼はずいぶんと役に立ってくれたよ」

「・・・」

「大昔の魔法使いが使えたと言われている、精神干渉系魔法。まさか、使い手に出会えるとは思わなかった」

知られてはならない情報を握られている。

だが、どう対処すればいいのだ。

「私は君の望むものを、ある程度は提供できる」

「・・・お、俺は・・・」

「いきなり答えは難しいだろうが、よく考えてみてほしい」

正直俺は混乱していた。何もかも知っているような口振りだ。

何を知っているのか、どこまで知っているのか。
それともはったりか。
思考に沈んでる間にヴォルフ殿下はいなくなり・・・、シャーリーが心配そうな顔で立っていた。

◇　◇　◇　◇　◇

寮への帰り道。姫とシャーリーとともに歩きながら、俺はずっと考えていた。
いつから、と。
いつからヴォルフ殿下は俺に興味を持っていたのか。
姫と接触した頃・・・9歳前後か？　だが、邪神召喚の書の事も知っていた。あれは、生贄の儀式のときに失われてしまったし、それを知っているのは父さまと、新米騎士のカインさんだけだったはずだ。
まさか、あの当時からというわけはないだろう・・・。
考えても分かるはずがない。俺はヴォルフ殿下ではないのだから。
とりあえず、今回は俺の負け。
ヴォルフ殿下のお誘いも今は保留だ。
何より姫に、心配そうな顔をさせたままでいたくはない。
「姫。もう大丈夫。もう心配いらないよ？」

「本当にそうならいいのだけれど。私の事で済まない」
姫は自分のせいだと思っているようだ。
王子たちに目を付けられたのは自分に関わったせいだと。
これは・・・俺がどんなに否定しても、姫が納得する事は無いだろう。
なら。
「姫。笑う笑う。笑顔の姫の方が、僕は好きだな」
姫のほっぺを、むにーと引っぱる。真っ赤になって俯(うつむ)く姫。
「そ、そうか。そうだな、笑顔の私が好きか」
「うん」
「では、ずっと笑顔でいるとしよう」
にこり、と笑う姫。俺も釣られて笑顔になる。
姫はやはり綺麗だ。
「どうやらお話は終わったようですね。早く寮に帰って夕食を食べましょう」
シャーリーが面白くなさそうに言う。
そうだな。うまい物を食べれば悩みなんて消えるだろう。逃避だとしても。
あ、でも・・・うまい物といえば。
最近、故郷の食べ物が無性に食べたくなる。
無理だが、お米や味噌、醤油味のものが食べたい・・・。
醤油ってどうやって作るんだ！？

◇　◇　◇　◇　◇

「姫、今回の誕生日も城でパーティーするの？」
「ああ。だれも祝いたくはないだろうが、お父様がな」

姫の誕生日を迎えるのは、これで3度目だ。
出会ったばかりの時と、去年、そして今年。でも、姫はお城で誕生パーティーをするため当日には無理だ。
上級貴族が集まってくるパーティーだからな。
一応、出席はするが姫と話す事すら難しい。

なので変わりに、誕生日である金の17日の3日前に祝ってあげる事にしているのだ。

「だけど、場所が問題だよね」
「なにが問題なんだ？」
「家に帰って祝うか、寮で祝うか・・・という事」

いつもだったら屋敷で祝う以外の選択肢は無いけれど。

「まだ、入学して2ヶ月経ってないからね。家に帰るのはまだ早い気もするし」
「ですが、旦那様と奥方様はもう、そのつもりで用意されているかもしれません」
「寮で祝う、というのも中々いいかなと思ったんだけどね」

ララサさんとササラさん。キュレさんに寮母のクレアさん。
彼女たちと親睦を深める、というのも悪くない。

「私としてはどちらでもうれしい。だが、いつものアレは食べたいな」
「アレ？　誕生日ケーキのことかな？」
「そうだ。ケーキだ」

我が家で、初めて姫の誕生日を祝ったときに俺が作ったのだが、姫はすっかりケーキの虜（とりこ）になってしまった。それ以来、誰かの誕生日があるたびおねだりされている。

卵と小麦粉と砂糖を使い、スポンジケーキを作ろうとしたのだが、元の世界の物ほどにはふっくらとは膨らまなかった。小麦粉の種類が違う可能性もある。
それでも、今、この世界にある他のケーキよりは口当たりが柔らからしい。ケーキ作りは空気を含ませる事が大事だったはずなので、おそらく自作の泡立て器のおかげだろう。
その上に、生乳から取り泡立てた生クリームと果物で飾り付けたものだ。

この世界にもチーズケーキや、甘いパンはあるとの事。
姫は食べた事があるそうだが、チーズケーキといっても俺の知ってる物とは違うようだ。

「大丈夫、それはちゃんと用意するから」
「期待してる」

とりあえずは、父（とう）さまと母（かあ）さまに聞いてみるとしよう。

## 16話　「お誕生会」

「姫、誕生日おめでとうー」
「「「おめでとう」」」

俺の言葉に、みんなの声が重なる。この第9女子寮に住む姫と俺を除く5人＋1人の声だ。
双子さんやキュレさん、クレアさんも快く了承してくれたので、寮での誕生会と相成った。

「みんな、ありがとう」

姫はとってもうれしそうだ。
父さまと母さまに聞いてみたところ、今回は寮で親睦を深める方がいいだろうと言う事になった。
さすが父さまと母さま。

「まあ、ミュウが来るかもしれないとは思ってたけどさ」
「仲間外れは酷いですわ！」
「仲間って。今回は寮のメンバーだけでのお祝いなんだけどな」
「まあまあ、いいじゃないかい。一緒に祝ってもらおうさ」
「さすが寮母さんは人間が出来ていますわ！」

いやまあ、さすがに追い返すつもりは無かったけどさ。

大きなテーブルの真ん中に、デンとおかれた真っ白なホールケーキ。
赤や、紫など色とりどりの果物で飾り付けられている。
本当なら、誕生日ケーキに蝋燭とか立てたかったのだが、こちら

にはその風習は無いようで断念した。
だが、みんなの視線は俺の作ったケーキに釘付けだ。
特に食べた事がない、ララサさんやササラさん、ミュウやキュレさんの視線は熱かった。心なしか寮母のクレアさんも。今までホイップクリームなんて、見たことはないだろうから。

「ケーキは食事の後でね」
「は、はい」

今日の料理はクレアさんがいつもより手間暇(てまひま)かけて作ってくれたものだ。
鳥の丸焼きや魚料理、シチューなどがテーブルに所狭しと並べられている。

「クレアさん、今日はありがとう」
「たまにはこういうのもいいさ。あんたたちの歓迎会以来だねぇ」
「そうですね」

みんなが食事をしているのを眺めるのもそれなりに楽しい。
何より1人1人個性が出ていて面白い。
姫は見かけによらず豪快に食べる。ちまちま食べても美味しくないとの事だが。
一口一口をかみ締めながら食べる娘(こ)もいれば、ちびちび食べているはずなのに、すでに周りの皿が空っぽになっている娘(こ)もいる。

「・・・アフィニア、食べないのなら、私が食べてあげるよ？」
「キュレさん。僕の皿まで狙わないで」
「・・・日頃、ろくに物を食べてないから・・・」
「いつもおかわりしてますからあなた。むしろ僕より食べてますから」

「・・・ケチ・・・」

いや、こんなことでケチとか言われても。あなたの家、金持ちでしょうに。

まあ、いつもの事なのでみんなスルーだが。

「食べ過ぎて、ケーキが食べられなくなっても知りませんよ？」

「・・・おお、それは由々しき事態。腹六分目で止めておこう」

「私もそうするとしよう」

キュレさんも姫も、そんだけ食べてまだ腹六分目なのか。

いったい体のどこに消えているんだろう。

「それなら、そろそろケーキを切り分けるとしましょうか」

「おお」

「待っていました！」

大きなホールケーキを、温めたナイフで切り分けていく。

丁度八等分か。狙ったわけではないが、切り分けやすい人数になったものだ。

「ちょっと大きくなったから、これ、姫にね」

「ありがとう」

「反対側のやつは、今日の料理を頑張ってくれたクレアさんに」

「おや、あたしも貰えるのかい？」

「どうぞどうぞ」

その後も、キュレさん、ララサさんとササラさん、シャーリーと配り・・・最後にミュウと俺。

「それじゃあ、どうぞ食べて」
「では遠慮なく」

一斉に食べ始めるみんな。口の周りが、ヒゲのように白くなっているのはご愛嬌だ。

「こ、これは・・・食べた事ない食感だね。ふわふわで・・・甘い」とララサさん。
「ええ～。ふわふわ～」とはササラさん。ふわふわなのはあなたもです。
「・・・これは至高の一品と言わざるを得ません・・・」とキュレさん。
「口の中でサーっと溶けていくよ。どうやって作ったのか興味があるね？」
「わたくしは、ええと、ええと」

最後に寮母のクレアさんと、感想が出てこなかったミュウ。
無理に料理評論家のようなコメントは要らないのだけど。
それを、姫とシャーリーが頷きながら笑っている。
女の子は甘い物が好きだということだったが、こちらの世界でも同じだろうか。

「そうだ！！　これよこれ！！」

突然、いつもとまったく違うテンションで叫ぶキュレさん。

「な、何？」
「これは、あなたが考えて作った物？」
「ええと・・・まあそうです」
「料理のアイデアの天才である、あなたにお願いがあります」

料理のアイデアの天才・・・。本当の事を言うと、俺が発明したのではないのだが。
少しばかり後ろめたい。
「私の知り合いの店なんだけど、協力してあげてほしいの」

◇　◇　◇　◇　◇

キュレさんから相談を受けたものの、その3日後には姫の本当の誕生パーティーがあった。
俺や父さま母さまもお城にお呼ばれしているのだ。2人に久し振りに会えるので楽しみだ。
それに、俺達で既に祝っているとはいえ姫の本当の誕生日なのだ。たとえ、話をする機会がなかったとしても万難を排して出席するのが友達というものであろう。

そんな事をしているうちに1週間が経っていた。俺がふとした時に、相談の事を思い出したのでキュレさんに聞いてみたのだが・・・どうやら、本人も忘れていたっぽい。
俺の話を聞いたとき、『あ』と口をぽっかり開けていたからな。
それで寮で詳しく話しを聞いてみる事になったのだが。
彼女の話はつまりこういう事だった。

キュレさんのいとこに当たる、ワイアールという今年２０歳になった男性。彼は男爵家の三男という立場であり、家を継ぐ事は出来

ない。だが、だからといって騎士になる才能も意欲も無かった。
だが、彼には夢があった。自分の店を出す、という夢が。
「素敵ではないですか」と、シャーリー。
「・・・そうなんだけどね」とキュレさん。
学院生である間に一生懸命働いて、お金を貯めてお店を出すところまでは漕ぎ着けたそうだ。
だが、そこで悩む事になった。
彼はどんな店を出していいか分からなかったのだ。店を出す夢はあれど、どんな店にするかという事までは考えていなかったらしい。
「ええと」
「それは駄目だろう・・・」
姫のため息。いやまあ、俺も同感だが。
それで、手伝いで料理屋で働く事が多かったとかいう理由で、料理屋を出店したそうだ。
だが、そんな考えで上手くいくほど世の中は甘くはなかった。
「で、泣き付かれたと」
「・・・ええ。悪い人ではないのだけど・・・」
出店費用でお金も余り残ってないらしいし、親に助けてもらうわけにもいかないそうだ。
俺は、どうしようか、と周りのみんなを見渡した。
姫。シャーリー。キュレさんになぜかいるミュウ。
「放っておくのが本人の為ですわ！」
「呆れる気持ちは分かるけど・・・助けてあげられないかな・・・

？」

ミュウとキュレさん。シャーリーはいつもの通り、俺の判断に従うだけだろう。

「姫は？」

「そうだな、アフィニアさえよければ、助けてやってもいいのではないか？　少なくとも、親に頼らず店まで出した努力は認めるべきだろう」

姫は努力とか根性とか好きだからな。それに、姫にそう言われてみれば納得できる所もある。

「女の子からのお願いでもあるしね」

「・・・女の子って。・・・私はもう17よ？　まあ、あなたに言われると違和感はないのだけれど」

不思議ね、とキュレさんは独りごちた。

姫とシャーリーは、面白くなさそうな顔をしている。その意味がわからない程、俺は鈍くない。

「大丈夫、姫とシャーリーにも手伝ってもらうから。仲間外れになんてしないよ？」

「わたくしは！？」

「・・・ミュウか。何かの役に立つの？」

「まったく失礼ですわ！！」

「・・・まあ、味見ぐらいかな・・・」

ミュウが「まー！　まー！」と怒っているが放っておこう。・・・何故か姫とシャーリーが小さくため息をついたような気がしたのだ

が、気のせいだろうか？
　とりあえず翌日に店を見せてもらう事になって、その日は解散となった。

◇　◇　◇　◇　◇

　その店は、通称『旅人通り』の裏通りにあった。
　店を初めて見た感想はといえば・・・「狭い」。料理をする厨房スペースと、カウンター席が４席。あとは４人掛けテーブル席が２つだけという、こぢんまりとしたお店だった。
　そこでキュレさんに紹介されたのは、なんというか頼りない、という言葉がぴったり合う人だ。

「ワイアールといいます。今回はその、苦労をかけるね。おれが不甲斐無いばかりに・・・」
「アフィニアと申します。ええと、この３人は友達のセラフィナとシャーリーとミュウです」
「セラフィナ・フォースフィールドです」
「シャーリーオールと申します」
「ミュウ・イアリー・エリヤ・クラウドですわ！」

　３人も自己紹介が終わる。さすがに、ミュウの実家の名を聞いたときにはびびっていたが。

「とりあえず、料理の腕が見てみたいです。何か作ってもらえませんか？」
「うん、分かった。何でもいいんだね？」

ワイアールさんの料理の腕を知らなければ始まらないからな。
「自信とかあるのかな」
「料理屋で手伝いとかしていたのでしょう？」
「わたくしは、味にうるさいですわよ」
「食べてみれば分かる事だ」

俺の言葉に、シャーリー、ミュウ、姫が答える。
だが何故かキュレさんは黙ったままだ。
もしかしたら、もう食べた事があるのかもしれない。
「とりあえず、牛肉のワイン風煮込みとパン入りスープだけど」

しばらくして出てきた料理を、５人で食べる。
だが、食べたのは最初の一口、二口で、みんなスプーンを置いてしまう。

「ええと、なんていうのか」
「普通ですわね」
「けっして不味いわけではないのだが・・・」

そう、不味いわけではないのだ。だが・・・普通だった。とにかく普通だった。
不味いわけではないが、特別美味しくもないのだ。

「ええと、正直に言います。これ以上に自信のある料理はありますか？　無ければ料理屋は無理です」
「や、やっぱりそうか・・・」
「キュレさんは分かっていたようですね」

「ええ」

この現状を分かった上で、この俺に相談してきたということか。

ワイアールさんの料理の腕を上げる。だが、一朝一夕にそれは無理だ。

だとすれば、アイデア料理。しかも料理の腕がそこそこでも出来る料理ということか・・・。

「難問を持って来ましたね、キュレさん」

てへっ、とかやっても誤魔化されませんからね。可愛いけど。

「ワイアールさん、料理にこだわりとかありますか？　他には、店についてこれだけは譲れない、とか」

「特別なこだわりはないけれど・・・」

「では、好きにやらせてもらってもいいですか？」

「よろしく頼むよ」

何とかやってみるとしよう。俺一人では無理でも、力を合わせれば何とかなるだろう。

「姫、シャーリー、キュレさん・・・そしてミュウ、とりあえずサポートよろしく」

みんなは、コクリ、と頷いてくれる。

「目標は王都一の繁盛店だな」

「いや、姫、それはちょっと無理だってば」

## 17話　「ワイアールの店」

先輩と付き合い始めたのは5日前。
1年かけて、ようやく告白にOKを貰ったのだ。

友達には「振られても付きまとってるなんて、まるでス〇ーカーのようだ」と言われまくっていたが。
いや、俺も考えないではなかったのだが。
大丈夫。OKは貰った。勝てば官軍、全てが正当化されるのだ。

先輩はいつも通り、下駄箱の所で待っていてくれるだろう。ならば、俺は言うのだ。

「待った？」と。そうしたら、先輩はこう言ってくれるはずだ。
「ううん、今来たところ」

うん、これだ。自分でもちょっと頭湧いてる？　と思わないではないが、付き合い始めなんてこんなものだ。
きっとみんなそう。
いつもより早足で下駄箱に向かう。うん、やっぱり待っててくれた。
あの少し茶色っぽい事を気にしていた、腰まである長い髪。
「亜美乃（あみの）先輩！　お待たせしました！」
「ようやく来たね」

先輩は読んでいた小説をカバンにしまうと、こちらを見てにっこりと笑ってくれた。
それだけで俺は舞い上がってしまう。

「今日は本を買いたいから、・・・駅前の本屋まで付き合ってくれる？」
「もちろんですとも！」
「君はいつも元気だね」
「それは先輩の前だからです。当たり前です」

先輩と二人、駅方面に向かって歩く。
だけど、俺は先輩の唇（くちびる）が気になっていた。付き合って一週間、まだ早いだろうか。
いやでもしかし。
そんな俺を見て、先輩はクスリ、と笑う。

「ここが、そんなに気になる？」

下唇に人差し指を当てながら先輩は尋ねてくる。

「ええと・・・ごめんなさい」
「何であやまるの？　君とわたしは付き合ってるんだから、別に構わないでしょう？」
「そ、そうですか・・・ええと、その、したい、といったらダメですか？」
「何を？」

先輩は俺をからかうように笑う。「さあ、言ってみて」と。

「ええと、その・・・、キスです」
「聞こえないわ」
「キスしたいです！！」
「いいわよ」

「ほ、ほ、本当ですか！？　うわー。こんな展開、まるで夢のようです！」
「ええ、そうね。だって夢だもの」
「・・・・・・・・・・・・・夢ですか」
「そうよ」
「・・・・・・」
「だって・・・・」

先輩はこちらを悲しげな目で見てきた。

「あなたがわたしを置いてどこかに行ってしまったのよ？」
「そ、それは誤解です・・・俺は・・・」

「俺は・・・。その後になんて言うつもりだったのだろう」

目を開けたら朝だった。先輩はどこにもいないし、そもそもここは異世界だ。
先輩・・・か。いつも寂しそうにしていた先輩。結局、その理由は分からずじまいだ。この世界になど来ず、ちゃんと先輩と付き合えていたならば・・・その理由が分かったのだろうか？
俺が先輩にこだわるのは、始められなかった事を悔やんでいるからなのだろうか・・・。

「アフィニア様、今日はお早いですね？」
「そうだね。たまにはいいと思わない？」

褐色の肌と銀色の髪を持つ少女が柔らかく笑う。

ワイアールさんのお店対策を、今日から本格的に立てていかなけ

ればならない。
気分を切り替えていこう。
「とりあえず、冷たい水で顔を洗ってくるね？」

◇　◇　◇　◇　◇

「ではとりあえず、２つほど考えたので試食会を始めたいと思います」
「おー」

４人掛けテーブル席には、いつものメンバーが座っている。
今日はワイアールさんのお店の厨房を借りて、２つほど料理というか、お菓子を作ってみた。
ワイアールさんは感心しながら眺めていたけれど・・・本番では、あなたが作るんですよ？

「とりあえず、今日のメニューはクレープとプリンです」
「く、くれぃぷ？」
「ぷりん？」
「そうそう」
「ええと、料理の名前だと思うのですが、どういう意味なのですか？」
「え」
クレープってどういう意味だっけ？　プリンはぷりん、としてるから？

「シャーリー。イメージ的な物なので、深く突っ込まないように」
「はい」
「では、まずはクレープからです。ワイアールさん、どうぞ」
「はい、お待たせしました」

なんというか、ワイアールさん完全に助手になってるな。

「これは、卵、砂糖と小麦粉、生乳にバターを加えて混ぜた材料を、鉄板で薄く焼いたものなんだけど。で、今回はホイップクリームとぶどうのジャムを巻いてあるけど・・・、挟むのは果物とかでもいいよ？」
「・・・調べたんだけど、このクリームというのは牛や羊の乳から取れるらしいね？」

さすがキュレさん。調べたりするのは得意分野だ。

「・・・だけど、この食感は・・・どうやるんだろう？」
「混ぜ方ですね。まあとりあえず、他のみんなも食べてみてください」

４人＋（プラス）ワイアールさんが食べるのを観察する。今、思ったんだけど・・・太らないといいな。

「うん。これは美味いな。この白いのがふわふわだ。ジャムとの相性もいい」
「さすがアフィニア様です。この皮というのですか、これも甘い香りがします」
「え、えーと」

姫、シャーリーには好評、と。

「ミュウは無理して小難しい事言わなくていいよ」
「・・・・・・」
「うーむ。君は料理の天才だね」

ワイアールさんにも好評価。キュレさんは・・・考え事に没頭してしまったようだ。
これは放っておくか。

「では、次にいきます。ワイアールさん？」
「次だね、ちょっと待ってて」
「出来立てでなくていいのか？　そのぷりんというものは」
「冷めたほうが美味しいかな」
「ふむ」
「お待たせ。取って来たよ」

みんなの前に、皿に乗ったプリンが置かれる。上にはカラメルソースがかかっている。

「これはプリン、という物です。材料は卵と砂糖と牛乳です」
「普通に手に入る物だな」
「手に入れるのに苦労する物を使っても意味がないからね。さ、食べて食べて」

先程と同じように観察する。すぐに食べる娘もいれば、スプーンでつついて楽しんでる娘もいる。
そのぷるぷるしたの、いいよね。

「これもいいな。なめらか、というか。しかもぷるぷると揺れるの

が面白い」
「ええ。この上に乗っている褐色のソースが甘さの中にほろ苦さがあって・・・」
「えーと、お、美味しいわ！」

うむ。いい感じだ。
まさか、先輩を餌付けするために練習したお菓子作りがこんなところで役に立とうとは。

「どうですか？　ワイアールさん、キュレさん」
「・・・いいのではないかしら。ただ、問題は・・・」
「おれに作れるかどうか、かな？」

自信なさげに言うワイアールさん。

「そこは特訓でもして身に付けてもらいます。ですが、他にもやってもらいたい事があります」
「・・・何かしら？」

あれ、そこで答えるのキュレさんなんだ。まあいいか。

「店員です。出来れば、可愛い女の子がいいです」
「・・・あなたの趣味で？」
「それは否定しませんが・・・お菓子を売るのは、むさくるしい男よりも可愛い女の子がやるべきです！」

あれ？　姫とシャーリーが呆れてるよ？　ミュウに至っては冷たい視線で俺を見てるんだけど？
中身はどうあれ、今俺は女の子なのに。なんで責められてるのだろう。

「・・・その理屈はよく分からないけれど・・・ワイアールもそれでいいの？」
「おれはそれでいいよ」
「では、後は制服について、と宣伝だね」
「せいふく？　せんでん？」

あれ、言葉が通じなかったか。という事はまだ、この時代には無いという事か・・・中世レベルだものな。

「制服というのは・・・そうですね、店員全員が着る、統一された服といった感じでしょうか。メイドさんの服を参考に可愛らしく作ろうと思っているのですが」
「・・・あなたの趣味で？」
「そうですけど、それ聞くのやめませんか？　居心地が悪くなるので」

いや、だいぶ居心地悪いんだけどね。すでに。

「宣伝というのは、街の人たちにこの店のことを知ってもらおう、という事です。店がある事を知らないのに、お客がやって来る事はありえません」
「・・・それはそうね・・・」
「宣伝については・・・僕と姫で考えます。ワイアールさんとキュレさんは店員さんを探してください。出来れば、身元がしっかりしていて、口が堅くて信用できる人を」
「・・・確かに。その点は注意すべきかも・・・」
「どういう事？」
「・・・後で説明してあげるわ・・・」

口が堅くて信用できる人、というのは必須事項だ。どれだけ新しいレシピがあろうとも、材料が特殊な物でない限り真似することは容易だ。いずれはレシピが流出するとしても、遅ければ遅いほどいい。

この店が人気になれば、その秘密を探ろうとして金貨(かね)をチラつかせる者が必ず出てくるだろう。

「シャーリーには制服のデザインをお願い」
「はい、分かりました。メイド服を参考に、ですね」
「うん」

後は、ワイアールさんを特訓して・・・。あれ？　ミュウがこちらを睨んでいますよ？

「わたくしにも何か、仕事を与えなさいよ・・・！」
「・・・えーと」

そんなに泣きそうな目で見られても。

「えー、ではミュウにも僕たちと一緒に宣伝を考えてもらおうか」
「し、仕方ないわね。わたくしの力を貸してあげますわ！！」

姫、やれやれ・・・みたいな顔でため息つかないで。

◇　◇　◇　◇　◇

「木版画をやりたいと思います」

俺の言葉に姫とシャーリーが沈黙を持って返した。・・・なんか、また変な事を言い出した、とか思ってそうな気がする。
まあいいか・・いつものことだ。

「ようするに、木の板に絵なり文字なり刃物で彫って、インクをつけて紙にぺったんと押し付ける。こうする事によって、同じ絵や文字が書かれた紙を大量に作る事が可能になります」
「何でもない事のように言っているが、それは凄い技術ではないのか？」
「わたくしもそう思いますわ！」

まあ、元の世界でも中世時代にはまだ無かったはずだし、こちらでもたぶん発明されていない技術だ。

「いやまて、だがそれだと絵や文字が逆さまになるのでは？」
「さすが、姫。いいところに気がついたね。そうならないように、文字は左右逆に彫っておくんだよ」
「いつもながら、アフィニアには驚かされるな・・・本当に、アフィニアが考えたのか？」

あ、さすがに疑われている。いつもは見て見ぬ振りしてくれるんだけどな。
ミュウは・・・なんか話に付いていけてないようだ。安心。

「そ、そうだよ？」
「それならいいのだが」
「ま、まあ、簡単な地図とかも載せるつもりだから。・・・後はどんな絵にすればいいか考えてね？」
「・・・絵か・・・」

「それなら、わたくしに任せるがいいですわ！」

自信なさげな姫と、逆に無駄に自信に満ち溢れているミュウ。

何か果てしなく不安だが、この才能に関しては俺も幼稚園レベルだ。

「仕方ないから、ミュウにお任せします。お客がいっぱい来てくれそうなのを頼むね」

「わたくしに任せておけば万事大丈夫ですわ！！」

薄い胸に手のひらを当て、すごく自慢げに話す彼女を見て・・・

ちょっと早まったかな、と思ったのだった。

## 18話　「モルドレッド」

「久しぶりですね、屋敷にお戻りになるのは」

ワイアールさんのお店新規開店計画が進む中、俺はシャーリーをともなって屋敷に戻る事になった。

別に学院を辞めたとかではない。

母さまから顔が見たい、アフィニア成分が足りないなどと言われたこともあるが・・・。主な目的は、使い魔であるモルドレッドを迎えに行くためだ。

入寮して以来、寮母のクレアさんとずっと交渉していたのだ。その結果、世話をきちんとする事、何か問題が起きたら責任を全部取る事、で寮で飼ってもいいことになったのだ。

この寮は学院の敷地内にあるため、クレアさんにはかなりの無理を言ったのだろうと思う。

まあこれで、モルドレッドの訓練も出来る。

「今夜は家に泊まって、明日学院に帰ろうと思う」

「旦那様と奥方様が大変お喜びになると思います」

揺られる馬車の中から、小さな芽をつけ始めた木々を見つめる。

元の世界なら、春が来たとでも言うのだろう。

「学院に入ってからもう2ヶ月半か。時間が経つのは早いなあ」

「アフィニア様・・・」

我が家に着くのは昼過ぎになりそうだ。

◇　◇　◇　◇　◇

「お嬢様、お帰りなさいませ！」
「ただいま。フィオレさんはお変わりないですか？」
「はい、おかげさまで」

懐かしい我が家だ。ずいぶんと離れていたような気がする。

「父さまと母さまは？」
「旦那様はお城へ行っておられます。奥様は居間でお嬢様をお待ちになっておられますよ」
「ん、分かった。行ってみるよ」

ぺこぺこ挨拶しているシャーリーを連れて、母さまがいるという居間へと向かう。
屋敷の中は、あまり変わっていないようだった。まあ2ヶ月半で大幅に変わっていたら驚くが。
居間への扉をゆっくりと開ける。

「ただいま帰りまし・・・・・・」
「お帰りなさいっ！　アフィニアちゃんっ！！」

挨拶の途中で母さまに抱きつかれる。

「ちょ、ちょっとお待ちください、母さま！」
「ああ、アフィニアちゃん。お母さんね、とおっっっても寂しかっ

たのよ！？」
「・・・っ！・・・・！」

未だ母さまの胸ほどにしか身長の無い俺の顔は、２つの暴力的な膨らみに埋もれてしまう。
見なくても、今、俺の顔は真っ赤になっている事だろう・・・。
うれしい。うれしいのだが・・・同時に恥ずかしい。

「アフィニアちゃんを堪能したわ～」
「・・・うううう」

ひとしきり抱きしめて満足したのか、母さまはにっこりと笑って放してくれた。
一緒に来たシャーリーはといえば、その様子をまるで微笑ましいものでも見るように眺めている。
まあいいさ、次はシャーリーの番だろうから。

「シャーリー、今度はあなたを堪能させてね？」

ほらね。

母さまがシャーリー成分をたっぷりと補給した後、やっと談話タイムとなった。
シャーリーの顔は赤いままだったが、いつもの事ではある。
基本、シャーリーは家族に飢えているところがある。・・・昔の事を考えれば当たり前だと思うのだが、同時に彼女は母さまの養女にならないか、との誘いを断り続けてもいるのだ。
あくまで彼女は、使用人としての立場を崩そうとしないのだが。

「今日は泊まっていけるのでしょう？」
「はい、そのつもりです。学院に帰るのは明日の昼からにしようと思ってます」
「それなら今晩はひさしぶりに私が腕を振るおうかしら」
「それは楽しみです」

母さまの料理は美味しいからな。
母親の手料理。小さな頃からの夢の一つであったものだ。

「ですが、母さま。まずは夕食よりも昼食です。何か用意していただけると嬉しいのですが」
「そうね、忘れていたわ。さっそく用意させましょう」

チリンチリン、とベルを鳴らす母さま。
すぐに扉が開き、メイドの一人が入ってくる。

「奥様、何か御用でしょうか？」
「この子たちの昼食を用意してあげて欲しいの」
「食堂で今、用意しているところですよ」

ああ、俺達待ちだったか。母さまとの話が、どれだけかかるか分からないからな。
先に昼食を食べて、それから俺の使い魔に会うとしよう。

「シャーリー、食堂に行くよ？」
「はい。アフィニア様」

◇　◇　◇　◇　◇

「モルドレッド～、元気にしてたか？」
「がうっ！」

屋敷の庭に作った、犬小屋ならぬ虎小屋でモルドレッドと再会の抱擁を交わす。
少しばかり大きくなったようだが、それも仕方ない。体の成長を抑制するためには、こまめに魔法を掛けなければならないからな。
これも、モルドレッドを寮で飼いたい理由のひとつだ。

「モルドレッド、お久しぶりです」
「がう、がう！」

モルドレッドはシャーリーに特に懐いている。当然といえば当然かもしれない。
命の恩人である事を、こいつも良く分かっているのだろう。

「モルドレッド、おまえも学院寮に住める事になったぞ」
「がう！（やった！）」

うむ。喜んでくれているようだ。精神感応とかないし、動物と話をする能力も無いので想像だが。

「久しぶりに訓練しようか・・・行くよ？」
「がうっ！」
「お付き合いします、アフィニア様」

いつもの場所に向かう。屋敷の敷地内にある、近くの森なのだが。

そう、こいつを拾った森だ。
ここで来るべき時に向けて、戦闘訓練を続けてきたのだ。
「よし、ここらでいいかな。モルドレッド、Ｇｏ！」
その声に反応して、モルドレッドが走る。
次々出される俺からの指示で、飛んだり跳ねたり曲がったり、止まったりを繰り返す。
「うん、良い感じだね。２ヶ月も訓練してないから、少しは鈍(にぶ)っているかと思ったんだけど」
「アフィニア様が前に考えられたメニューを、ちゃんと実践していたのでしょう」
「そうみたいだね。・・・よし、モルドレッド、あの岩に向かって炎の矢(フレイムアロー)」
「がうっっ！！」
その指示でモルドレッドは立ち止まり、気合の入った吠え声を上げた。
同時に首輪の一部が光り・・・、モルドレッドの眼前(がんぜん)に炎の矢が３本出現する。
ドシュドシュドシュ、という音とともに発射された炎の矢は、近くの岩に当たって砕け散った。
「続けていくよ？、火球(ファイアボール)」
前回と同じように、吠え声に続いて首輪の一部が光り・・・今度は紅蓮の大きな火球が出現した。
ドンッ、という音がして、直後に起きる大爆発。

「うわ！」
「きゃあっ！」

意外にかわいい、シャーリーの悲鳴。
爆発の衝撃波に閉じていた目をゆっくり開けると、先程の岩は跡形もなく砕け散っていた。
凄い威力だ。

「うん、完璧。シャーリーに作ってもらった呪符も問題なさそうだね」
「ありがとうございます」
「いや、礼を言うのはこちらなんだけど・・・」

まあいいか。

「モルドレッド。後、メニューを3回程こなしたら、帰って食事にしよう」
「がうっ♪」

おお、張り切ってる張り切ってる。エサのパワーは凄いな。
何か、さっきよりも動きがいいような感じがするし。

「アフィニア様」
「ん？　何だい、シャーリー？」
「あそこに」

シャーリーの指差す方向に目をやると、そこには一匹の野ウサギがいた。
向こうもこちらに気付き・・・一瞬視線が絡(から)んだような気がした。
逡巡(しゅんじゅん)はほんの数秒。野ウサギは文字通り、脱兎の如く逃げ出した。

「野ウサギか、母さまが喜んでくれる。・・・モルドレッド、Ｇｏ！」

夕食の席にウサギの肉がのぼったのは言うまでもない。

◇　◇　◇　◇　◇

翌日の夕方頃、学院寮に戻ってきた俺たちを出迎えたのは、ミュウの満面の笑顔だった。

いつ帰って来るかなど、彼女には伝えていなかったはずなのだが。

「ええと、姫？」

「どうやら版画とやらの下絵が完成したらしいのだ」

「ええ、わたくしの最高傑作ですわ！！」

なるほど。絵が完成したので、取りも直さず寮に駆け付けたと。

「姫はもう見たの？」

「いや、私はまだ見せてもらってないが。どうやら、アフィニアに最初に見てもらいたいようだぞ？」

「ふふ。自分の才能が恐ろしすぎますわ！」

どうやら絵を見ない限り、玄関から中へ入れさせてもらえないらしい。

ミュウだから仕方ない。

「シャーリー、馬車の中のモルドレッドをお願い」
「裏庭でよろしいですか？」
「うん。家から持ってきた小屋は、後で設置するから」
シャーリーが立ち去る。とりあえず彼女に任せておこう。
「それでは、見せてもらえる？」
「ええ、よろしいですわ！！」
「・・・へー。うん、良い感じに出来てると思うよ？」
ミュウの持ってきた版画の下絵は、意外にうまく描けていた。
本人が言うように、最高傑作だとか自分の才能が恐ろしいとかは言い過ぎだと思うけれど。
しかし一度しか食べてないのに、このクレープ美味しそうに描けてるな。
「もっと褒めるがよろしいですわ！」
ミュウは放っておいて、この下絵を元に版画を完成させるとしよう。
チラシの他には、店の宣伝で良い計画は無いだろうか？
俺は思考に沈みながらも姫とともに自室に向かった。
「何を悩んでいるんだ？」
「これ以外に何かいい方法がないかと思ってね」
「・・・ずいぶんと入れ込むんだな」
確かに、ただ寮の先輩に頼まれただけにしては、入れ込み過ぎているのかもしれないな。

姫は何か、とても言いにくそうに言葉を続ける。
「その・・・何だ。アフィニアは・・・」
「どうしたの？　姫らしくないね」
竹を割ったような、という言葉がぴったりな姫らしくもなく、めずらしく言いよどんでいる。
だが、やがて踏ん切りがついたかのように質問してきた。
「アフィニアは！・・・年上が好みなのか！？」
「ええっ！？何でそんな話に！？」
「いや、なんと言うか、いつになく親身になっているような気がして。だから、アフィニアはキュレさんのような人が好みなのかと思ったのだ」
「ええと、好みか好みでないかと言われれば・・・、年上は嫌いじゃないけれど。たぶん、そう言う事ではないんだと思うよ？」
何となくだが、今は分かっている。
「たぶんだけど、姫やシャーリー、寮の先輩たち。みんなで一つの事に取り組むのが楽しいんだと思う」
「そ、そうなのか？」
「あと、ミュウもメンバーに入れてもいいよ？」
「付け足しはいりませんわ！」
部屋の扉をバン、と開けて入ってくるミュウ。
まあミュウが付いて来てるのは知ってたが。・・・今まで扉の外で、部屋の中に入ろうか悩んでいたようだ。
強気なようでいて、ミュウは案外弱気というか、臆病なところがある。

「部屋ぐらい気にせず入ってくればいいのに」
「2人の雰囲気が甘々過ぎて、入るに入れなかっただけですわ！・・・・お友達の部屋に入るのは初めてですの」
「後半、声が小さくて聞こえなかったんだけど」
「うるさいですわ！」

本当は聞こえてたんだけど。まったくミュウは・・・こういうのもツンデレとか言うのか？
正直「え？友達だったの？」とか言ってみたい衝動に襲われるが。
空気は読むべきだろう。
あと、姫。甘々・・・とかつぶやきながら、恥ずかしがらないで。

「ふう。ワイアールさんのお店の新規開店も近いし、もう少し考えてみよう？」

## 19話　「開店」

店が開店するその日まで、ワイアールさんには修業してもらう事になった。
泡立て器をうまく使いこなす事が大事なのだ。
「8分立てか、9分立てぐらいで止めて。角が立つぐらい」
よく冷やした生クリームを、泡立て器でかき混ぜる。
だが、慣れていないと案外難しい。

店員も決まった。キュレさんの知り合いという3人だそうだが、とても信用できるとの事。
しかも中々可愛いかったし、シャーリーの作ったメイド風制服も似合っている。
シャーリー、上出来です。

それ以外にも、店内の飾り付けとかチラシとか、試食会とかサクラとか・・・俺が思いつく限りの計画を立て、そして準備していった。
そしてついに、その日がやって来たのである。

そこは戦場だった。
いやまあ、いきなり何か、と思うかもしれないが。
「忙しすぎるって、コレ！」
つい、口から小さく愚痴が出てしまう。

店が開店した1週間、半額期間中は忙しくなるだろうからと手伝いをかって出たのだが。ある意味予想通りというか、目が回る忙しさだった。

俺は朝から生クリームを泡立て器でかき回し続けている。ずっとシャカシャカシャカシャカシャカ、と。呪文の力で回復しながらやっていなければ、今頃腕が痛いと泣き叫んでいたかもしれない。

ワイアールさんは鉄板で生地を、竹とんぼのような器具（昔見た物を見よう見真似で作った）で広げる作業を続けているし、シャーリーも俺たち2人のサポートで大忙しだ。

まあ料理出来るのが俺たちだけだから仕方ない。

朝から店の前には、ずっと行列が並んでいるのだ。

もう昼も過ぎたのだが一向に途切れる気配がない。まあ、「旨い」とか「甘くて美味しい」とか、良い感想が沢山聞こえてくるのは嬉しいのだが。

「今日は昼食は諦めるしかないか」

「そのようですね」

「姫やミュウも頑張ってるかな」

姫とミュウが担当しているのは行列の管理だ。並ぶのを客に任せっぱなしにしていると、割り込みや喧嘩が始まってしまうからな。武器を持つのが普通のこの世界で、喧嘩とか勘弁してほしい。

売り子はキュレさんと女性店員3人だ。

この4人は息もぴったりで、次々とお客さんを捌（さば）いている。頼もしい限りだ。

朝からは用事があって駄目、という事だったが・・・、ララサさんとササラさんの双子も、もうすぐ手伝いに来てくれるという事だったからな。もう少しの我慢だ。

「僕は休めないだろうけどな」

今日開店するにあたって、学院からサクラをかなりの人数呼んでおいたが・・・必要なかったかもしれない。

うん、とりあえずは大成功だ。まだまだ今日が終わるのは先だろうが。

ワイアールさんの店が開店してから半額期間が終わるまでの1週間の間、俺たちは毎日クタクタになるまで働く事となった。

◇　◇　◇　◇　◇

「これ、お給金。多めに入れておいたから」

「ありがとうございます」

今日は開店して以来、初めてとなる定休日だ。

本来ならば昨日、給金を渡してくれるつもりだったらしいのだが・・・この1週間働きづめに働いたため、ワイアールさんも含め俺たち全員倒れる寸前というありさま。

だからさっさと帰って休み、全ては明日にしようという事になったのだ。

それで今、俺たちはワイアールさんの店に集まっている。

「うわ、この小袋、中に結構入っていません？」

「まあこれぐらいしか出来ないからね」

「いいんですか？半額期間中だったから、儲けなんてあまり出ていないでしょうに」

「今日までたくさん手伝ってもらったからね、ほんの気持ちだよ」
うむ。貰えるものは遠慮せずに貰っておこう。
1週間も働けば、店にも愛着が湧く。準備期間も含めればどれぐらいになるか。
だが、俺たちは今日でお役御免となる。やはり学院を辞めて働くというのならともかく、俺たちがずっとこの店に掛かりきりになるのはあまりよろしくない。俺たちは学院生なのだ。
実際、この店に関わるようになってから授業の出席率が悪くなっているし、この1週間はまったく出ていない。
ここらが潮時だろうと思う。
俺がそれをワイアールさんに伝えると、嫌な顔一つせずに了承してくれ、今日の事となったわけだ。

「今日まで本当にありがとうね」
「い、いえ、こちらこそ」

自分より遥かに年下の俺たちなのに、きちんと頭を下げられるこの人はやはり真面目な人なのだろう。
頼りない、という言葉がぴったり合う人という評価は変わらないが。

「いつかまた、一緒に働けるといいですね」
「そうだね。では、アフィニアさん、セラフィナさん、シャーリーさんにミュウさん。またね」
「「「またね」」」

まだ用事があるというキュレさんを残し、俺たちは店を辞した。
「アフィニア、今から学院に帰っても3時限目にしか間に合わない

し。少し街をぶらついて帰らない？」
「それは良いですわ！」
姫の意見にすぐさま同調するミュウ。昨日まで働き通しだったからな、それもいいか。
「シャーリーもそれで良い？」
「はい。私はアフィニア様に付いていくだけです」
いつも聞く、シャーリーのその意見は本当はあまり宜しくない。宜しくはないのだが、男ゴコロ的には密かに嬉しいのも確かで少し複雑だ。
「では行くとしますか。で、どこに行く？城門前広場にするの？」
「そうだな、やはりあそこだろうな」
城門前広場は露店が多く立ち並ぶところだ。見て回るだけでも楽しいだろう。
俺以外は。
・・・俺は修行に向かう苦行僧のような心持ちで姫たちに付いていくのだった。

◇　◇　◇　◇　◇

「しかし、銅貨１７枚。８５０シラか・・・結構、奮発したなワイアールさん」

それなりに良い物を食べて1食10シラ程度。1週間の労働の対価としては多すぎだろうと思う。
まあ、アイデア料とか、その他色々入ってるのかもしれないが。
今は露店の一つ、アクセサリーなんかを扱っている店に姫と2人でいる。他の2人は早々にどこかへ行ってしまった。まあ、もう小さな子供じゃないのだから気にする事もないのだが。

「何か言った？アフィニア」
「何でもないよ姫。でも何か、いつもより楽しそうだね？」
「いや、働いて給金を貰ったのは初めての経験だからな。何を買おうか楽しみなんだ」

なるほど。初任給で何を買うか、という感じか。
あれ？

「でも、前に姫、冒険者ギルドで依頼の報酬貰ってたと思うんだけど」
「あれは・・・働くというより、訓練という感じだったからな」

それは確かに。
俺も貰ったお金は使わず貯めたしな。

「では、僕も初給料で何か贈り物でもしましょうかね」

小声でつぶやいて俺はプレゼントの物色（ぶっしょく）を始めるのだった。

「中々コレだ、というのが無いなー」
「私はもう買ったぞ」
「え？、そうなんだ。母さまと父さまに贈り物でもしようかな、と思ってるんだけど・・・姫も一緒に選んでくれない？」

「私でいいのか？」
「それはもう、姫で・・・」
「きゃ！」
「あっ！・・・っと、ごめん！」

ドタッ、と倒れる人影。どうやらよそ見をしていたせいで、前方に人がいた事に気が付かずぶつかってしまったようだ。

「だ、大丈夫？怪我は無い？」
「・・・い、いえ、怪我はありません。大丈夫です」

俺より三つか四つ年齢（とし）の低い小さな子供。
赤いショートカットで、俺の胸ぐらいの身長の女の子だ。
手を差し伸べるが、女の子は一人で立ち上がってしまった。

「・・・それじゃあ」
「待ちなさい」

立ち去ろうとした女の子の腕を掴んで止める姫。
え、えーと。何？

「アフィニア、お金ちゃんとあるか？」
「え・・・！？」

姫に言われてとっさにポケットを探る。財布は、ある。だが、さきほどワイアールさんから貰ったばかりの給金袋が無い。俺は姫に手振りで伝える。

「やはりな。アフィニア、どうやらだいぶ前から狙われていたようだぞ」

「そ、そうなんだ」

まったく気が付かなかった。こんなに人通りが多い場所では、魔法の探知など意味が無い。

姫たちのように、野生の感覚というのを磨かなければならないのだろうか。

だが・・・、どうしよう。こんな状況、初めてでどうすればいいのか分からない。

女の子はじっと俯いて、一言も喋らない。

「姫、この子どうするの？」

「このまま警邏（けいら）の騎士が来るのを待って、引き渡すのが普通だが」

「そうしたらどうなる？」

「罪には罰がある。取り押さえられたとはいえ、すでに盗んでいるわけだから・・・」

まだ小さな女の子だからだろうか。可哀想、というのが先に立ってしまう。

だが周りで「スリだってよ」などという、囁（ささや）き声がどんどん広まっていく。

「姫、場所を変えよう」

「・・・言うと思った」

神妙（しんみょう）な女の子と姫とともに、俺は足早にその場から移動する。

とりあえずは・・・どこかの飲食店にでも入るべきか。

数時間後、合流した時にシャーリーから拗ねた目で見られ、ミュウから「置いていかれた」とネチネチ文句を言われる事になるのだが、この時の俺は残り2人の事などまったくど忘れしていたのだっ

た。

◇　◇　◇　◇　◇

「名前を聞かせてもらえる？」

近くにあった軽食屋に入ったあと、軽く食べるものと飲み物を注文した。

料理を待っている間、とりあえずといった感じで尋ねてみたのだが・・・やはりというか返事は無かった。

「ふむ。で、どうするつもりだ？」

「深く考えたわけではないけれど・・・」

上から下までざっと見たところ、少女はとても薄汚れた格好をしていて、お風呂にあまり入っていないのか少しばかり臭った。体は小さくガリガリで、はっきり言うと痩せっぽちだった。

ちゃんとご飯食べてる？と聞いてみたくなる程だ。

「盗賊ギルドの関係者かな」

「それにしては身なりがボロすぎない？」

俺たちのつぶやきに露骨に反応する女の子。盗賊ギルドに所属しているならば何も問題はない。だが、逆であれば少々まずい事になるだろう。

盗賊ギルドというのは、この王国にある無数にあるギルドの一つ

だ。
ギルドとは互助会のようなものであり、王国内だけのものもあれば、大陸規模のものもある。有名なところを言えば冒険者ギルド、商人ギルド、職人ギルド、魔術師ギルドなどだ。
盗賊ギルドも表には出てこないが王国認可のギルドであり、ギルド員に一定のルールを課すことで逆に王国の治安に貢献している。基本的に王国内でそういった仕事をするときは、盗賊ギルドに所属するか許可を貰う事が条件となっており、得た金銭の一部を納める必要があるらしい。

それだけに、ギルドに所属&許可を貰っていないモグリには厳しい制裁が待っているというが。

「盗賊ギルドに許可は貰っているの？」
「・・・」
「う～ん、だんまりか」

「お待たせしました～」と店員がチキンのサンドイッチとミルクを持ってやって来た。
とりあえず食べようか、と思ったが・・・女の子の視線が気になって食べれない。なにしろ、親の仇でも見るような視線なのだ。・・・姫も食べにくそうだ。
「た、食べる？」
「・・・」

聞いてみたのだが、首を横に振って拒絶された。だがサンドイッチから絶対に視線を外そうとはしないのだ。
お腹がく～、と鳴っているようだし。

「あ～、僕、お腹いっぱいなんだけど、誰か食べないかな。捨てるのは勿体ないなー」
「あ・・・」

強引に女の子の前にサンドイッチの皿を置く。よっぽどお腹が空いていたのか、誘惑に負けてガツガツと食べ始める女の子。ふふふ、勝った。

姫、そんな温かな目で見ないで。

「こんな事を聞かされても困るだけだろうけど・・・こんな事続けていたら危ないよ？誰も彼も許してくれるわけではないから」
「むしろ、今回が奇跡のようなものだな。ギルド未許可なら命の危険さえあるからね」

だが結局、最後まで女の子が俺や姫の言葉に答えてくれる事は無かった。
警邏（けいら）に突き出す気も無かった俺は、店の外に出たところでその子と別れた。名前も知る事のなかったその女の子と再び会えるかは、今の俺には分からない事だった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3648z/

アフィニア日誌

2012年1月15日02時48分発行